

2024 年度

長崎県立大学 教育開発センター

活動報告書

長崎県立大学
教育開発センター

目次

1. 巻頭言.....	3
教育開発センター センター長 橋本 優花里（地域創造学部 公共政策学科）	
2. 構成員.....	4
3. 会議開催状況	5
4. 主な役割分担	6
5. 活動報告.....	7
<佐世保校活動報告>	
教育開発センター佐世保部会におけるプロジェクトマネジメント	7
教育開発センター 副センター長 大澤 裕次（経営学部 国際経営学科）	
【2021年入学（4年生）対象】教養セミナーテキスト2021見直しアンケート まとめ.....	15
教育開発センター委員 大久保 文博（経営学部 国際経営学科）	
授業改善・授業評価アンケート	19
教育開発センター委員 四本 雅人（経営学部 経営学科）	
座談会・他大学や産業界との連携等調査.....	32
教育開発センター委員 前田 竜孝（地域創造学部 公共政策学科）	
教育開発センター委員 芳賀 普隆（地域創造学部 実践経済学科）	
<シーボルト校活動報告書>	
シーボルト校の活動を振り返って	68
教育開発センター 副センター長 柳田 多聞（国際社会学部 国際社会学科）	
2024(令和6)年度ALCS学修行動比較調査結果報告.....	70
教育開発センター委員 齋藤 正也（情報システム学部 情報セキュリティ学科）	
学修成果可視化の仕組みづくり	86
教育開発センター委員 藤沢 望（情報システム学部 情報システム学科）	
2024年度入学時調査の結果報告	107
教育開発センター委員 高比良 祥子（看護栄養学部 看護学科）	
教育開発センター委員 齋藤 正也（情報システム学部 情報セキュリティ学科）	

2024 年度卒業時調査の回収率について	120
教育開発センター事務局 福野 健二（シーボルト校）	
2024 年度 FD 研修会（全学）	122
教育開発センター委員 吉光 正絵（国際社会学部 国際社会学科）	
教育開発センター委員 駿河 和仁（看護栄養学部 栄養健康学科）	
2024 年度 FD 研修会（教養セミナー）	147
教育開発センター委員 吉光 正絵（国際社会学部 国際社会学科）	

1. 巻頭言

教育開発センター センター長 橋本 優花里

地域創造学部 公共政策学科 教授

昨年度に引き続き、今年度も全センター委員の先生のご協力の下、教育開発センターの活動報告書を発行することができました。執筆をご担当いただいた先生方ならびに編集作業等に從事していただいた職員の方々のご尽力に感謝申し上げます。

教育開発センターでは、ほぼ毎月定例的に会議を開催し、各業務を遂行しています。会議以外においても各業務にお時間を割いていただくことが多く、他の委員会等に比べて委員の先生方や職員の皆様の負担が大きくなっていることには大変心苦しく感じています。一方で、先生方や職員の方々の主體的な取り組みが、センター業務の円滑な遂行とそれに伴う本学の教育力の向上に直結していることを強く意識しています。次年度からは、教員評価において教育開発センターの業務分担のポイントをアップすることが決定されました。このことは関係の皆様のご尽力に対して、大学が高く評価していることの表れだと理解しております。大学全入時代による学生の多様化に歯止めがかからない現在、教育開発センターが担う教育への支援はますます重要になると考えています。全学的なご支援、ご協力の継続をお願いすると同時に、センター委員ならびに職員への温かい応援をいただきますよう重ねてお願い申し上げます。

さて、今年度、私は「米国初年次教育学会」に参加しました。久しぶりの現地での参加になりましたが、コロナ禍を経ても学会の勢いは衰えることはなく、より多様な話題が展開されている印象を受けました。その中で、初年次教育に加えて手厚い入学前教育を行っている発表を聞きました。我が国においては全国的に年内入試が拡大されている傾向にあります。本学においても年内入試が拡大されることになれば、初年次を迎える前の入学前教育が重要になります。また、私は今、副センター長の柳田先生と共に、第4クォーターで「共生社会のキャリア」という全学教育科目を担当しています。この授業では受講生の学生にインタビューレポートを課しており、すべてのレポートに目を通し、その点数を成績評価の一部としています。レポートの内容について柳田先生と所感を共有したところ、よくできる学生とそうでない学生のギャップが非常に大きいということで一致しました。1年生の最終段階でそのような差が出ていることは、2年次以降の専門課程の指導においてかなりの苦労が生じることにつながるだろうと容易に想像できまし

た。

全ての学生ができるだけ足並みをそろえて専門課程のスタートラインに立てるよう、入学前教育や初年次教育の在り方を今後、さらに検討していく必要性を感じております。センター委員の先生方をはじめとして、全学的なご協力の下、本センターのさらなる充実を図る所存です。皆様からのご知見をお待ちしております。

2. 構成員

役 職		氏 名
センター長	公共政策学科 教授	橋本 優花里
副センター長	国際経営学科 教授	大澤 裕次
//	国際社会学科 准教授	柳田 多聞
経営学部選出	経営学科 准教授	四本 雅人
// (IR)	国際経営学科 講師	大久保 文博
地域創造学部選出	公共政策学科 講師	前田 竜孝
// (IR)	実践経済学科 准教授	芳賀 普隆
国際社会学部選出	国際社会学科 教授	吉光 正絵
// (IR)	国際社会学科 准教授	柳田 多聞
情報システム学部選出	情報システム学科 講師	藤沢 望
// (IR)	情報セキュリティ学科 准教授	齋藤 正也
看護栄養学部選出	栄養健康学科 教授	駿河 和仁
// (IR)	看護学科 教授	高比良 祥子
学生支援課長		前田 士
シーボルト校学生支援課長		田口 利通

3. 会議開催状況

教育開発センターでは、毎月 1 回程度会議を開催している。

▼教育開発センター会議

- ・第 1 回 2024 年 05 月 16 日(木)開催
- ・第 2 回 2024 年 06 月 20 日(木)開催
- ・第 3 回 2024 年 07 月 22 日(月)開催
- ・第 4 回 2024 年 07 月 24 日(水)メール審議
- ・第 5 回 2024 年 09 月 11 日(水)開催
- ・第 6 回 2024 年 10 月 25 日(金)開催
- ・第 7 回 2024 年 11 月 28 日(木)開催
- ・第 8 回 2025 年 01 月 23 日(木)開催
- ・第 9 回 2025 年 02 月 27 日(木)開催
- ・第 10 回 2025 年 03 月 21 日(金)開催

▼佐世保部会

- ・第 1 回 2024 年 05 月 27 日(月)開催

5.活動報告

教育開発センター佐世保部会におけるプロジェクトマネジメント ～2024 年度の活動を振り返って～

教育開発センター 副センター長 大澤 裕次
経営学部 国際経営学科 教授

1. はじめに

副センター長として、2年目を終えた。今年度、佐世保部会のメンバーは、1名が交代したのみで、他のメンバーは残留したため、チームとしての練度は、前年度より、各段に高まった。このため、今年度の佐世保部会の運営は、昨年度の枠組みを微修正する程度の変更で済み、円滑なものとなった。

本稿では、今後のセンター業務や、将来、同じ立場に就かれる方の参考になればと考え、この1年間の活動を振り返ることとする。副センター長の立場で執筆しているため、業務を企画した際の狙いや講じた工夫を中心に論じている。具体的な内容については、ご担当の先生方が執筆された各章を参照していただければ幸いである。

2. センター業務の運営方針

昨年度、業務運営方針をセンター内で共有するために、業務マトリクスを策定したところ、使い勝手が良かったため、今年度も同様のマトリクスを作成することとした。すなわち、本学の第4期中期計画に基づく「アクションシート」に列挙されている項目を、「①授業改善・授業評価アンケート、②学修成果可視化の仕組みづくり、③FD 研修会、④座談会・他大学等連携」という四つの行と、「教育部会」と「IR」部会」という二つの列から成るマトリクスに加工した。今年度は、佐世保部会の人員

¹ 小林・山田(2016)は、IR(Institutional Research)について、大学関係者や研究者の間で必ずしも一定の共通の理解があるわけではないとしたうえで、最狭義には「調査データの収集分析、報告といった活動」を指す一方、広義には「全学レベルの財務計画や戦略計画の策定まで、きわめて幅広い活動」を指すものと定義している。IRの定義が困難な理由として、①もともとIRは実践的な活動としてスタートしたために、研究よりも実践が重視され、学問的な定義よりも現実の活動が優先されたこと、②IRが現在でもなお発展を続けており、活動内容が常に広がっていること、③大学の規模、設置者、ガバナンス(分権か集権か)、タイプ(4年制か2年制か)、環境(立地)などによってIRの内容が異なるという多様性があること、の3点を指摘している。

交代は 1 名にとどまったため、その他のメンバーは、担当を変えずに、そのまま留任する扱いとした。

今年度も、センター業務を推進する際の基本方針として、①「定義にこだわるあまり、仕事を止めないこと」と、②「アウトプットを出すこと」を 2 本の柱に据えたが、昨年度 1 年間、この方針の下で活動してきたため、佐世保部会メンバーの理解は格段に深まっており、委員の先生方は、それぞれ自律的に活動に取り組んでくださった。

佐世保部会の主な担当は、先述の課題のうち、①授業改善・授業評価アンケート(教養セミナーの改善取組を含む)、および④座談会・他大学等連携であり、担当教員は、当方のほか、教育部会 2 名および IR 部会 2 名の計 5 名である。限られた人員の中で、プロジェクトを効率的に推進するために、今年度も、教育部会が企画・運営を担い、その成果を IR 部会が分析する事務フローとし、年間スケジュールを表にまとめた。可視化した年間スケジュールをセンター内で共有することにより、各メンバーが予定を立てやすくなるほか、プロジェクトの進捗状況を全員が常時把握できるようになり、作業効率の向上につながった。また、センターの定例会議において作業報告を行う際にも、全体を俯瞰したブリーフィングを簡潔に行うことができ、会議の効率化にもつながった。

3. 個別の活動

次に各論として、佐世保部会が担当した(1)授業改善・授業評価アンケート、および(2)座談会・他大学等連携を中心に振り返ることとする。

(1) 授業改善・授業評価アンケート

① 教養セミナー研修会

今年度は、初めて教養セミナーを担当される先生方および教養セミナーに関心のある先生方を対象として、「教養セミナーの事前研修会」を新たに開催(筆者も参加)した。開催時期については、新任の先生方が参加しやすいよう、任命式が行われる 4 月 1 日に設定した。教養セミナーは、全学教育科目であると同時に、ある程度、学科の自由度も認められているため、センターから、教養セミナーを開講する趣旨やその狙いを説明したほか、参加者間でグループディスカッションを行った。今回の研修について、事後アンケートを行ったところ、参加者からは、有益だったとの意見が多く寄せられており、次年度以降も継続していくべきものと考えられる。

また、教養セミナーは、前期配当科目のため、終了直後の 9 月に、「教養セミナーの振り返り研修会」を実施(筆者も参加)した。とりわけ有用だったことは、他学部・他学科の先生方と意見交換できた点である。参加された先生方は、たとえば、特別な配慮を要する学生への対応など、それぞれに

不安や悩みを抱えておられ、それらを同じ科目を担当する「仲間」と共有し、解決策を議論することができた。また、毎時、行っている「目標の設定と振り返り」の活用方法といった実践的なスキルや、同じ教養セミナーであっても、学部・学科によって運用方法が異なるため、自学科の運用方法を見直す新たな視点を獲得する機会にもなった。実際、筆者が所属する国際経営学科では、学科が自由に組成してよい教養セミナーのコマ数を利用して、1年次の夏季に実施している海外語学研修（フィリピン・セブ島）の英語事前学修やチームビルディングを行うという新たな方向性が定まった。

② 教養セミナーのテキスト改訂

今年度も教養セミナーのテキストを見直し、「守秘義務と個人情報の取扱いについて」という一節を加えることとした。本学では、インターンシップや海外ビジネス研修といった実践演習科目があり、学生が企業等に出向いて、内部データに接する機会が少なくない。また、学生が卒業論文を執筆する際にアンケート調査を行い、個人情報を取得するケースもある。そうした機密情報や個人情報の扱いについて、1年生のうちから高い問題意識を持つよう促す内容となっている。

このほか、「大学生活におけるトラブル対応を学ぼう」の節の演習課題に、昨今、問題となっている「闇バイト」を採り上げたほか、「ICT リテラシー」の節の「パスワードの扱い」では、従来、定期的なパスワード変更を推奨する内容であったものを、総務省の「国民のためのサイバーセキュリティサイト」の最新情報を参考に、固有のパスワードを設定することの重要性を強調する内容に改めている。また、生成 AI の節は、内容を抜本的に見直し、生成 AI の利活用法とその注意点を解説する実践的な内容に改訂した。

③ 授業評価アンケートの回収率向上の検討

授業評価アンケートについては、今年度も回収率の向上策について検討を行った。基本的には、先生方ご自身の振り返りに活用して頂き、改善点等の学生へのフィードバック、およびシラバスへの反映といった一連の PDCA サイクルの流れと意義を改めて周知したほか、教授会や学科会議の場でセンター委員からアンケートのリマインドを行うといった方策をとったが、目ぼしい成果は得られていない。筆者は、もう少し実効性のある方策を検討すべきではないかとの意見を持っているが、センターとしてのコンセンサスは得られていない。この点は、引き続き検討していくべき課題である。

(3) 座談会・他大学等連携

① 座談会

中期計画のアクションシート上、「教員と学生との本学の教育に関する座談会について実施方法等の検討を行い、2024(令和6)年度から実施する」とされており、今年度より、本施行に移行した。今回は、①全員が一堂に会する対面式での開催、②アイスブレイキングのための学生によるキャンパスツアーの実施という新たな工夫を講じたこととした。

昨年度は、シーボルト校と佐世保校をオンラインでつなぎ、1人の教員が総合司会を務める形で試行したが、振り返りアンケートにおいて、対面式を望む学生が大半を占めたことから、今年度は、参加者全員が一堂に会し、対面で行うこととした。また、ディスカッションの十分な時間を確保するために、弁当を支給して行うランチミーティングの時間も設けることとした。検討の段階では、シーボルト校と佐世保校の中間地点において合宿形式で行うというアイデアも提案された。

次に、アイスブレイキングは、参加学生をいくつかのグループに班分けし、会場となったシーボルト校の学生が案内役を務めるキャンパスツアーを実施した。佐世保校の学生は、ほぼ全員がシーボルト校を訪れたことがなかったため、両校の学生は興味津々で会話が弾み、本番での発言も円滑なものとなった。振り返りアンケートでも好評だったため、次年度は、会場となることが想定される佐世保校において、キャンパスツアーを実施すべきであろう。

次に内容面では、昨年度、論点となった、「意見の網羅性」と「学生の匿名性」の2点について、今年度は、次のように取り扱うこととした。

「意見の網羅性」とは、学生の声を可能な限り偏りなく、かつ、漏れなく拾い上げるためには、何名の学生をどのような方法で選出すべきか、という論点である。全学科・全学年から男女1名ずつ選出すれば、9学科×4学年×2名=72名となるが、参加学生が多すぎると全員が発言する機会を得られなくなってしまう。また、統計学的にサンプルの代表性を考慮すれば、無作為抽出は有力な選択肢となるが、おとなしい学生ばかりが抽出されてしまうと、グループディスカッションにおいて、ほとんど発言が出ないというリスクが想定される。さらに、自発的に参加したい学生も一定数存在すると考えられるため、今年度は、昨年度同様、座談会の趣旨を理解し、協力が得られそうな学生を各学科のセンター委員の先生方から2名ずつ(上級生と下級生1名ずつ)推薦していただくことに加え、自薦枠を設け、自ら参加を希望する学生を若干名、募集することとした。結果的に当日1名の病欠があったものの、21名の学生によって活発なグループディスカッションが行われ、所期の目的は達成されたと考えられる。

次に「学生の匿名性」とは、会議における学生の具体的な発言を対外的に明らかにすべきか否かということである。具体的な発言を明らかにすれば座談会の透明性は高まる一方、席上での発言が対外公表されることによって、後から批判の声が寄せられることを危惧し、学生が自由闊達な発

言を躊躇してしまうリスクも考えられる。この点は、昨年度の試行を踏まえ、対外公表する資料については、発言者が特定されない形で、意見の概要のみ記載することとし、その旨、参加学生に事前に周知することとした。

上記のほか、昨年度に引き続き、教員が参加すべきか否かについても改めて検討した。初めて会う他学部・他学科の学生を前に学生がなかなか発言しないリスクが想定されたが、昨年度の試行では、予想以上に活発な意見交換が行われたことから、今年度は、各テーブルに教員1名をファシリテーターとして配置するものの、議事進行は極力、学生に任せることとした。狙いどおり、当日は、学生諸君が自発的かつ自由闊達に建設的な意見交換を行ってくれた。次年度は、これをもう一歩進め、教員は事前のアジェンダ設定と見守り役に徹し、ファシリテーターを学生に任せることを検討しても良いのかもしれない。

② 他大学等連携

中期計画アクションシートには、「教育の質の向上と保証」の一環として、「他大学、産業界等と連携した教育の取り組み状況について調査を行い、必要に応じ更なる推進を図る」ことが明記されている。このため、今年度も、授業、ゼミ、フィールドワーク等、正規の授業から幅広く情報収集することとし、サークル活動などの課外活動や、学生が参加しない教員の純粋な研究活動は、対象に含めないこととした。

こうして、第2回目となるアンケート調査を実施したが、今年度もまた、学科によって回答数が大きく異なる結果となった。100件を超える報告を寄せた学科があった一方、実績の報告がごくわずかにとどまる学科も複数あった。後者のケースは、外部連携のあり方を抜本的に見直す必要性を強く示唆する結果と言えるであろう。あるいは、当アンケートに対する当該学科の先生方の協力が得られていないという可能性も排除できない。先述の授業評価アンケートの回収率が低位にとどまっていることと併せ、もう一歩踏み込んだ対応策を検討すべきものと考えられる。

4. おすびに代えて～センターのマネジメントに関する私見～

今年度も副センター長として、組織運営に腐心した1年であった。この2年間の経験を踏まえた私見を述べ、おすびに代えたい。

アンケートの回収率向上をはじめ、教育開発センターの活動への協力をいかに強化していくかという点は、大きな課題である。この点は、経済学でいう「フリーライダーの問題」に類似していると思われる。教育開発センターの成果を「公共財」と捉えれば、梶井・松井(2000)が指摘するように、

「費用を負担せずに公共財からの便益を受け取ろうとする行動が支配戦略となる可能性がある」と解釈することができる。教育開発センターの組織運営の改善に向け、ゲーム理論や行動経済学の知見を活用していくことは、今後の対応を考察するうえで有益なヒントを与えてくれるであろう。

また、教員の視点に立った主張として、ノーベル生理学・医学賞受賞学者の本庶(2024)は、日本経済新聞の「私の履歴書」の中で、「96年から4年間は研究者としては『本意でない』仕事を任された。京大医学部長の職である。前任者が任期途中で退き、教授会の選挙で選ばれお鉢が回ってきた。大学の学部長といっても大した権限はない。いわゆる世話役だ。」と興味深いコメントを述べている。

いわゆる教学の管理職は、多くの場合、予算権や人事権といったマネジメント・ツールを持っていない。これには、大学の特性上、やむを得ない面があるのも事実である。広田(2013)は、大学における人事考課の難しさについて、「研究者としての能力の評価は、採用や昇進の際を除くと、普段は大学の外の学術団体や研究者のネットワークに委ねられて」おり、「個々の教員の研究面の正確な評価は組織内部のメンバーによってはできない。(中略)大学教員の世界は小中学校の教員や会社員の世界とは異なっている。大学教員の仕事は、同僚や上司がその内容に踏み込んで正確に評価することができないことが普通なのである。すなわち、ある大学教員の教育の中身が専門性に照らして適切かどうか、また、研究成果の水準がどの程度かといったことは、所属する機関の物差しでは適切に測られない(せいぜい、シラバスをきちんと書いているか、論文を何本書いたかなど、外形的・些末な事項に限られる)。」と論じている。

また、大学の組織運営の難しさとして、「システムの上部と下部とでは、まったく異なる価値や目標に準拠した活動がなされている。だから、そこには必然的に対立や葛藤が生じることになる。(中略)大学の維持・存続をめざして戦略的な目標を設定しようとしている学長と、専門職規範に導かれて目の前の教育研究を充実させることに傾倒している個々の教員とは、まったく別のものに向けた情熱や使命感に導かれている。システム内の各層によって、追究される価値が異なる。」と述べている。さらに、そうした対立や葛藤が生じる背景として、「個々の大学教員の研究(やそれを反映した教育)は、機関が設定する戦略的な目標や価値とは別次元にある、知の普遍的価値や真理に直接つながっているものとして受け取られている。国家レベルであれ大学間であれ、競争への最適な適応を目的とすることは、それ自体は人間にとって善でも正義でもない」とし、Cowan(2006)を引用する形で、「上からの改革への大学人の抵抗のある部分は、狭く特殊な価値や目標を押しつけてくる改革に対して、普遍的な価値や目標に向けた営みを擁護しようとする動きであると理解することができる」

と論じている²。

筆者も一人の現場教員であるため、上記の主張には、首肯し得る点が多い。とはいえ、組織運営の目線で見ると、そこにはある種の「合成の誤謬」が潜んでいるようにも思われる。現場教員がレッセ・フェールで教育・研究を行った結果、限られた経営資源が分散し、大学経営が立ち行かなくなるリスクが目の前にちらつく。少子化が急速に進展する中、それは本学に限ったことではなく、私学であれ、国公立であれ、わが国全体に当てはまるリスクである。

広田(2013)の主張は、高度経済成長期やバブル経済期のように経済のパイが拡大している時代には許容される余地があったのだらうと推測されるが、わが国経済が長年、デフレに苦しみ、現下の厳しい経済状況によって、そうした考えは修正を迫られているように思われる。足もとの潜在成長率は、「0%台半ば」という驚くべき数値である³。少子高齢化とも相まって、わが国経済が縮小均衡に入ろうとしている中、予算の「選択と集中」は不可避であり、必然的に優先順位をつけざるを得ない。そして、それを具現化したものが「中期計画」にほかならない。教員は、教育・研究に関する広範な自由裁量の中で、「選ばれる大学」になるために何をなすべきか、経営陣とも十分に意思疎通を図りながら、知恵を絞る時が到来しているのではないだろうか。

今回も、筆者が所管した事項について、制度設計に臨んだ際の基本的な考え方や具体的な論点、さらにはセンターの組織運営について、率直に記述したつもりである。本稿が、来年度以降の活動に多少なりとも貢献すれば幸いである。

参考文献

広田照幸(2013) 序論—大学という組織をどう見るか 江原武一・小沢弘明・羽田貴史・南島和久・大場淳・井上義和. 6 組織としての大学—役割や機能をどうみるか— 岩波書店 3-12

² 広田(2013). 8-9 再引用元: Cowan, Robin (2006). “Universities and the Knowledge Economy”, Brian Kahin and Dominique Foray(eds.), *Advancing Knowledge and the Knowledge Economy*, The MIT Press.

³ 日本銀行(2025)は、「潜在成長率は、推計手法や今後蓄積されていくデータに左右されるうえ、デジタル化の進展などに伴い生産性労働供給のトレンドがどのように変化するかといった点を巡る不確実性も高いため、相当の幅をもってみる必要がある」との「但し書き」を付したうえで、「わが国の潜在成長率を、一定の手法で計算すると、足もとは『0%台半ば』と計算される」との推計結果を公表している。

梶井厚志・松井彰彦(2000)．マイクロ経済学—戦略的アプローチ— 日本評論社 126-131

小林雅之・山田礼子編著(2016)．大学の IR—意思決定支援のための情報収集と分析— 慶応義塾大学出版会 3-5, 7-9

本庶祐(2024)．私の履歴書(21)京大医学部長 日本経済新聞社 2024年6月22日朝刊
記事

大澤裕次(2024)．教育開発センター佐世保部会のプロジェクトマネジメント ～2023 年度を振り返って～ 2023 年度長崎県立大学教育開発センター活動報告書 長崎県立大学学術リポジトリ
<http://reposit.sun.ac.jp/dspace/handle/10561/2039> (最終閲覧日 2025 年 2 月 28 日) 7-13

日本銀行(2025)．経済・物価情勢の展望 2025年1月 (同年1月23、24日開催の政策委員会・金融政策決定会合決定文書) <https://www.boj.or.jp/mopo/outlook/gor2501b.pdf>
(最終閲覧日 2025 年 3 月 12 日) 3

【2021年入学(4年生)対象】教養セミナーテキスト2021見直しアンケートまとめ

教育開発センター委員 大久保 文博
経営学部 国際経営学科 講師

1. アンケート実施の背景・狙い

アンケートの実施の背景・狙いについては、以下の通り学生へ周知した。

教育開発センターでは1年次受講の教養セミナーのより良い講義内容の提供の為、見直し・改善を進めています。教育は、習得して、すぐにその成果・効果を得られるとは限りません。数年後になって学びが生きることも多くあります。1年次の教養セミナーの学びが、大学4年間でどう影響したのかを把握したく、5分～10分程度で終わる簡単なアンケートを用意しました。

2. 回答期間

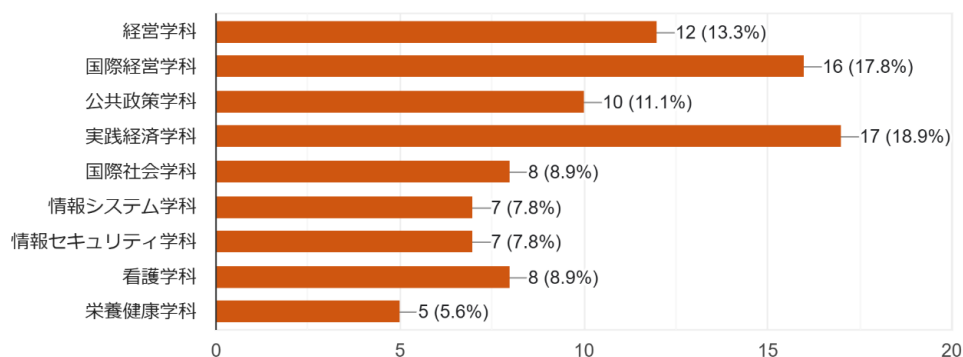
2024年12月4日(水)～12月25日(水)18:00

3. アンケート内容及び結果

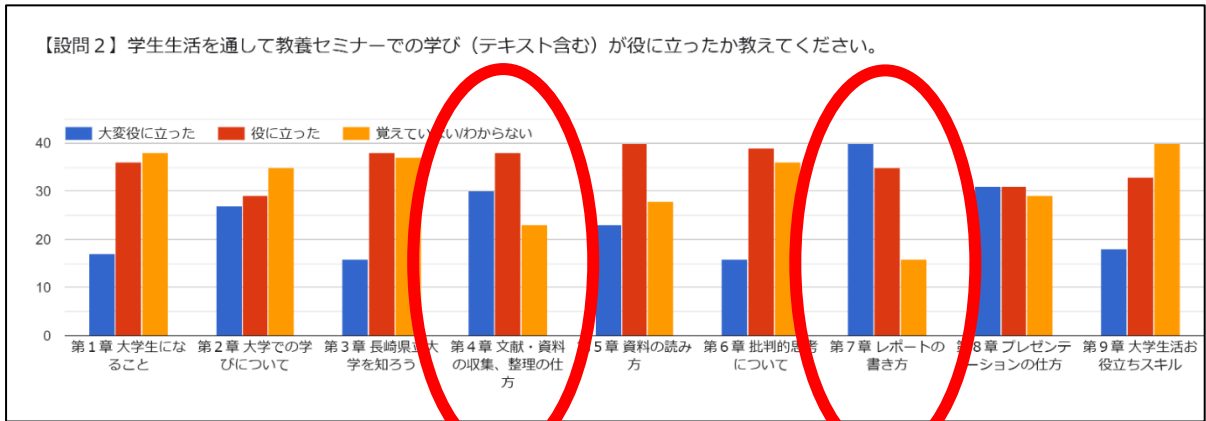
・回答者は91名、その割合は佐世保校61.1%、シーボルト校38.9%であった。

【設問1】所属学科を教えてください。

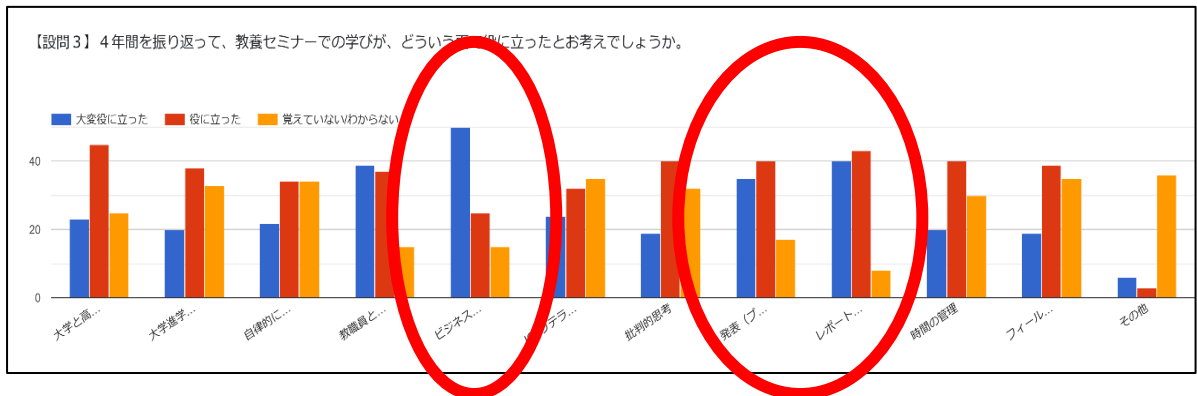
90件の回答



・「文献・資料の収集、整理の仕方」、「レポートの書き方」、「プレゼンテーションの仕方」は学びと習得につながっている一方、その他の部分（とりわけ大学生になること、批判的思考、大学生活お役立ちスキルは良い結果にはつながっていない可能性がある。



・「ビジネスメール」、「教職員とのマナー」、「発表（プレゼンテーション、パワーポイントの作成含む）」、「レポート・論文の執筆（参考文献の記載方法含む）」について役に立つ機会が多かった。しかし、「大学進学のための目的意識のマインドセット」、「自律的に学ぶ姿勢（自己調整学習、PDCA、メタ認知）」、「ICT リテラシー」、「フィールドワークの基本・心構え」では効果的ではなかった。



【設問5】 4年間を振り返る中で、教養セミナーの課題（どのような内容をもっと知りたかったり、学びたかったか等）があれば記入して下さい。20件の回答

・特になし。

・就活についてもっと早く情報を仕入れたかった

・この学科で学ぶことでどのような力が身につく、どのような将来が描けるのかもっとイメージを掴みたかった。

・基礎演習、専門演習の内容をもっと詳しく知りたかった。例えばどのゼミがどのような活動をしており、どのような将来性、方向性に興味がある人に向いているのか等。基礎演習、専門演習の具体的な内容は、2年生のオリエンテーションで知ったため。

- ・授業の組み方などをもう少し教えていただけると組み方に困ることがなかったのではと思います。
- ・大学生生活の中でモチベーションを常に高く持ち続ける方法や、学ぶために大切にしたいことなどを学びたかった。
- ・プレゼンテーションの方法、ロジカルシンキング
- ・パソコンの操作方法について。高校卒業した時に全然なれていない人も多くいると思うから。
- ・就活関連情報についてもっと知りたかった。
- ・ゼミを持っている教授について聞きたかった。
- ・テキストでのインプットだけでなく、論理的思考、批判的思考を意識して議論をするアウトプットがあれば、大学1年生の頃からそれらを意識し続けることができるかもしれないと思いました。
- ・新聞の読み方
- ・佐世保がどういう町なのか歴史を含め知りたかった。
- ・Google クラウドの使い方
- ・佐世保についてもっと深く知ることができたらもっと佐世保を好きになるきっかけになったと思う。
- ・レポートの典型的な書き方や、教授に対して課題等を送る際のメールのマナーや書き方。
- ・就職活動の方法
- ・特になし
- ・特に意味を感じなかったのもっと内容を薄くして生徒それぞれが自分の裁量で自由に使える時間を増やした方が良いと感じました。
- ・Word や PowerPoint 等の基本的な使い方を知りたかった。

・教養セミナーのクオリティコントロール(共通化)を含めてテキストの存在があるが、教員の手法が異なる(悪い意味でクオリティダウン)ことの是非も検討する必要がある。

【設問6】 教養セミナーに対する要望があれば記入してください。20 件の回答

- ・特にありません。
- ・特になし
- ・就活についてもっと重点的に知りたかった
- ・特になし。
- ・なに
- ・2 年生以降は、ゼミでの活動がかなり残りの生活で重要になってくるのが分かったので、1 年生の段階でゼミの活動見学等を増やして欲しい。
- ・講義内での発言の機会がもっと多くあれば、教養セミナーの内容もより定着したのではないかと感じる。少人数かつ教授との距離が近いという点を活かした方が良い。
- ・テキストを使用する教員と使用しない教員がいる。また、コロナ禍でほとんどオンラインだったため、教養セミナーがほとんど機能していなかった。
- ・シンプルすぎて見る気が起きないのでテキストのデザイン性をあげて欲しい。
- ・クラスによってレベルや内容に差がありすぎると思う。先生によって何が役に立つのか考えられて授業設定されているとは思いますが、何も知識が卒業論文のような形式のレポートを提出させるクラスもあれば、本の感想を言って終わるクラスもあった。学生に何を理解してほしいのか基準をもう少ししっかり設定してほしい。
- ・教員のクラスごとに評価レベルや内容に差があったと感じたので、その点を今後改善した方がいいと考えます。
- ・グループディスカッションが好きなので、もう少しグループディスカッションがしたかった。
- ・教授と学生の距離を縮めるような授業を行って欲しかった。
- ・教養セミナーでは特に友達作りや対人関係についても学びたい。その為、授業内でよりお互いが話し合えるような機会を増やしてほしい。
- ・クラスによって講義のやり方や学ぶ内容の質が違ったように感じたので、基準を決めて同じことをやってほしいです。
- ・どうして本アンケートの設問 2, 3 に「役に立たなかった」という項目がないんですか？
- ・図書館の利用をもっと勧めてほしい。
- ・友人の話を聞き、先生によって行なっている内容に違いがあることが分かった。授業の進め方をもう少し似たようなものが良いのではないかと考える。

授業改善・授業評価アンケート

教育開発センター委員 四本 雅人

経営学部 経営学科 准教授

1. 教養セミナー（1学年 全学教育科目）の改善について

(1) 教養セミナーテキストの改訂

教養セミナーテキストの改訂について、前年度に「レポートの書き方」「メールの書き方」「メタ認知」「生成 AI」「大学生のトラブル」についての改訂が行われていたが、今年度の改訂においては、学生の習熟度を高められるように演習課題の追加や文章表現の変更等を行った。また、2 年次以降のゼミやインターンシップ等において、個人情報や公共機関、企業の内部データに触れる機会が想定されるため、1 年次に守秘義務や個人情報の取扱いの基礎について学習しておいた方が今後に繋げることができると考え、導入的な内容を新節として追加した。主な変更点は下表のとおりである。

図表 1 教養セミナーテキストの主な変更箇所と変更内容

▼変更内容	
タイトル	内容
第1章 第8節 大学生のトラブル編	演習課題の追加
第2章 第2節 教職員へのマナー (電話のかけ方、メールの仕方)	演習課題の追加、変更
第2章 第6節 ICTリテラシー	学内のセキュリティ運用に合わせた変更
第2章 第7節 遠隔授業に関する注意事項	学内のセキュリティ運用に合わせた変更
第2章 第8節 生成AIの利活用に関する留意点	教職員と学生に対して出された文書の再掲となっており、文章の表現もかたいたため、全面的な文章の変更
第2章 第9節 守秘義務と個人情報の取り扱いについて【新節】	守秘義務や個人情報の取扱いについて、導入的な内容を追加
第3章 第2節 長崎県立大学でできること	2025年度しまなびの実施方法の見直しに伴い、記載内容の変更
第7章 レポートの書き方	参考文献の書き方が、法律関係のものが例として書かれていたが、本学は法学部のない大学ですので削除して、代わりに「経済学・経営学」分野における書き方に変更
第7章 レポートの書き方	レポート評価のためのルーブリック追加

(2) Google Jamboard の代替アプリの検討

教養セミナーで活用されてきたオンラインホワイトボードアプリ Google Jamboard が 2024

年 12 月 31 日をもって提供終了となったため、代替アプリの検討を行った。検討の対象となったのは、Google スライド、FigJam、Microsoft Whiteboard、Miro の 4 アプリであり、下表が各アプリの機能比較である。

図表 2 Jamboard 代替アプリの機能比較一覧

主な機能	Jamboard	Google スライド	FigJam
	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 直感的な操作性とシンプルな機能が人気 ◎ アイデア出しや思考の整理に便利 ▲ 情報の収集や整理、分析、まとめには不向き × 2024年12月末でサービスが終了 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ アイデア出しから情報の収集、整理、分析、まとめまでできる協働学習に最適のツール ◎ Suiteシリーズの拡張機能を追加することで小学生でも操作可能 ▲ ペンなどの描画機能がない 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ Jamboardで出来ることはほぼ出来る ◎ 凝ったデザインのオリジナル資料を作成するには最適 ▲ 機能が多すぎて目移りがち ▲ 操作に慣れるまで時間がかかる
価格	-	Google Workspaceに含まれる	教育機関から申請する事でエンタープライズ版が無料利用可能
描画	○	-	○
テキスト挿入	○	○	○
画像挿入	○	○	○
動画挿入	-	○	○
リンク挿入	-	○	○
表挿入	-	○	○
スタンプ	-	★	○
コメント	-	○	○
レーザー	○	○	-
投票	-	-	○
付箋	○	★	○
付箋集計	-	★	-
縦書き	-	★	-
ルビ	-	★	-
Jamboard移行方法	-	Jamファイルを「Google スライド」に変換できる「Jamboardコンバーター」の無償提供。提供期間は2024年5月28日（火）～2024年12月31日（火）	移行可能
参考サイト		<p>【公式】 Google スライド</p> <p>https://workspace.google.com/intl/ja/products/slides/</p>	<p>【公式】 FigJam</p> <p>https://www.figma.com/ja-jp/figjam</p> <p>Google for Education 無限キャンバスで広がる・深まる FigJam 授業実践ガイド</p> <p>https://services.google.com/fh/files/misc/gfe_figjam_supportbook.pdf</p>

主な機能	MicrosoftWhiteboard	Miro
	◎Microsoft製品（「Teams」「Word」「PowerPoint」など）との柔軟な連携	◎ボードの広さが無制限 ◎連携できるアプリが多い（130以上） ◎会議やミーティングの進行に便利なファシリテーション機能（タイマーや投票機能、Talktrack） ▲操作性やレスポンスの問題の指摘あり
価格	Microsoft 365に含まれる	教育機関から申請する事でEducationプランが無料利用可能
描画	○	○
テキスト挿入	○	○
画像挿入	○	○
動画挿入	○	○
リンク挿入	○	○
表挿入	-	○
スタンプ	○	○
コメント	○	○
レーザー	○	○
投票	○	○
付箋	○	○
付箋集計	-	○
縦書き	-	○
ルビ	-	-
Jamboard移行方法	-	移行可能
参考サイト	【公式】Microsoft Whiteboard https://www.microsoft.com/ja-jp/microsoft-365/microsoft-whiteboard/digital-whiteboard-app	【公式】Miro (Miro Education プラン) https://help.miro.com/hc/ja/articles/3600473-Education-%E3%83%97%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%97%E3%83%A9%E3%83%B3

(出所) Suite ツール・協働学習ツール比較「Jamboard・Google スライド・FigJam の比較」
(<https://www.kodomo-suite.jp/hikaku>)を参照して作成。

第9回教育開発センター会議および情報共有で使用している Teams 上において、センター委員で検討した結果、FigJam は大学から利用申請をすることでエンタープライズ版が利用できること、Google for Education より「無限キャンパスで広がる・深まる FigJam 授業実践ガイド」がマニュアルとして提供されていることから、Jamboard の後継アプリとして、大学より利用申請を行うことに決定した。但し、すでに他のアプリを使い慣れている教員がいれば、そのアプリを利用しても構わないことにしたい。

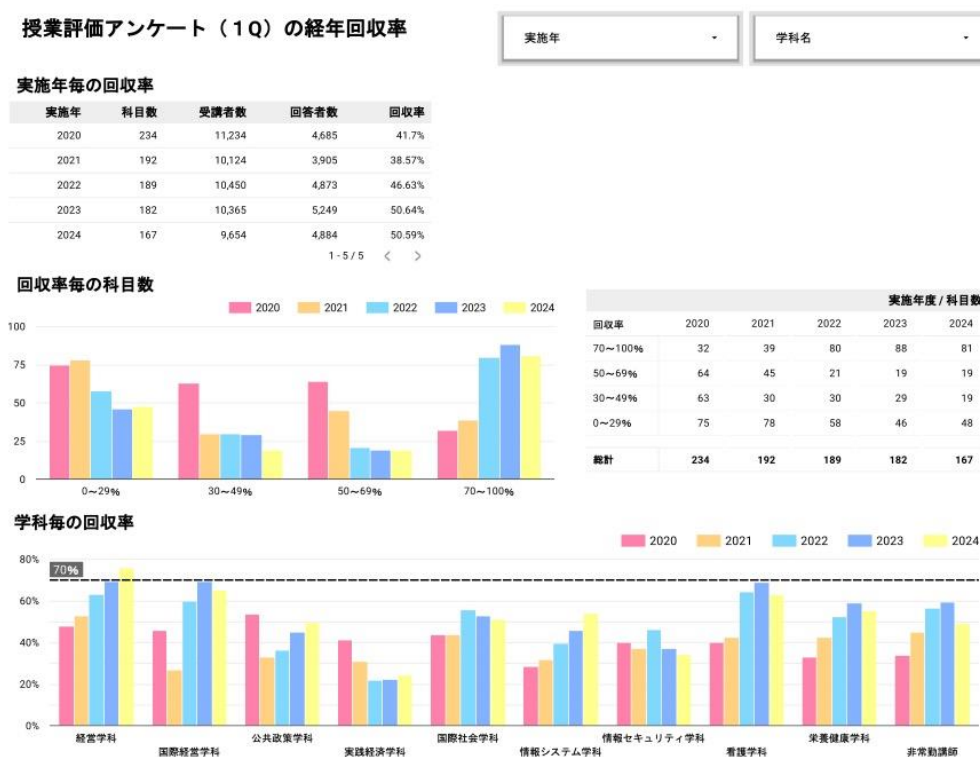
2. 授業評価アンケートの実施について

各学期に実施してもらった授業評価アンケートの実施状況について、報告をしておきたい。各学期の授業評価アンケート実施時においては、教育開発センターから実施のお願いの学内

メール、実施期限前にはリマインダーメール、そして、各学科の教育開発センター委員より、学科会議等における実施の呼びかけを行ってもらった。

各学期・各学科の経年回収率は図表 4~7 のとおりである。各学科とも年々、回収率は上がっているものの、学期によって回収率にばらつきが見られ、特に、第 3 学期、第 4 学期の回収率の低さが顕著である。次年度においては、授業評価アンケートの実施方法等についての分析を行い、回収率の向上へ対策を考えていきたい。

図表 3 授業評価アンケート IQ の経年回収率の推移



図表 4 授業評価アンケート 2Q の経年回収率の推移



図表 5 授業評価アンケート 3Q の経年回収率の推移



図表 6 授業評価アンケート 4Q の経年回収率の推移



3. 授業評価点検報告書

2024（令和 6）年度 前期の授業評価点検報告書の回収率は、佐世保校では経営学部が 77%（経営学科 69%、国際経営学科 90%）、地域創造学部が 73%（公共政策学科 71%、実践経済学科 75%）、また、シーボルト校では国際社会学部が 68%、情報システム学部が 65%（情報システム学科 60%、情報セキュリティ学科 70%）、看護栄養学部が 84%（看護学科 86%、栄養健康学科 81%）、その他に地域連携センターが 100%、非常勤講師が 39% となっていた（詳細は図表 7 を参照のこと）。筆者は本年度から教育開発センター委員を務めているが、授業評価アンケートの実施とともに、授業評価点検報告書の作成を行うことは当然のことと思っていたため、初めてこの数字を見たときは驚いた。点検報告書の作成が確実に進んでいくように、次年度以降もしっかりと取り組んでいきたい。

合わせて、点検報告書において各教員に記入してもらった「授業上の工夫」について、一覧にまとめたものを記載しておく（図表 8 を参照のこと）。教員はなかなか他の授業の状況や、先生方の授業上の工夫について知る機会がないが、なるほどと思わせるような取り組みや工夫が実践されていて大変興味深い。なお、浅田学長からのご提案で、今年度より授業上の工夫

の中の専門用語に注釈を入れることになったため、教育開発センターでワーディング集を作成した(図表 9 を参照のこと)。学科独自の専門用語も含まれているため、先生方には参考にしてもらいたい。

図表 7 2024(令和6)年度前期授業評価点検報告書回答状況

令和6年度前期授業評価アンケートに関わる点検報告書の進捗状況

▼報告書の作成率 2024/11/18 時点

全体	報告書作成率	校	報告書作成率	学部	報告書作成率	学科	教員数	報告書作成人数	報告書作成率
両校 (非常勤除く)	75%	佐世保	75%	経営学部	77%	経営学科	16	11	69%
						国際経営学科	10	9	90%
				地域創造学部	73%	公共政策学科	17	12	71%
						実践経済学科	16	12	75%
		シーボルト	75%	国際社会学部	68%	国際社会学科	19	13	68%
				情報システム学部	65%	情報システム学科	10	6	60%
						情報セキュリティ学科	10	7	70%
				看護栄養学部	84%	看護学科	22	19	86%
						栄養健康学科	16	13	81%
						教育開発センター	0	0	
						地域連携センター	1	1	100%
				非常勤講師	79	31	39%		

▼学生フィードバック実施率(LC経由)

全体	フィードバック率	校	フィードバック率	学部	フィードバック率	学科	報告書作成人数	フィードバック実施人数	フィードバック率
両校 (非常勤除く)	39%	佐世保	39%	経営学部	25%	経営学科	11	2	18%
						国際経営学科	9	3	33%
				地域創造学部	50%	公共政策学科	12	3	25%
						実践経済学科	12	9	75%
		シーボルト	40%	国際社会学部	31%	国際社会学科	13	4	31%
				情報システム学部	46%	情報システム学科	6	5	83%
						情報セキュリティ学科	7	1	14%
				看護栄養学部	41%	看護学科	19	6	32%
						栄養健康学科	13	7	54%
						教育開発センター	0	0	
						地域連携センター	1	0	0%
				非常勤講師	31	31	100%		

<参考>

令和5年度前期点検報告書	報告書作成率	73%
	フィードバック率	38%
令和5年度後期点検報告書	報告書作成率	69%
	フィードバック率	29%

図表 8 2024 (令和 6) 年度前期授業評価点検報告書における授業上の工夫の一覧

令和6年度前期授業評価点検報告書における授業上の工夫について	
アクティブラーニング	
1年の前期の学生によるパワポを使ったプレゼンと質疑応答・解説。	
グループワークを行う	
各自でオリジナルな改良を加えてもらった。	
ペアでの音読	
ワークショップ、対話を取り入れた	
ペアワーク、グループディスカッションを取り入れる	
授業内容を事前にできるだけ公表して、事前な学習を促し、授業を復習と位置付ける(反復学習)。	
授業指導案を作成するワークの際に、まず、個人で作成してから、それを持ち寄ってグループで作成することで、フリーライダーを作らないとともに、個人の立場を明確にしてのグループワークになるよう配慮している。	
マイクロティーチング ^(注1)	
問題を解くだけでなく、ペアになって発音をしたり、お互いの発音を聴き、上手にできている箇所、発音しづらい箇所などを相談・指摘・助言しあう学び合いを行っている。	
授業中に学生が勉強成果を積極的に発揮できるよう、グループワークのレポートシートを提出させることで、資料を探し、他者とのディスカッションを行う機会を提供しました。	
授業中に学生が自分の学びを確認できるよう、毎回の授業で確認問題を提供しました。これにより、授業後の復習資料としても活用できると思います。	
「シンク・ペア・シェア ^(注2) 」というアクティブラーニングの手法を実践した。具体的には、毎回の授業中に教員から質問を投げかけ、それについて受講生各自に2~3分ほど考えてもらった。その後、受講生2~3人のグループをつくって5分ほど議論したのち、いくつかのグループから議論の内容を全体に共有してもらい、それをもとに教員が解説を行なった。	
災害拠点病院である長崎県島原病院で、実際に災害訓練に傷病者役や医療関係者につきながら参加することで、被災者の受け入れ体制、初療展開時の看護、災害発生に向けての危機管理体制などについて学んでいる。災害時のこころのケアとして、グループによってシナリオを作成し、ロールプレイを行い、舞台上で演じることで、各役割を通して理解が深まる。	
実習のテーマ、実習の具体的な計画、対象期間への連絡等教員の指導を受けながら、学生は主体的に活動を行います。現地での交通機関等も調べ、現地での体験をのものを大切に実習をすすめています。	
グループワークおよびグループディスカッションを用いて、その後、各グループの発表を実施した。	
授業で指定した内容についてパワーポイントを作成し、プレゼンをしてもらっている	
授業の中で、自分はどのように考えるか、きちんと意見を述べることはとても大事である。また、ほかの学生がどのような考えを持っているかについても、学生は大変関心があると感じる。	
知識の確認の際には、クリッカーを使用して楽しみながらリアルタイムにフィードバックできる工夫をしています。	
具体的な事例を作成し、事例に関してグループで学習し、最終的に発表・討議させる	
プレゼンテーション・ディスカッションの時間を多く設け、他学年も含め、互いにコメントしあう。	
事前に課題を与えて、関連内容も調べてもらう	
ICTの活用	
メール添付で課題を提出してもらった。	
出席入力や課題作品提出に活用した。	

PDFを用いた授業資料のスライド投影
学生が各自でスマートフォンを使って障害の疑似体験やアクセシビリティ（障害を軽減する技術的手法）の体験を実施した
リアルタイムのクイズ、オンラインクイズの活用
TVerでニュース番組を視聴させた
Livecampusに講義資料や講義補足資料をアップロードしていきました。カラー写真などをそのまま掲載できたので有効です。
クリッカーを使った。
学生のPC操作力を向上させるため、グループワークの成果を発表する際にプロジェクターやスライドを活用しました。
スプレッドシートの導入
Googleフォームでのやりとり
遠隔授業の回は、情報セキュリティ学科の全クラスをGoogle Meetでつなぎ遠隔での発表などを体験しました。
グループワークにJamboardを用いて、学生グループ間のみならず教員もグループワークの進捗を共有できるように工夫しました。
ソフトバンクとの連携で食育プログラミングの授業を実施した
Moodle ^{〔注3〕} is recommended to those looking for a versatile and reliable LMS ^{〔注4〕} .
グループワークが多い授業です。Classroomでファイル共有しながら学生が共同編集して課題に取り組めるように工夫しています。グループの進捗状況を教員は把握することができます。
動画なども積極的に活用する

大講義授業
対話型
一方的に話すだけの授業をしていると寝落ちする人が目立ってくるので、途中で休憩をかねて隣の人とお話をするディスカッションタイムを設けた。
学生が後ろの席に固まらないよう、着席範囲を指定しました。
大福帳 ^{〔注5〕} を用いたフィードバック
スライドと板書の組み合わせで、学生たちに飽きさせないバランスが重要でした
板書と配布プリントの組み合わせで、学生たちに飽きさせないバランスが重要でした。
Google Classroomの利用で、なんとか予習・復習の手助けとなるよう工夫している。予習より後の復習に役立つよう努力してきました。

アイスブレーキング
出身、趣味、大学でしたいこと、一推しの本、疲れた時の勉強法
時事ネタ
臨床医学分野であり、疾患に関連した症例や、自身のこれまでの経験などを踏まえ、学生の興味を引き起こすような話題を入れていく。また、教科書レベルではないが最新の知見なども紹介していく。
授業の導入時に講義内容に関連する簡単なクイズを実施した
教壇で簡単な演示実験をした。眠気覚ましにはなったようだが、こちらが期待するような反応ではなかったので、実験内容の見直しをしていきたい。

前回の講義に対する感想や意見・質問を毎回紹介していきました。
出席確認を行っている間に、グループごとに課題の進捗や、健康的な生活のために継続していること等のお題をスライド上に示して、話す機会を設けている
講義内容にまつわるエピソード、「小ネタ」を活用する。
ゼミでは、学生の興味関心のあるテーマについて、関心をもった理由やこれまでの経験などを自由に話します。話すことによって、学生は「ゼミでは自分の考えを自由に話していい」と思うようになり、さらにテーマが明確になります。
Taboo game ^(注6) , Speed Networking ^(注7) , Small talk
自分の出身地の文化をジェンダーやボディランゲージで表現
関連するニュースなどについて触れる

動機付け
相互評価を導入
ハードルを下げる
国家試験に出るポイントを解説してあげる
4年時の病院実習に向けての重要な基礎知識になることを、講義の最初に伝えるようにする。
教育現場に出た際にどのような状況が考えられるのかをできるだけ具体的に伝えた
知識が看護の臨床場面でどのように活用できるのか、具体的に伝えるようにしている
教養を身につけること、広く学ぶことは自分への投資であることをきちんと説明する。
大学への進学を良い仕事を見つける手段と認識している学生が多いため、就職活動とのつながりがあることで勉強意欲が高まると感じました。この点を踏まえ、今年の授業の確認問題の一部は公務員試験から出題しました。このように就職活動との関連を強調することで、学生の勉強意欲をさらに高めることが期待できると考えています。
関連科目を意識し、過去に履修した科目の振り返り、実習に向けての関連や技術の応用方法を適宜説明した。
実際の災害訓練に参加する際には、事前に傷病者・家族等の役割が振り分けられ、傷病者については、状況設定、レントゲン写真や検査値から、学生がムラージュ ^(注8) などで作り上げていく。事前に各役割を確認する機会を設けている。そのことによって、段階的に災害訓練への取り組み姿勢が、高まり臨場感につながっている。
毎回、講義開始時に到達目標を伝えている
授業は、番組制作と同じで、構成（流れ）が大切である。いかに飽きさせず、学生に自分なりの結論を導かせるか。自分自身にひきつける動機づけが大切である。
授業で目指す方向性や単位評価（テスト）を冒頭で周知。
今年度は外部講師（元・銀行員）による授業を1回分実施したことで、実務への関心や資格勉強への動機付けになったと実感している。
管理会計論の講義内容での学習テーマがそれぞれに企業実務の中でどのように実践されているかを事例を用いて説明を行うことで、受講者の関心を高められるように工夫しています。
工業簿記は経営学科の卒業要件の一つである日本商工会議所簿記検定試験2級合格水準を目指しているため、早い段階での自己学習力の向上を獲得できる講義を行うことを、第1回目の講義の中で説明を行っています。
事前に興味がある分野を伺う

評価
相互評価を導入
密なコミュニケーション
授業態度に関する評価については、適宜伝えるようにした
基準を明確に。

社会調査士資格に関する科目でしたので、客観テストで厳格に採点しましたが、学生の好成績に驚きました。
授業で目指す方向性や単位評価（テスト）を冒頭で周知。

批判的思考
発表と議論
相互評価・発表
読書、発表、議論（のサイクルをまわす）
臨床場面において、適切な場面とそうでない場面を比較検討し、発表する時間を設けた。
様々な社会経済の在り方や学説を比較しながら紹介し、合わせて長所や問題点などについても説明する。
グループワーク、プレゼンテーション、レポート執筆を通して、論理的な思考、批判的な思考を育む教育を意識している。
ディベートを導入 違う視点の意見について考えてもらう

ライティング（レポートを含む）
レポートを実施
ゼミ論集の作成（基礎演習）
課した中間レポートに対しては、一人一人にコメントを記入したうえで、重要な点は翌日の講義（集中）で全体化した
評価基準を明確に
授業内容に関するやや長文のレポートを課し、授業内容の復習を促す。
授業中に学生が勉強成果を積極的に発揮できるよう、グループワークのレポートシートと自己提案のレポートを提出させることで、学生のライティング能力の向上に寄与しました。
提出させるべき課題と自習で十分な課題の区別。

予習復習
GC ^(注9) にあげることで予習復習をしていた
発表のプレゼン作成
予習課題の小テストの実施
口頭で説明するとかえって煩わしくなる講義内容については、自習用の資料を配付し、学生に各自勉強させました。
毎回単語テストと復習テストを実施。既習部分のOral Trainingを課題としている。
15回の授業で予習・復習の課題を与えた結果、学生の自習能力や独自の思考能力の養成に寄与しました。
演習が多い科目だったので、講義初回に「演習ガイド」を提示し、演習の目的、事前学習、演習の進め方、課題様式の記入例などから、学生が授業・課題の見通しを持ち、課題に取り組めるようにした。
実習開始前に、フィジカルアセスメント等に関する事前学習を、講義担当のDMAT ^(注10) の方にYoutubeなどを紹介してもらい、事前学習とする。
毎回小テストを実施し、レジメに復習問題や国試過去問の抜粋を加え、復習の機会を増やすようにしている。

事前にテキスト一読のため、マーカー予習をさせる。
指定教科書の例題問題への取り組みを、講義前と講義後に設定しています。
人数が少ないため、丁寧にできるが、毎回の課題実施とその評価（添削返却）
看護技術前に学習ノートを作成するよう、講義初めに課題を提示する

試験
Googleクラスルームで行っていた
レベルチェックテスト（大講義）
社会調査士資格に関する科目でしたので、客観テストで厳格に採点しましたが、学生の好成績に驚きました。
確認問題を試験問題として使用するのではなく、類似の質問を出題することで、学生の学習成果をより効果的に確認できると思います。
テキスト内容が難解なため、テキスト・電卓の持込を許可した。
短答式（用語記入）と論述式を使い分けて、取り組みやすい内容にしている。
小テストを定期的実施する

その他
90分講義中、5分を整理の時間として、各自が復習をしたり、発展的な内容を考えたりすることができる時間としています。アンケートの自由記述欄をみると、肯定的な意見が多かったです。
ノートの取り方：略語を利用するように伝える。 Def.(Definition) Imp.(important) Intro. (introduction) Con (conclusion) Sum. (summary) Gov. (Government) Org. (Organization)
動画により関心を持つきっかけを与えたことと、独自資料作成
クラス生が提出した課題や授業提案（素案段階）に対して、教員の添削、コメントをつけて、個々に返却した。また、毎回の授業において資料やワークシート配付を行い、その日行う内容や課題意識を持たせるようにしたこと。
ゼミを領域単位、とゼミ単位で行い、発表を組み込みながら質疑応答等の体験も取り入れている。
4期制で週2の授業だと授業外の課題が出しにくいいため、連続授業（2コマ連続）を基本に考えて欲しい。
学生の生活習慣維持のため1限にしているが、朝起きられない学生全てが、生活習慣に起因するだけではないようなので、2限開始でもいいのではないか。

図表 9 教育開発センターワーディング集

No	用語	意味
1	マイクロティーチング	通常の授業よりも短時間（例えば5～10分等）、小規模で行う模擬授業のことです。例えば教育実習前の準備等として行います。
2	シンク・ペア・シェア	「一人で考える：Think → 次にペアになって：Pair → 各々の考えたことを共有または議論して意見交換する：Share」 この流れで議論をスムーズに進め、能動的学習を促す手法です。 1981年にメリーランド大学のFrank Lymanによって最初に提案されました。
3	Moodle	e-Learningを支援する目的で運用される学習管理システム (LMS) の一種です。
4	LMS	「Learning Management System (ラーニング マネジメント システム)」の略であり、「学習管理システム」を意味します。
5	大福帳	多人数授業での利用を想定してデザインされた学生と教員のコミュニケーションツールです。
6	Taboo game	カードに書かれた単語を、指定された他の複数の単語を使わずに説明し、聞き手が何の単語の説明かを当てるゲームです。
7	Speed Networking	参加者が短時間（例えば1分間）ペアを組み、互いに質問を交わし、その時間が過ぎれば新しいパートナーとペアを組み、また互いに質問を交わすというものです。
8	ムラージュ	医療教育等に使われる、現物大のリアルな模型のことです。
9	GC	Google Classroomの略であり、Google が開発したWebサービスで、教育機関向けのアプリケーションセット「Google Workspace for Education」に含まれる学習管理アプリです。
10	DMAT	災害派遣医療チーム Disaster Medical Assistance Team の頭文字をとって略して「DMAT (ディーマツト)」と呼ばれています。

座談会・他大学や産業界との連携等調査

教育開発センター委員 前田 竜孝
地域創造学部 公共政策学科 講師
教育開発センター委員 芳賀 普隆
地域創造学部 実践経済学科 准教授

1. 学生×教員による教育改善のための座談会

(1) はじめに

本年（2024）度は、昨年度の試行（2023年11月22日（水））の実施（前田・芳賀2024）状況を踏まえて、2回目の「学生×教員による教育改善のための座談会」（以下、座談会）を実施した。以下では、座談会実施までの経緯として、話し合うテーマの設定、参加学生と教員の選定の詳細を述べる。次に、座談会で話し合われた内容、ならびに事後アンケートの回答結果の分析を報告する。

(2) 座談会実施までの経緯

座談会の実施に当たって、昨年度の試行時の課題を整理した。具体的には、①参加学生の選定、②実施時期、③実施方法、④座談会の進め方を検討した。

①については、網羅性を確保する観点から検討を重ねた。その結果、学科教員から推薦を受けた上級生（3、4年生）と下級生（1、2年生）1名ずつを選定したうえで、参加希望者を全学で募集（以下、一般公募）することとした。これにより、学生からの多様な意見を集められる環境を整えた。一般公募の期間は2024年10月1日（火）～10月10日（木）に設定した。参加条件は「1. 長崎県立大学をより良くしたい思いがある方」「2. 積極的に意見を述べられる方」とした。最終的に、教員から推薦された学生として、経営学科、国際経営学科、公共政策学科、国際社会学科、情報セキュリティ学科、看護学科、栄養健康学科、情報システム学科から2人ずつ、実践経済学科から1人の合計17人の参加が決まった。一般公募では、公共政策学科、実践経済学科、情報セキュリティ学科、情報システム学科から1人ずつの4人から参加希望があった。

②については、学生が参加しやすい日程が求められた。検討の結果、通常の授業が少ないと予想される授業予備日（2024年11月5日）とした。

③については、昨年度から大きく変更した。昨年度は、佐世保校 403 教室を主会場として、シーボルト校 M105 教室と Zoom での遠隔会議方式で実施した（前田・芳賀 2024）。しかし、事後アンケートでは、学生が 3/4 ほどの学生が対面実施を希望した。これを受けて、本年度は対面実施で行うこととした。会場に関しては、昨年度、佐世保校が主会場であったため、シーボルト校での実施が望ましいとされた。また、議論するなかでは、会場を 1 年ごとに入れ替える案も出された。佐世保校の参加学生と教員、事務職員は大学所有のマイクロバスで移動した。

④については、グループごとでテーマについて話し合い、その内容をテーマごとで全体に共有するようにした。具体的には、5~6 人の学生と 1 人の教員（ファシリテーター）で 1 つのグループを構成し、全体 4 グループつくった。小グループでの進行によって、学生の発言回数を確保するとともに、学生が発言しやすい環境を整えた。話し合うテーマは、データ収集の継続性の観点から、昨年度と同様に「①長崎県立大学に進学した理由、②進学して実際に感じたこと、③大学の授業を通して新たに学べたこと、開講してほしい授業・内容、④今後、受験生を集めるためには、どのような工夫を講じる必要があるか」の 4 つとした。教員の役割として、前田が司会、橋本センター長と柳田、大澤両副センター長、芳賀がファシリテーターとして参加した。浅田学長もオブザーバーとして参加した。

さらに、本年度からの初めての試みとして、キャンパスツアーとランチミーティングがある。前者は、佐世保校・上田スタッフの提案を受けて、学生間でのアイスブレイクを目的とした。また、両校舎を訪れたことのない学生も多く、佐世保校の学生にシーボルト校を知る良い機会となった。後者は、座談会で同グループとなった学生が、会終了後も引き続いて交流できる機会となるように企画した。

(3) 座談会の実施

「学生×教員による教育改善のための座談会」は、2024 年 11 月 5 日（火）（午前 11 時～午後 12 時 30 分）にシーボルト校情報セキュリティ演習室で実施した。参加した学生は 20 人（当日 1 人が体調不良で欠席）、教員は 5 人であった。話し合った内容は上記した通りである。

(4) 座談会で話し合われた内容と事後アンケートの分析結果

1) 座談会の議論から得られた学生のコメントの傾向及び示唆

①長崎県立大学に進学した理由

参加者のコメントから一定の傾向が垣間見えた。シーボルト校の場合は、進路ややりたいことが明確だったり、情報セキュリティのように自分のやりたいことが長崎県立大学にあったケースがあった。一方、佐世保校の場合は、地域とのつながりを意識している。また、自分のやりたいことが決まっていなかった学生もいた。本学や現在の学科を選んだきっかけが個人的な経験に由来しているケースも多かった。

かなり自分のやりたいことを大学の中で学べるという意見が多かった。一方で、自分のやりたいことが決まっていなかったため、いろいろなことが学べる学科に入ったという意見もあった。

②進学して実際に感じたこと（勉学面、生活面、課題活動）

○全体的な印象

全体を通して言えるのは、教員と学生との距離が近いことや専門的な学びを学外でも実施していることであった。また、佐世保校とシーボルト校で学び方や生活環境などにおいて色々違いがあった。アルバイトや食事の場所、生活環境などについての言及も多かった。授業でのインターンシップについて充実している反面、実施時期等について改善を求める意見も見受けられた。

○勉学面

勉学面については、それぞれの学部学科で学んでいることがコメントに強く反映していた。授業で学んだことに関しては、各学科におけるそれぞれの専門・技術・知識を学べるとともに、そこから日々の生活にも生かせる学びができたとの意見が多かった。また、社会人学やお金、キャリア、リーダーシップ、プログラミングといった実践的な教育を求めている印象を受けた。専門分野に精通している先生がたくさんいることにより、自分の学科とは違った、分野の違う先生の話(遠隔授業)がよかったという声もあった。さらに、要望としては、シーボルト校の授業も受けてみたい、あるいは単位は要らないが聴講制度があるといいという声などもあった。これらの点に関しては、学生が専門性を身につけるだけでなく、興味・関心に応じた幅広い学びも求めていることを示唆して

いよう。また、しまなびプログラムの取り組みは現場や地域に密着した学びができる点で良い点だと評価されている。一方で、将来につながる授業として、しまなびプログラムなど、地域と大学が連携して取り組んでいるのに、授業終了後に終わってしまうのはもったいないので、活動を継続してほしいという指摘があった。学内にとどまらず、学外に出ていく、あるいは、現在にとどまらず未来につながるような教育を求めているような印象を受けた。

他方、勉学面で改善してほしい点としては、クォーター制やインターンシップに関する意見が挙がった。クォーター制に関しては、慣れないため改善してほしい、宿題、課題を出すための講義になってしまっている、という声が挙がった。インターンシップに関して、実施時期等について改善を求める意見や就活早期化に伴い、必須の所では単位のために 2 週間つぶれるのがもったいないことから、インターンシップを改善して欲しいという意見が複数挙がった。

さらに、佐世保校の方から、ゼミの人数が多い、という意見もあった。

○生活面

生活面については、アルバイトや食事の場所、生活環境についての言及があった。例えば、佐世保校の場合、スーパーに関しては生活に困らないが、シーボルト校は交通が不便だったり飲食店がないといった現状に対する切実な訴えがなされた。

○課外活動・サークル関連

サークルに関しても、具体例を挙げながら取り組みの紹介を行ってくれた学生もいた。具体的な要望や提案も複数提示された。例えば、①サークルでは、佐世保校学園祭実行委員会やボランティアなど、学生主体の活動が多い。よさこい祭りや地域で行われるお祭りにもボランティアで参加しているため、そういう取り組みに対して、大学からのアプローチがあってもよい、②オープンキャンパス+学園祭のミックスもいいのではと思う、③サークル内のお金に関して、大学からもらえるお金に偏りがあると感じている学生が多くいるので、バランスを取ってほしい、などである。

総じて言えば、サークルのことに関しても、金銭的な問題と時間的な制約の問題を挙げる学生が複数いた。そういう意味では、サークル活動の情報発信に関して、金銭的、

時間的な面も含めて行っていくことが必要になってこよう。

③大学の授業を通して新たに学べたこと、開講してほしい授業・内容

本項目については、各学生から所属している学科において所属しているゼミや受講科目、学外での学びに関する紹介がなされた。

開講してほしい授業・内容に関しては、具体的かつ建設的な提案が出された。例えば、論文の書き方や文章表現の授業の必修化、コミュニケーションを取れる授業の増加、佐世保や長崎で学んでいる者として住んでいるまち・地域について学べる授業、リーダーシップに関する授業などである。また、情報系の学部学生からは1年時など早い時期からのプログラミングの開講希望が出された。

④今後、受験生を集めるためには、どのような工夫を講じる必要があるか

本項目に関して、学生から非常に多岐な意見が出された。総括すると、以下の通りである。

第1に、情報発信の内容や伝え方や発信力強化に関する内容である。例えば、情報発信の内容に関しては、学びや生活など、現在の学生の様子を発信したり、県大生の生の声をインスタやSNSで反映したり、将来像が見えるように、大学HPに卒業生のインタビューを掲載したり卒業後の就職実績の宣伝をすべきである、といった提起がなされた。また、情報発信の伝え方に関してはCM作成やSNSや動画配信、Tiktokにおけるリールを活用した拡散、といった具体的な発信方法の提案も出された。

第2に、本学が安心して学べる環境であることを、県内外に伝えていくことの重要性である。本学の特色として学生の質が高いので、パンフレットで伝えるのは難しいが、落ち着いて頑張れる大学だということを伝えてほしい、という参加者からの声もあった。また、学部学科毎に他学科でどんな学びを行っているかはみたことがない。うまく発信できるシステムがあれば。学部ごとのアカウントをつくったらよいのでは、という意見もあった。さらにカリキュラムだけでなく、生活面についての情報提供を挙げた参加者もいた。

第3に、オープンキャンパスに参加するのが難しい場合、VR活用やバーチャルツアーを行うなどの工夫を行うことである。

第4に、地域との交流、出前講義（教員との関連）など、教員が地道に外に出ていっ

て、高校の先生や親御さんとの交流を持つことが大事だという意見が出た。

これまでの意見を総括すると、学びや生活などに関する発信力強化、卒業後の就職実績の情報提供を通じて本学で学んだ学生の成長と将来像の提示、本学教員が専門性や出前授業などを通して地域や高校（生徒や保護者）との交流を持ち、本学で学べることを具体的に知ってもらうことの重要性が浮かび上がった。

2) 2024 年度「学生と教員による授業改善のための座談会」事後アンケート結果の分析

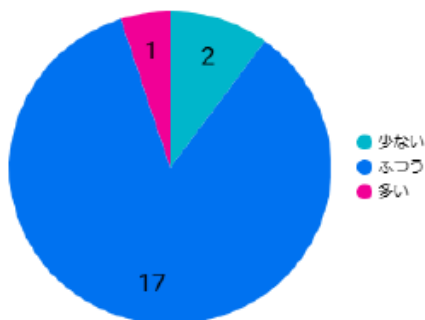
本座談会の終了後、参加した学生に対し、事後アンケートを実施した。

事後アンケート結果については、①座談会の人数構成（学生及び教員の参加人数）、②座談会の所要時間、③座談会の内容について（話しやすい雰囲気・空間だったか、話したい内容は話せたか、テーマの設定は適切だったか、について設問を行い、学生に解答していただいた。回答結果は以下のとおりである。

まず、座談会の人数構成については、学生、教員とも「ふつう」という回答が大半を占めたことから、適正な規模、人数であったことがうかがえる（図表 1、図表 2 参照）。

図表 1 座談会の人数構成～学生の参加人数～

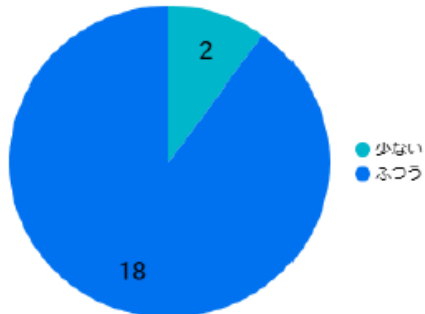
3. 本日の座談会の人数構成について感想を聞かせてください。 [学生の参加人数]



（出所）長崎県立大学 教育開発センター「2024 年度「学生と教員による授業改善のための座談会」事後アンケート結果」（2024 年 11 月 6 日）より転載。

図表 2 座談会の人数構成～教員の参加人数～

3. 本日の座談会の人数構成について感想を聞かせてください。 [教員の参加人数]

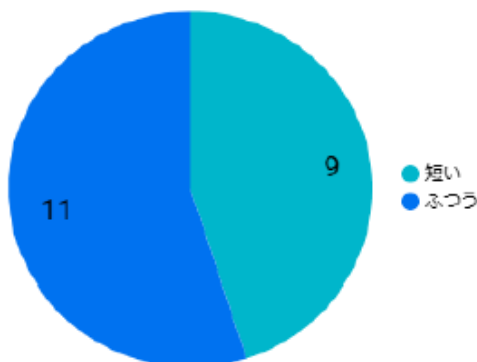


(出所) 長崎県立大学 教育開発センター「2024 年度「学生と教員による授業改善のための座談会」事後アンケート結果」(2024 年 11 月 6 日) より転載。

次に、座談会の所要時間に関してであるが、こちらも「ふつう」という回答が過半を占めたものの、2023 年度が「ふつう」が大半を示したのに対し、2024 年度は「短い」という回答も半数近くいた。グループ間の議論が活発であったことも 1 つの要因として挙げられる。次年度以降に関しては、座談会としては現状維持を想定しつつも議論の余地があるということがいえよう (図表 3 参照)。

図表 3 座談会の所要時間

4. 本日の座談会の時間について 感想を聞かせてください。 [所要時間について]



(出所) 長崎県立大学 教育開発センター「2024 年度「学生と教員による授業改善のための座談会」事後アンケート結果」(2024 年 11 月 6 日) より転載。

続いて、座談会の内容について質問した。「話しやすい雰囲気・空間だったか」につ

いては、回答 20 人中、10 名が「非常に満足」、10 名が「満足」半分の 6 人が総じて高評価であった。なお、2023 年度は 4 名が「非常に満足」、2 名が「満足」だったことから鑑みて、2024 年度は満足度が相当向上したことが思料される。2023 年度の座談会において、会場では BGM を開始前に流してリラックスした雰囲気を演出するなど工夫を行ったが、2024 年度はそれに加えて会場のレイアウトの配置や各学部・学科などのグループメンバーの構成に関する配慮を行ったことも奏功しているものと思われる（図表 4 参照）。

図表 4 座談会の内容～話しやすい雰囲気・空間だったか

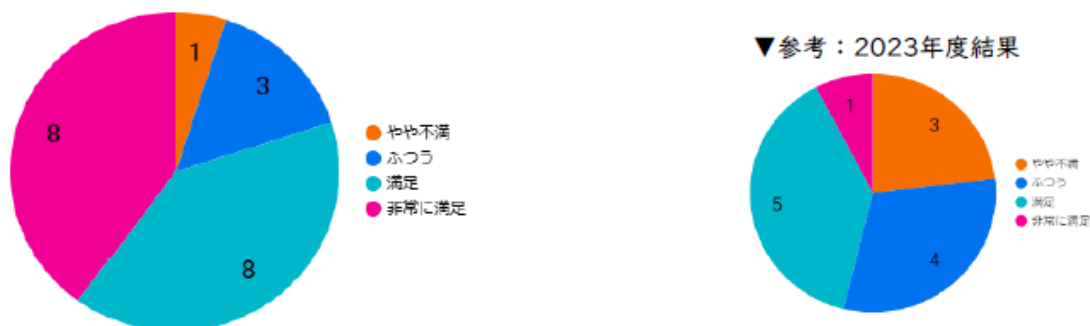
5. 本日の座談会の内容について感想を聞かせてください。[話しやすい雰囲気・空間だったか]



(出所) 長崎県立大学 教育開発センター「2024 年度「学生と教員による授業改善のための座談会」事後アンケート結果」(2024 年 11 月 6 日) より転載。

図表 5 座談会の内容～話したい内容は話せたか～

5. 本日の座談会の内容について感想を聞かせてください。[話したい内容は話せたか]



(出所) 長崎県立大学 教育開発センター「2024 年度「学生と教員による授業改善のための座談会」事後アンケート結果」(2024 年 11 月 6 日) より転載。

続いて、座談会の内容に関する設問のうち、「話したい内容は話せたか」については、「非常に満足」が8名、「満足」が8名であり、大半が満足であった一方、「ふつう」が3名、「やや不満」が1名と回答した参加者もいた。(図表5 参照)。なお、2023年度に関しては、「非常に満足」が1名、「満足」が5名なのに対し、「普通」が4名、「やや不満」が3名だったことから、総じて、2024年度において満足度が高くなっていることが示唆される(図表5 参照)。

図表6 座談会の内容～テーマの設定は適切だったか～

5. 本日の座談会の内容について感想を聞かせてください。[テーマの設定は適切だったか]



(出所) 長崎県立大学 教育開発センター「2024年度「学生と教員による授業改善のための座談会」事後アンケート結果」(2024年11月6日)より転載。

さらに、座談会の内容に関する設問のうち、「テーマの設定は適切だったか」については、「非常に満足」が9名、「満足」が8名と肯定的な回答が過半を占める一方、「ふつう」が3名という結果となった。なお、2023年度は「非常に満足」が4名、「満足」が4名、「ふつう」が5名と三分していたので、今年度は昨年度よりも参加者の満足度が向上したことがうかがえる。(図表6 参照)。

図表 7 座談会の内容～全体を通して満足したか～

5. 本日の座談会の内容について感想を聞かせてください。[全体を通して満足したか]



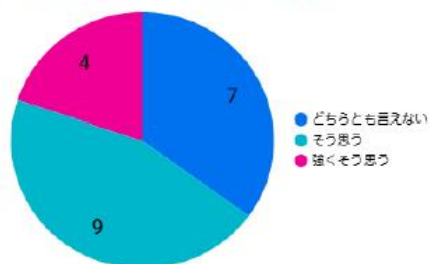
(出所) 長崎県立大学 教育開発センター「2024 年度「学生と教員による授業改善のための座談会」事後アンケート結果」(2024 年 11 月 6 日) より転載。

加えて、「座談会の内容全体を通して満足したか」については、「非常に満足」が 11 名、「満足」が 7 名、計 18 名と大半を占めた。なお、2023 年度は、「非常に満足」が 2 名、「満足」が 6 名、「ふつう」が 4 名、「やや不満」が 1 名であり、こちらも総じて前年度より満足度が向上していることがうかがえる(図表 7 参照)。

図表 8 次年度以降「教育改善に関わる座談会」運営上のご意見

～少人数の座談会の方が話しやすいか～

6. 次年度以降「教育改善に関わる座談会」を運営する上でのご意見を聞かせてください。
[少人数の座談会の方が話しやすい]



(出所) 長崎県立大学 教育開発センター「2024 年度「学生と教員による授業改善のための座談会」事後アンケート結果」(2024 年 11 月 6 日) より転載。

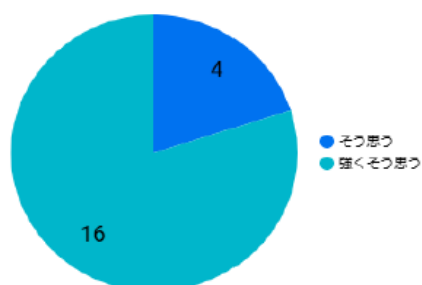
次年度以降「教育改善に関わる座談会」運営上のご意見として、「少人数の座談会の方が話しやすいか」という設問に対しては、「強くそう思う」が 4 名、「そう思う」が 9

名と全体の 65%を占めていることから、来年度以降の実施に際しては参加者の人数に関して議論していく必要がある（図表 8 参照）。

図表 9 次年度以降「教育改善に関わる座談会」運営上のご意見

～遠隔ではなく対面の実施の方が話しやすいか～

6. 次年度以降「教育改善に関わる座談会」を運営する上でのご意見を聞かせてください。
[遠隔ではなく対面の実施の方が話しやすい]



（出所）長崎県立大学 教育開発センター「2024 年度「学生と教員による授業改善のための座談会」事後アンケート結果」（2024 年 11 月 6 日）より転載。

次年度以降「教育改善に関わる座談会」運営上のご意見として、「遠隔ではなく対面の実施の方が話しやすいか」という設問に対しては、「強くそう思う」が 16 人、「そう思う」が 4 人、という結果となった。すなわち、参加者は対面での座談会実施を望んでいると思われる（図表 9 参照）。

図表 10 次年度以降「教育改善に関わる座談会」運営上のご意見

～遠隔実施でも構わなかったか～

6. 次年度以降「教育改善に関わる座談会」を運営する上でのご意見を聞かせてください。
[遠隔実施でも構わなかった]



(出所) 長崎県立大学 教育開発センター「2024年度「学生と教員による授業改善のための座談会」事後アンケート結果」(2024年11月6日)より転載。

次年度以降「教育改善に関わる座談会」運営上のご意見として、「遠隔実施でも構わなかったか」という設問に対しては、「まったくそう思わない」が10名、「そう思わない」が7名と、全体の85%を占めている(図表10参照)。

これらの結果から、次年度以降の座談会運営に関して、参加者当事者としては多くの学生が佐世保校、シーボルト校が入り混じっての対面での実施を望んでいることが明らかになった。一方で、実施時間や参加人数などに関しては、今後の課題として次年度以降議論していく必要があるだろう。

3) 2023年度「学生と教員による授業改善のための座談会」事後アンケート結果の自由記述欄にみる振り返りと今後の課題

事後アンケート結果の最後に、学生に自由記述を記載していただいた。その結果が図表11である。

図表11 「学生と教員による授業改善のための座談会」事後アンケート結果自由記述欄

7. 問6でお尋ねした内容以外で、座談会の運営に関して良かったこと、次年度以降も継続した方が良いと思うことを教えてください。(会場設営、雰囲気、キャンパスツアー(アイスブレイク)、トークテーマ、参加者構成、実施方法など)

教員ファシリテではなく、学生主体で話し合いをし、教員が補足する形でもよかったのではないかと思います。
トークテーマ、参加者構成
アイスブレイクの時間をもう少し設けて欲しかった。
キャンパスツアーは来年度も継続してほしい
みなさんの雰囲気がとてもよく意見を発信しやすかった。
シーボルト校の学生さんと初めて会ってみて、とてもいい刺激になったので、できるだけこれからも対面で続けて欲しいです。
対面での実施がとても良かった。
雰囲気良い
キャンパスツアー、開催場所(システム部屋)
雰囲気
キャンパスツアーの時間を多く取られていてとても良かったです。
全体を通して柔らかい話しやすい雰囲気で進行していたため気軽に意見を出す事ができました。キャンパスツアーもセキュリティ棟の知らない設備の詳細について知ることができたため次も継続してもらえると嬉しいです。
会場設営、雰囲気、キャンパスツアーが良かったです。実施方法として対面を次年度も継続してほしいです。
人数構成や時間設定もちょうど良く感じました。
話し合う雰囲気がとても良かった。トークテーマも大学をよりよくするために最適なお題だったと思う。教員が各班に2人いてもいいかなと思った。

8. 問6でお尋ねした内容以外で、座談会の運営に関して改善した方が良いと思うことを教えてください。(会場設営、雰囲気、キャンパスツアー(アイスブレイク)、トークテーマ、参加者構成、実施方法など)

キャンパスツアー
もう少しグループ内で意見を言う時間がほしい。
アイスブレイクは行った方がいい。
時間をもっとたくさんとって欲しかった。もっと話したかったです。
お互いどういうことを学んでいるのかを知りたい。
次年度も対面がいいと思います。
キャンパスツアーは一班につき一人は少しガイドできる人がいると良いと思います。
先生方、生徒の方々ともとても話しやすく、交流の機会をいただけてとても嬉しかったし楽しかったです。ありがとうございました。
グループの構成(教員の数)

(出所) 長崎県立大学 教育開発センター「2024年度「学生と教員による授業改善のための座談会」事後アンケート結果」(2024年11月6日)より転載。

次年度以降も継続した方がよいと思うことに関しては、会場設営、円滑で意見の言いやすい雰囲気により意見を発信しやすかったこと、キャンパスツアー、対面での実施、トークテーマ、開催場所(システムのある部屋)、人数や参加者構成など肯定的な意見が出された。

その一方で、アイスブレイクの時間をもう少し設けること、グループ内で意見を言う時の短さ、時間が短くもって話しかったこと、学生同士お互いどういうことを学んでいるかの情報交換の必要性やグループ内に教員が複数いてほしいなどの建設的な提言も頂戴した。

2024年度は、本格実施1年目ということでこのような「授業改善のための座談会」を実施した。今回、座談会を通して学生から得られた意見や感想も参照しながら、よりよい座談会のあり方について、教育開発センターとして引き続き模索・検討していきたい。

2. 他大学や産業界との連携等調査

(1) はじめに

本プロジェクトでは、2023（令和5）年度計画に記されている「他大学や産業界と連携した教育の取組状況について調査し、必要に応じさらなる推進を図る」ことを目的として、教員を対象に講義や演習における他大学や産業界との連携状況について調査した。

(2) 調査の概要

調査は各学科教員にスプレッドシートへ記入してもらうかたちで進めた。学科ごとに分けたシートに名前、講義・演習名など、時期（年月日）、連携した企業・大学・公共機関・地域団体・各種団体など、連携した講義・演習の内容・具体的な取り組みの内容、学生の反応・教育効果の記入欄を設けた。実施期間は、2025年2月10日から2025年2月28日に設定した。これはセンター委員間の協議により、本年度の講義・演習がおおむね終了した時期が、回答が得られやすいと考えたためである。

(3) 調査結果

1) 所属教員数、回答教員数及び回答件数

本学（佐世保校及びシーボルト校）に所属する所属する教員のうち、本アンケート調査に回答及び該当する人数と所属教員数を一覧にしたものが図表12である。

図表12 学科毎の回答数

キャンパス・学部		学科名	回答人数（人）	所属教員数（人）
佐世保校	経営学部	経営学科	5	16
		国際経営学科	8	11
	地域創造学部	公共政策学科	4	18
		実践経済学科	5	16
シーボルト校	国際社会学部	国際社会学科	1	20
	情報システム学部	情報システム学科	4	10
		情報セキュリティ学科	5	10
	看護栄養学部	看護学科	1	23
栄養健康学科		10	20	
合計			43	144

（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024年度 他大学や産業界との連携等調査」

結果をもとに筆者作成。

次に、各学科毎の回答件数をまとめたものが図表 13 である。

図表 13 学科毎の回答数

キャンパス・学部		学科名	件数 (件)	件数 (キャンパス毎)
佐世保校	経営学部	経営学科	49	252
		国際経営学科	141	
	地域創造学部	公共政策学科	28	
		実践経済学科	34	
シーボルト校	国際社会学部	国際社会学科	1	47
	情報システム学部	情報システム学科	14	
		情報セキュリティ学科	14	
	看護栄養学部	看護学科	1	
		栄養健康学科	17	
合計			299	

(出所)長崎県立大学教育開発センター「2024 年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

回答教員数に関しては、教員が、「他大学や産業界等との連携に該当する取り組みである」と認識して回答した教員の数を表している。その結果、図表 12 をみてもわかるように、①経営、公共政策、実践経済、国際社会などでは、他大学や産業界等との連携に該当する取り組みを行っている教員数が 4～8 人、②情報セキュリティや栄養健康では、所属教員の半分前後の教員が講義や演習における他大学や産業界との連携を行っている、③国際経営や情報セキュリティのように、所属教員の多くが講義や演習における他大学や産業界との連携を行っている、と回答するなど、学科によって回答数が大きく異なっている。また、学科毎の回答状況から、図表 13 に示しているように国際経営が 141 件、経営が 44 件、実践経済が 39 件などとなっている。とりわけ、国際経営は佐世保校全体の 55.95%、キャンパス全体の 47.17%を占めていることが明らかになった。なお、各学科とも、産学連携に該当している教員のすべてが回答しているとは限らないことには留意する必要がある。

2) 回答結果の分析 [1] 大学、企業等との連携の場 (講義、ゼミなど): 学部単位及び本学全体の傾向

ここからは、他大学や産業界との連携等調査から得られた回答結果をもとに分析を加えていく。まず、どういう場面において大学や企業等との連携を図っているか、である。佐世保校、シーボルト校の回答状況を踏まえ、両校の比較を行う場合には、教養セミナー、ゼミ関連（基礎演習、専門演習、卒業論文）、大学院、担当講義、実践系・実習（佐世保校における実践科目やシーボルト校における実習科目）、大学院講義・特別研究、特別演習、他ゼミ参加/学科合同形態、フォーラム、フィールドワーク、インターンシップ、研修会講師、学内外ワークショップ、個人/その他にカテゴリーを分けている。なお、共同研究、受託研究については、本気中期計画の「教育の質の向上と保証」の一環として「他大学や産業界と連携した教育の取り組み状況の調査」を行っていること、正規の授業の改善に直接つなげるべきものである、という認識から、今回の分析の趣旨に基づき、全て除外している。また、学科別の分析の場合には、学科やキャンパスにおける専門性やカリキュラムの違いがあることからその点を反映した分析を行っている。なお、2年～4年といった学年横断や合同ゼミ、といったケースも少なくないので、回答が重複しているところがある。

佐世保校では、基礎演習（2年）・専門演習（3年）・卒業論文（4年）の各学年におけるゼミの合計（2学部合算分）が258と全体の約52.87%を占めている。以下、担当講義36（同7.37%）、実践系・実習系が15（同11.48%）、フィールドワーク67（同13.73%）などとなっている。学部別では、経営学部がゼミの場が207（全体の56.71%）、担当講義が29（同7.95%）などとなっている。一方、地域創造学部では、ゼミの場が51（同31.46%）、実践系講義11（8.94%）、フィールドワークが25（同20.33%）などとなっている（詳細は、図表14参照）。

図表14 大学、企業との連携の場（佐世保校）

	教養セミナー	基礎演習	専門演習	卒業論文・卒業研究	担当講義	実践系講義	実習（シーボルト校）	大学院講義・特別研究	他ゼミ参加、あるいは学科合同形態	フォーラム	フィールドワーク	インターンシップ	研修会講師	学内外ワークショップ	その他	計（学部別）
経営学部	0	36	105	66	29	45	0	2	17	0	42	18	0	0	5	365
地域創造学部	1	25	26	0	7	11	0	1	14	2	25	1	1	9	0	123
合計	1	61	131	66	36	56	0	3	31	2	67	19	1	9	5	488

（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

図表 15 大学、企業との連携の場（シーボルト校）

	教養セミナー	基礎演習	専門演習	卒業論文・卒業研究	担当講義	実践系講義	実習（シーボルト校）	大学院講義・特別研究	他ゼミ参加、あるいは学科合同形態	フォーラム	フィールドワーク	インターンシップ	研修会講師	学内外ワークショップ	その他	計（学部別）
国際社会学部	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
情報システム学部	0	0	6	9	12	1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	31
看護栄養学部	0	0	0	2	7	6	0	1	3	0	0	0	0	0	2	21
合計	0	0	7	11	19	7	0	2	5	0	0	0	0	0	2	53

（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

他方、シーボルト校では、3学部全体において、ゼミが18と全体の約33.96%なのに対し、担当講義が19（同35.85%）、実践系・実習系が17（同13.21%）などとなっている。学部別では、情報システムが担当講義12（全体の38.71%）、卒業論文・卒業研究が9（同29.03%）などとなっている。また、看護栄養学部では、担当講義7（同33.33%）、実践系講義6（同28.57%）などとなっている（詳細は、図表15参照）。

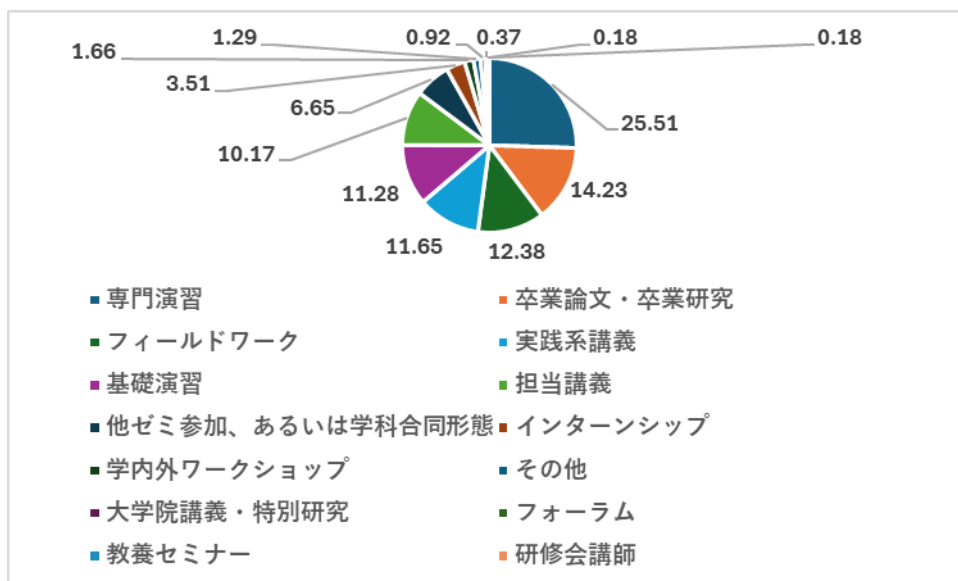
図表 16 大学、企業との連携の場（佐世保校、シーボルト校合計）

	教養セミナー	基礎演習	専門演習	卒業論文・卒業研究	担当講義	実践系講義	実習（シーボルト校）	大学院講義・特別研究	他ゼミ参加、あるいは学科合同形態	フォーラム	フィールドワーク	インターンシップ	研修会講師	学内外ワークショップ	その他	計（学部別）
佐世保校	1	61	131	66	36	56	0	3	31	2	67	19	1	9	5	488
シーボルト校	0	0	7	11	19	7	0	2	5	0	0	0	0	0	2	53
合計	1	61	138	77	55	63	0	5	36	2	67	19	1	9	7	541

（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

佐世保校、シーボルト校全体でみると合計が541件、内訳はゼミ関連が180（全体の51.02%）、フィールドワーク67（12.38%）、実践系講義63（同9.58%）、担当講義が55（同10.17%）、などとなっている（図表16及び図表17参照）。

図表 17 大学、企業との連携の場（佐世保校、シーボルト校合計）（単位：％）



（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

3) 回答結果の分析 [2] 大学、企業等との連携の場（講義、ゼミなど）：学科単位の傾向

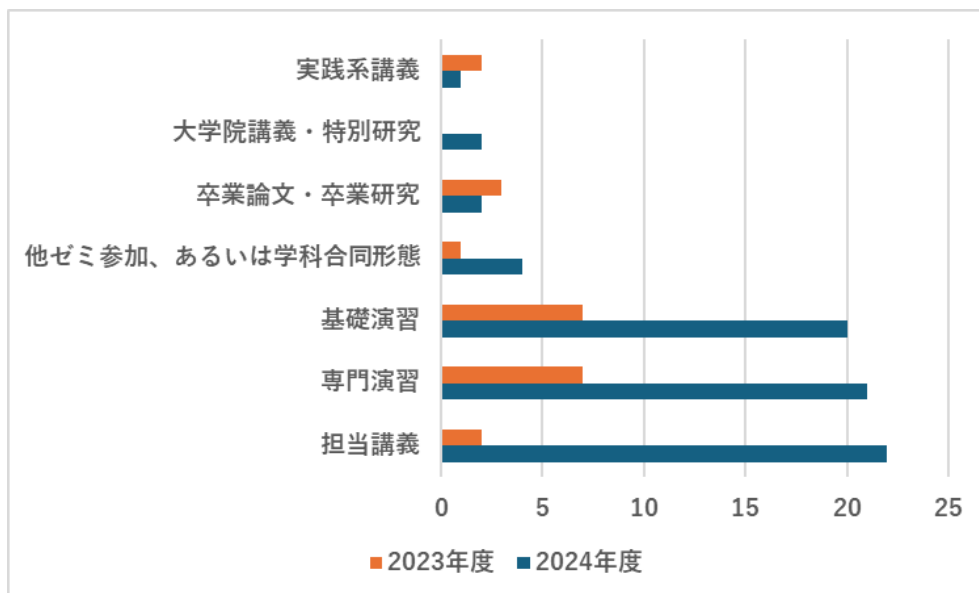
ここからは、佐世保校 2 学部 2 学科、シーボルト校 3 学部 5 学科それぞれ、学科単位ごとに、大学、企業等との連携の状況について回答結果を分析する。

なお、以下の回答結果の分析における回答数については、教員の回答状況から、1つの取り組みの中でも、例えば、基礎演習、専門演習、卒業論文合同といった学年横断での実施や、複数のゼミが参加する合同ゼミ方式など、1つの授業、ゼミに留まらない形で取り組んでいるケースがみられることから、分析の過程で、2(3)1)で示した回答件数と連携の場（講義・ゼミ・実習系など）の数が一致しないことが明らかになった。

以下の分析では、連携の場の数を回答数としてカウント、分析することにより、より具体的な連携の状況を把握することが可能になることから、「大学、企業等との連携の場（講義、ゼミなど）」の視点から結果を取りまとめた。

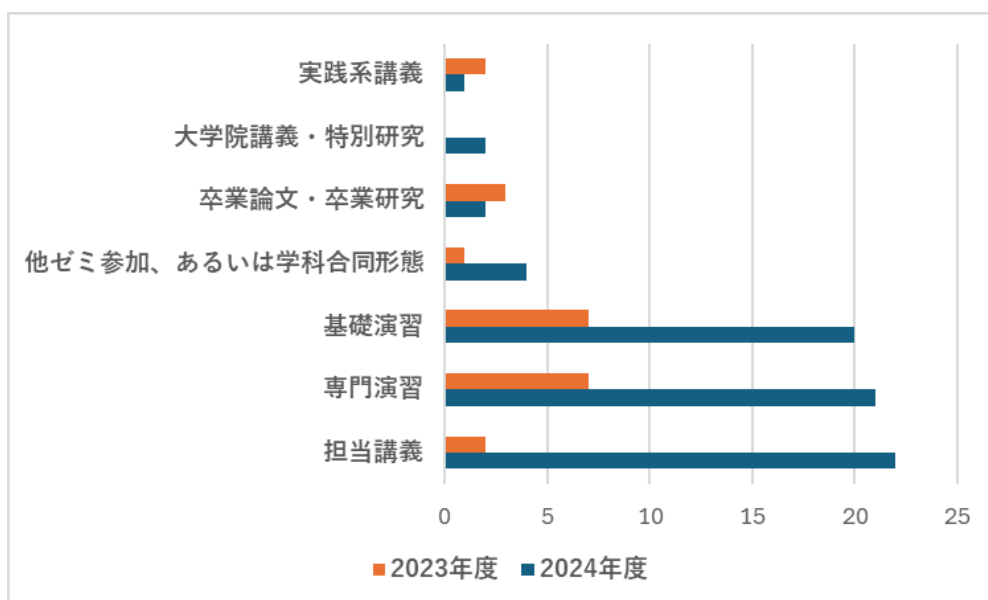
〈1〉 佐世保校（経営学科・国際経営学科・公共政策学科・実践経済学科）

図表 18 大学、企業との連携の場（経営学科）（※複数回答、単位：件）



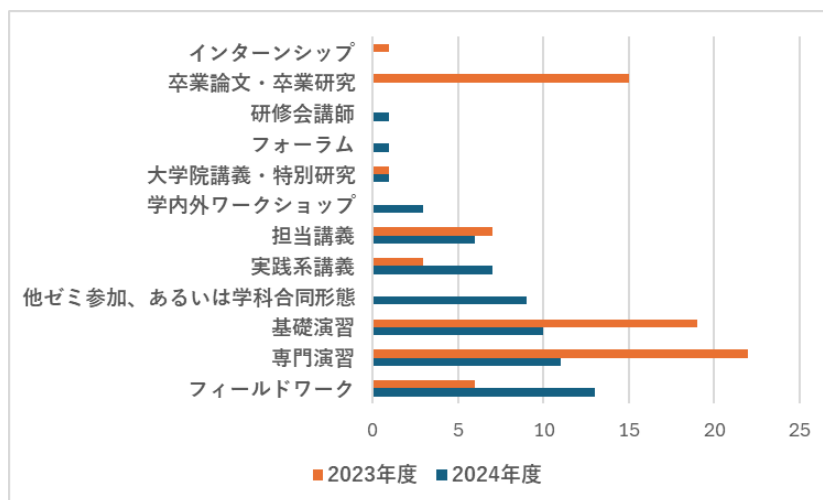
（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024年度 他大学や産業界との連携等調査」
結果をもとに筆者作成。

図表 19 大学、企業との連携の場（国際経営学科）（※複数回答、単位：件）



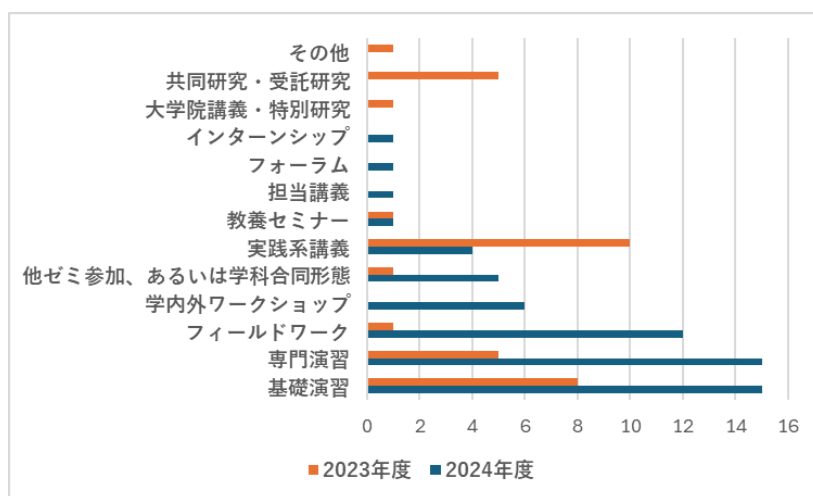
（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024年度 他大学や産業界との連携等調査」
結果をもとに筆者作成。

図表 20 大学、企業との連携の場（公共政策学科）（※複数回答、単位：件）



（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

図表 21 大学、企業との連携の場（実践経済学科）（※複数回答、単位：件）



（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

大学、企業等との連携の場（講義、ゼミ、インターンシップなど）における学科単位の傾向を、学科毎にグラフにまとめた。図表 18～21 は佐世保校の 4 学科それぞれに関するグラフである。

佐世保校に関しては、経営学科は連携の場として担当講義が 22 (30.56%)、専門演習

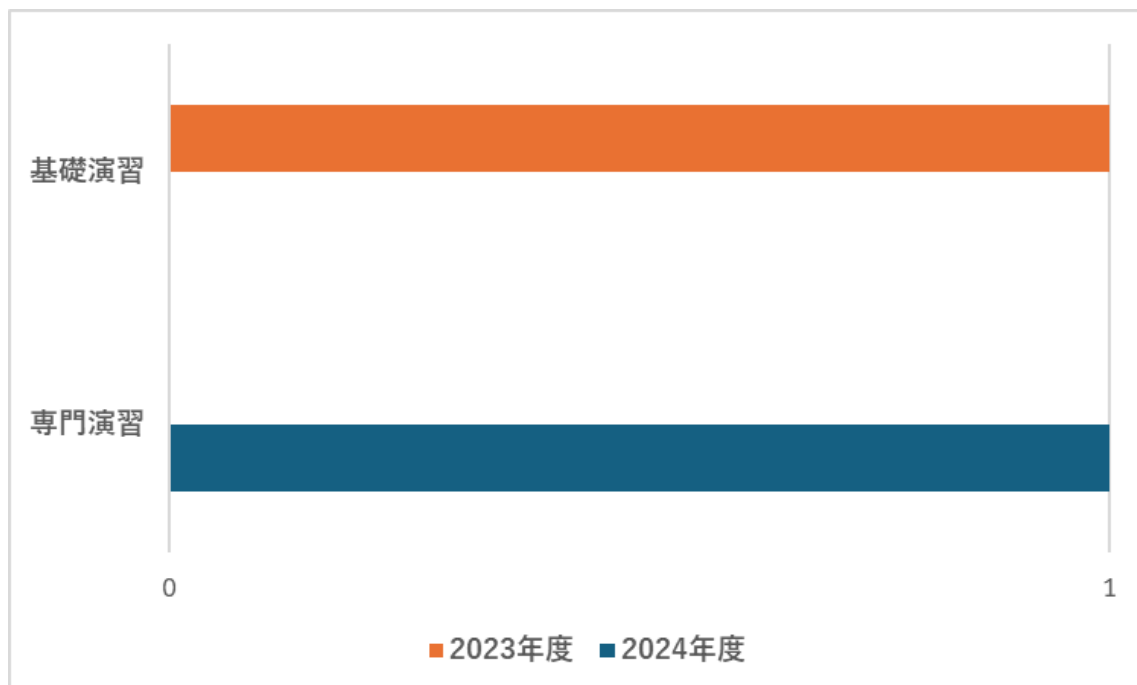
習が 21 (29.17%)、基礎演習が 20 (27.78%) (複数回答) などとなっている。また、国際経営学科は専門演習が 84 件(28.67%)、卒業論文・卒業研究が 64 件(21.84%)、実践系講義が 44 件 (15.02%) (複数回答) などとなっている。

公共政策学科はフィールドワークが 13 件(20.97%)、専門演習が 11 件(17.74%)、基礎演習が 10 件 (16.13%) (複数回答) などとなっている。実践経済学科は、基礎演習及び専門演習がそれぞれ 15 件 (24.59%)、フィールドワーク 12 件 (19.67%) (複数回答) などとなっている。総括すると、全体としてはゼミを通じての連携が各学科とも多い一方で、学科によっても違いがあることも明らかになった。

〈2〉シーボルト校 (国際社会学科・情報システム学科・情報セキュリティ学科・看護学科・栄養健康学科)

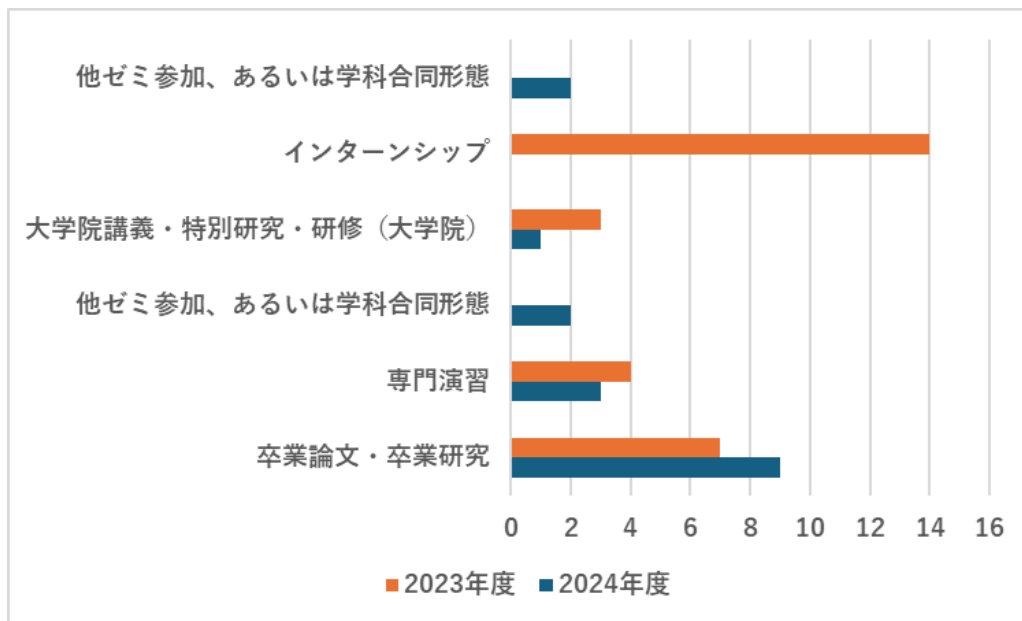
シーボルト校に関しても、佐世保校と同様に学科毎にグラフにまとめた。図表 22～26 はシーボルト校 5 学科それぞれに関するグラフである。

図表 22 大学、企業との連携の場 (国際社会学科) (※複数回答、単位：件)



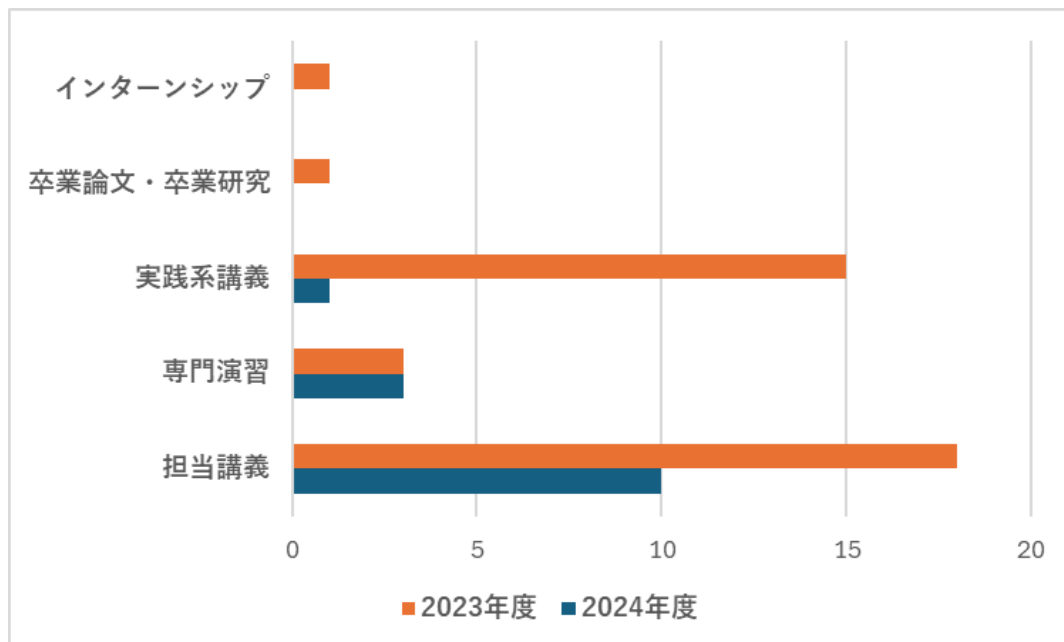
(出所)長崎県立大学教育開発センター「2024 年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

図表 23 大学、企業との連携の場（情報システム学科）（※複数回答、単位：件）



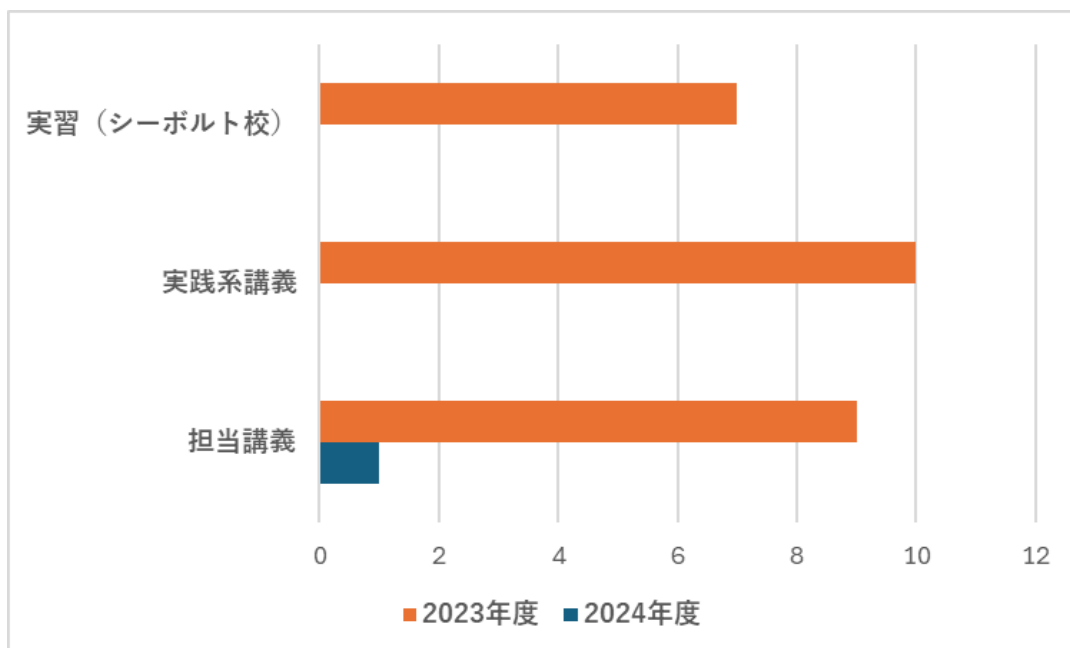
（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

図表 24 大学、企業との連携の場（情報セキュリティ学科）（※複数回答、単位：件）



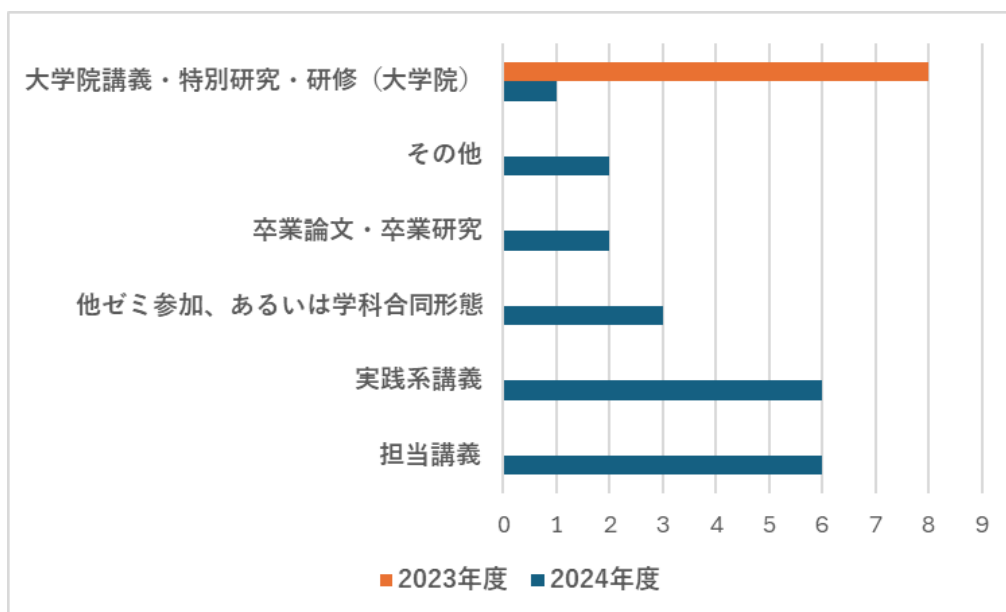
（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

図表 25 大学、企業との連携の場（看護学科）（※複数回答、単位：件）



（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

図表 26 大学、企業との連携の場（栄養健康学科）（※複数回答、単位：件）



（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

一方、シーボルト校に関しては、国際社会学科が専門演習 1 件（全体：1 件）、情報システム学科が担当講義 9（52.94%）、専門演習 3（17.65%）（全体：17 件）、情報セキュリティ学科が担当講義 10（71.43%）、専門演習 3（21.43%）（全体：14 件）、看護学科が担当講義 1（全体：1 件）となっている。さらに、栄養健康学科が担当講義及び実践系講義がそれぞれ 6 件（30%）（全体：20 件）となっている。

4) 回答結果の分析 [3] 大学、企業等の連携先：学部毎及び全体的な傾向

図表 27 大学、企業等の連携先（佐世保校）

	企業	大学関係	研究所・シンクタンク	公共機関（国の省庁、外郭団体、日銀など、地方支店含む）	公共機関（都道府県）	公共機関（市町村）	金融機関（銀行など）	大使館・領事館・海外部局・海外自治体部局、国際民間団体関連	国際機関、関連団体、援助関連事務所	議会・議員関連（国）	議会・議員関連（都道府県）	議会・議員関連（市町村）	地域団体・まちづくり団体	各種団体（新聞社、農協、漁協含む）	NPO・NGO	学校関係（幼稚園・保育園、小学校、中学校、高校など）	病院・医療機関関連	個人/その他	合計
経営学部	100	23	4	6	5	4	5	20	16	2	0	1	0	12	0	12	0	14	224
地域創造学部	57	15	1	2	0	15	2	0	0	0	1	2	19	13	0	2	0	0	129
合計	157	38	5	8	5	19	7	20	16	2	1	3	19	25	0	14	0	14	353

（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024 年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

図表 28 大学、企業等の連携先（シーボルト校）

	企業	大学関係	研究所・シンクタンク	公共機関（国の省庁、外郭団体、日銀など、地方支店含む）	公共機関（都道府県）	公共機関（市町村）	金融機関（銀行など）	大使館・領事館・海外部局・海外自治体部局、国際民間団体関連	国際機関、関連団体、援助関連事務所	議会・議員関連（国）	議会・議員関連（都道府県）	議会・議員関連（市町村）	地域団体・まちづくり団体	各種団体（新聞社、農協、漁協含む）	NPO・NGO	学校関係（幼稚園・保育園、小学校、中学校、高校など）	病院・医療機関関連	個人/その他	合計
国際社会学部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
情報システム学部	34	0	0	2	2	12	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	2	55
看護栄養学部	3	1	0	0	0	6	0	5	0	0	0	0	0	0	0	2	9	1	27
合計	37	1	0	2	2	18	0	5	0	0	0	0	0	4	0	2	9	3	83

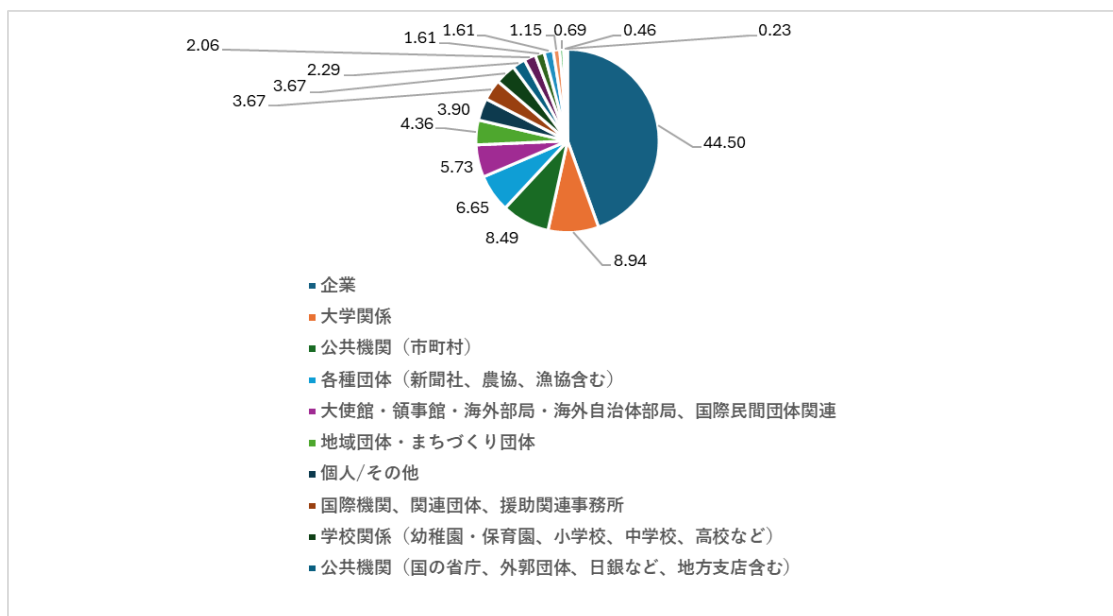
（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024 年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

図表 29 大学、企業等の連携先（佐世保校・シーボルト校の合計）

	企業	大学関係	研究所・シンクタンク	公共機関（国の省庁、外郭団体、日銀など、地方支店含む）	公共機関（都道府県）	公共機関（市町村）	金融機関（銀行など）	大使館・領事館・海外部局・海外自治体部局、国際民間団体関連	国際機関、関連団体、援助関連事務所	議会・議員関連（国）	議会・議員関連（都道府県）	議会・議員関連（市町村）	地域団体・まちづくり団体	各種団体（新聞社、農協、漁協含む）	NPO・NGO	学校関係（幼稚園・保育園、小学校、中学校、高校など）	病院・医療機関関連	個人/その他	合計
佐世保校	157	38	5	8	5	19	7	20	16	2	1	3	19	25	0	14	0	14	353
シーボルト校	37	1	0	2	2	18	0	5	0	0	0	0	0	4	0	2	9	3	83
合計	194	39	5	10	7	37	7	25	16	2	1	3	19	29	0	16	9	17	436

（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024 年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

図表 30 大学、企業等の連携先（佐世保校・シーボルト校の合計）（単位：％）



（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024 年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

大学、企業等の連携先におけるにおける学部及び佐世保校・シーボルト校、大学全体としての傾向を表及びグラフにまとめた（図表 27～30）。ここでいう連携先とは、各学科のアンケート調査結果をもとに、①企業、②大学関係、③研究所・シンクタンク、④公共機関（国の省庁、外郭団体など）、⑤公共機関（都道府県）、⑥公共機関（市町村）⑦金融機関（銀行など）、⑧大使館・領事館・海外部局・海外自治体部局・国際民間団体関連、⑨国際機関、関連団体、援助関連事務所、⑩議会・議員関連（国）、⑪議会・議員関連（都道府県）、⑫議会・議員関連（市町村）、⑬地域団体・まちづくり団体、⑭各種団体（新聞社、農協、漁協含む）、⑮NPO・NGO、⑯学校関係（幼稚園・保育園、小学校、中学校、高校など）、⑰病院・医療機関関連、⑱個人/その他、のことを指している。本報告書では、これらの連絡先を 17 のカテゴリーに分類している。

なお、以下の回答結果の分析における回答数については、教員の回答状況から、1つの取り組みの中でも、例えば、1つの案件であっても、複数の連携先が絡んでいるケースがみられることから、分析の過程で、2（3）1)で示した回答件数と連携先の数が一致しないことが明らかになった。

以下の分析では、連携先の数を回答数としてカウント、分析することにより、現状に

おける産学連携における連携先や各講義・ゼミ等と連携先の広がりに関する状況を把握することが可能になることから、大学・企業等の連携先の視点から結果を取りまとめたものである。

佐世保校では、大学・企業等の連携先の総数が 353 件である。これは、佐世保校及びシーボルト校を併せた総数の 80.96% を占める。

また、佐世保校における大学・企業の連携先の内訳に関して主なものを挙げると、企業が 157 件（全体の 44.48%）、大学関係が 38 件（同 10.76%）、各種団体（新聞社、農協、漁協を含む）が 25 件（同 7.08%）、大使館・領事館、海外部局・海外自治体部局関連が 20 件（同 5.67%）などとなっている（詳細は、図表 27 参照）。

佐世保校の学部別では、経営学部が総数 224 件、地域創造学部が 129 件である。そのうち、経営学部では、企業との連携が 100 件（経営学部全体の 44.64%）、大学関係が 23 件（全体の 10.27%）、大使館・領事館、海外部局・海外自治体部局関連が 20 件（同 20%）などとなっている。一方、地域創造学部では、企業が 57 件（地域創造学部全体の 44.18%）、地域団体・まちづくり団体との連携が 19 件（同 14.73%）、大学関係及び公共機関（市町村）との連携がそれぞれ 15 件（同 11.63%）、などとなっている（詳細は、図表 27 参照）。

他方、シーボルト校では、3 学部全体において、企業との連携がキャンパス全体の約 44.58% を占めている。また、公共機関（市町村）が 18 件（同 21.69%）などとなっている。学部別では、情報システムに関しては企業との連携が 34 件（学部全体の 61.82%）、公共機関（市町村）が 12 件（同 21.82%）などとなっている。また、看護栄養学部では、病院・医療機関関連が 9 件（学部全体の 33.33%）、公共機関（市町村）5 件（同 18.52%）などとなっている（詳細は、図表 28 参照）。

佐世保校及びシーボルト校を併せた大学全体としては、大学・企業等の連携先の総数が 436 件である。そのうち、企業が 194 件（44.50%）、大学関係が 39 件（8.95%）、公共機関（市町村）が 37 件（8.49%）などとなっている。

これらの結果から、佐世保校、シーボルト校とも企業との連携が約 4 割を占めていること、佐世保校では大学関係、シーボルト校では公共機関（市町村）との連携が多いことが明らかになった。また、地域創造学部における地域団体・まちづくり団体との連携、国際経営における大使館・領事館、海外部局・海外自治体部局、国際民間団体関連との連携や看護栄養学部における病院・医療機関関連との連携の多さにみられるように、学

部の専門性や特徴を反映した連携がみられることも読み取れる。

5) 回答結果の分析 [4] 大学、企業等の連携先：学科毎の傾向

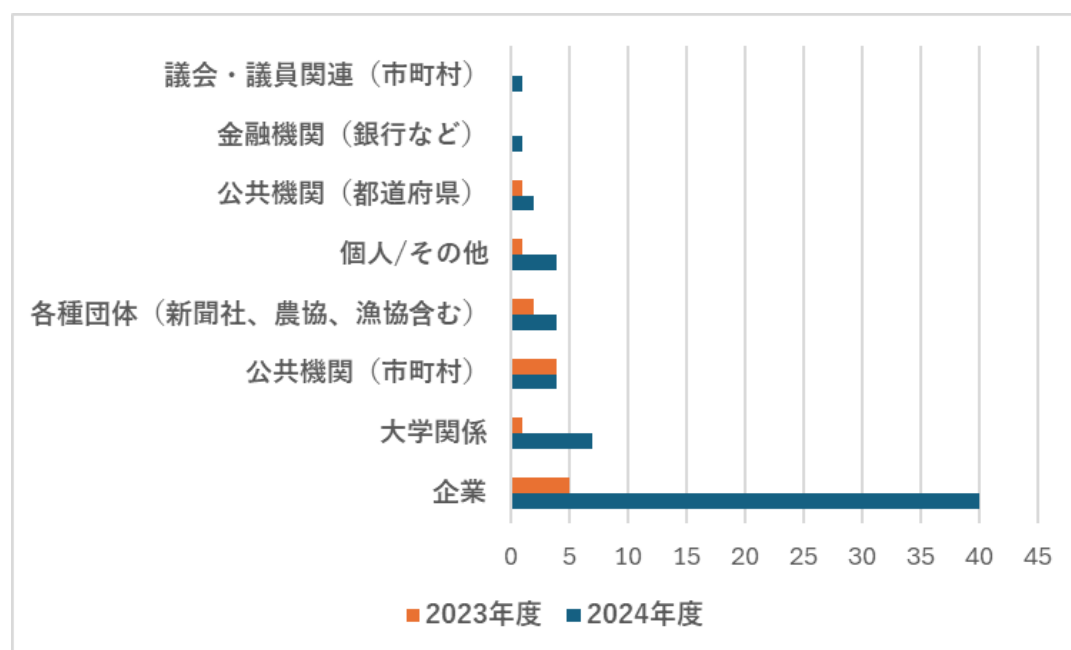
〈1〉佐世保校（経営学科・国際経営学科・公共政策学科・実践経済学科）

大学、企業等の連携先におけるにおける学科単位の傾向を、学科毎にグラフにまとめた。ここでいう連携先は、各学科のアンケート調査結果をもとに、3) [2] 同様のカテゴリーに分類して分析している。

以下の分析では、4) [3] 同様、連携先の数を回答数としてカウント、分析することにより、現状における産学連携における連携先や各講義・ゼミ等と連携先の広がりに関する状況を把握することが可能になることから、大学・企業等の連携先の視点から結果を取りまとめたものである。

図表 31～34 は佐世保校の 4 学科それぞれに関するグラフである。

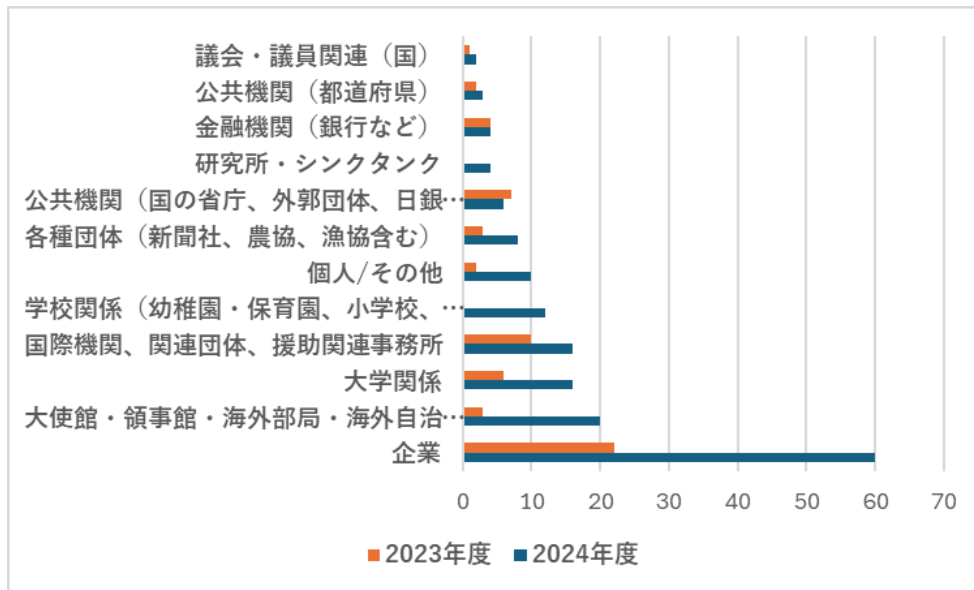
図表 31 大学、企業などとの連携先（経営学科）（※複数回答、単位：件）



※ [注] 2023 年度は、2024 年度のカテゴリーに基づいて、若干データを修正している。

(出所)長崎県立大学教育開発センター「2024 年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

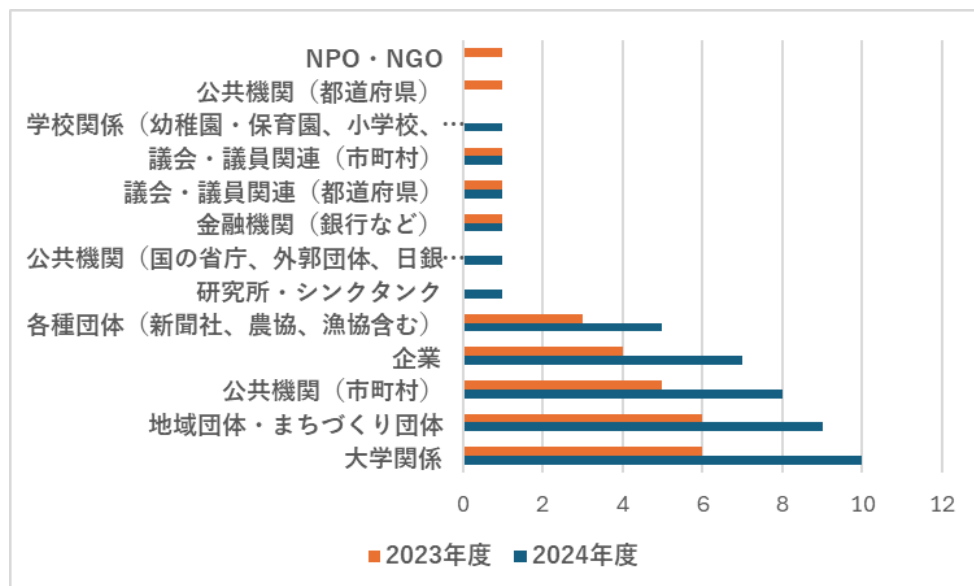
図表 32 大学、企業などとの連携先（国際経営学科）（※複数回答、単位：件）



※ [注] 2023年度は、2024年度のカテゴリに基づいて、若干データを修正している。

（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

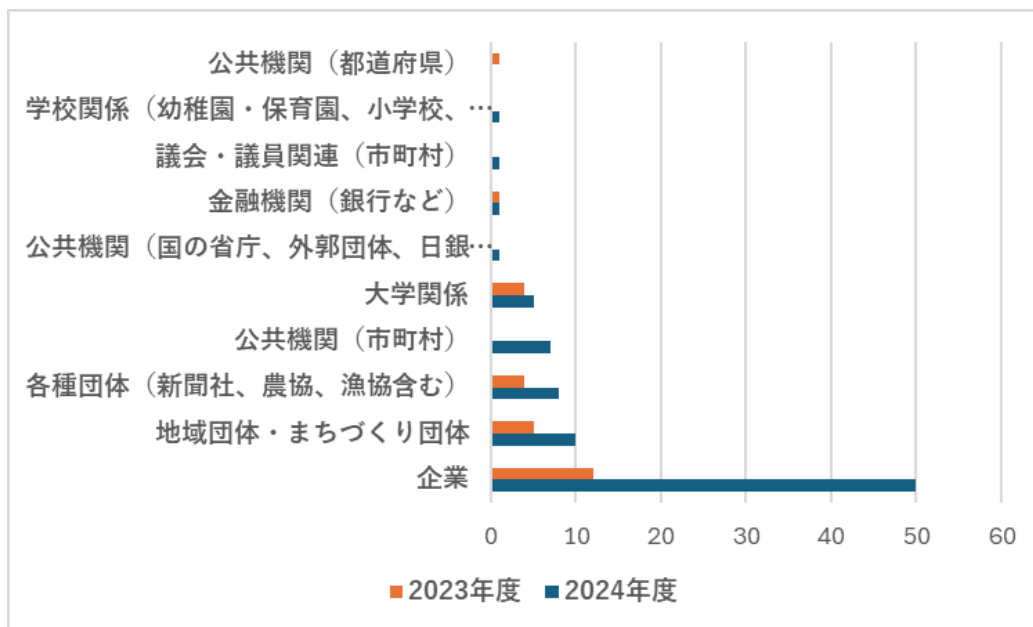
図表 33 大学、企業などとの連携先（公共政策学科）（※複数回答、単位：件）



（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024年度 他大学や産業界との連携等調査」

結果をもとに筆者作成。

図表 34 大学、企業などとの連携先（実践経済学科）（※複数回答、単位：件）



（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

佐世保校における産学連携状況に関しては、経営学科（全体：63件）が企業40件（学科全体の63.49%）、大学関係7件（11.11%）など、国際経営学科（全体：161件）が大使館等20件（学科全体の12.42%）、大学関係及び国際機関、関連団体、援助関連事務所関連がそれぞれ16（同9.94%）、学校関係が12件（同7.45%）など、公共政策学科（全体：45件）が大学関係10件（学科全体の22.22%）地域団体・まちづくり団体9件（同20.00%）、公共機関（市町村）8件（同17.78%）など、実践経済学科（全体：84件）のうち、企業との連携が50件（学科全体の59.52%）、地域団体・まちづくり団体10件（同11.90%）、各種団体（新聞社、農協、漁協含む）8件（同9.52%）、公共機関7件（同8.33%）、となっている。

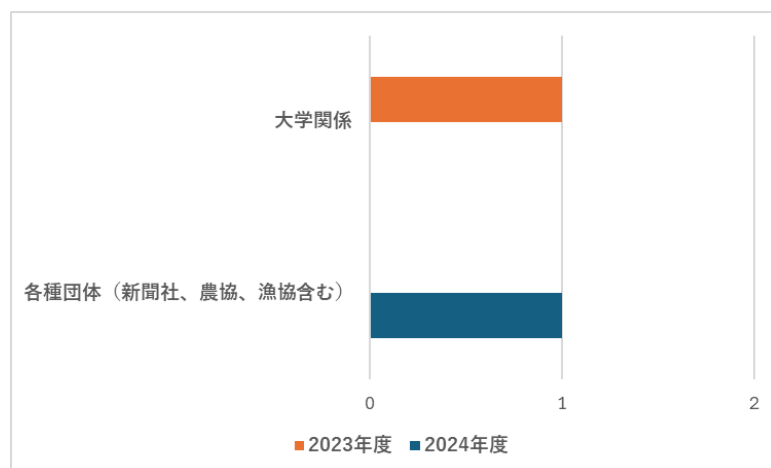
〈2〉シーボルト校（国際社会学科・情報システム学科・情報セキュリティ学科・看護学科・栄養健康学科）

シーボルト校に関しても、佐世保校と同様に学科毎にグラフにまとめた。図表 35～

39はシーボルト校5学科それぞれに関する産学連携先に関するグラフである。

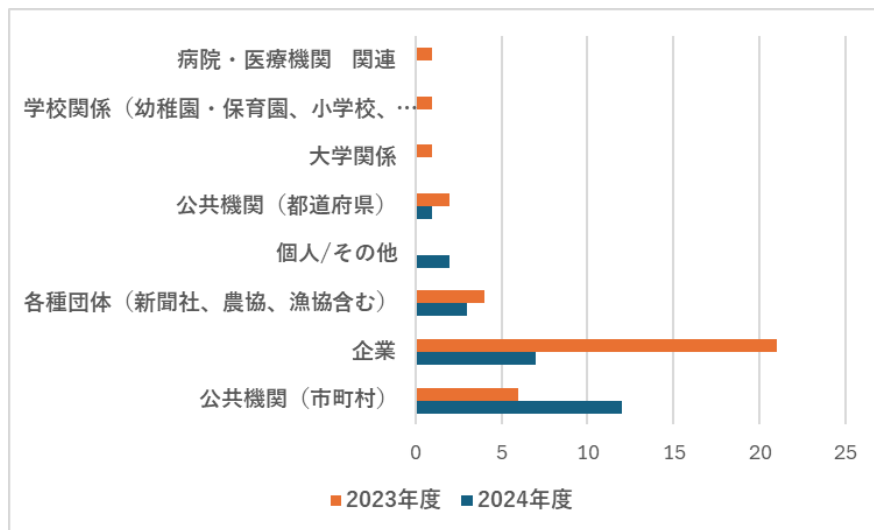
シーボルト校に関しては、国際社会学科（全体：1件）が各種団体1件、情報システム学科（全体：25）は公共機関（市町村）12件（学科全体の48.00%）、企業が7件（同28.00%）など、情報セキュリティ学科（全体：30件）が企業27件（同90.00%）、公共機関2件（6.67%）など、看護学科（全体：1件）が病院・医療機関関連が1件となっている。さらに、栄養健康学科（全体：26件）が病院・医療機関8件（学科全体の30.77%）、公共機関（市町村）6件（23.08%）、大使館・領事館等5件（19.23%）などとなっている。

図表 35 大学、企業などとの連携先（国際社会学科）（※複数回答、単位：件）



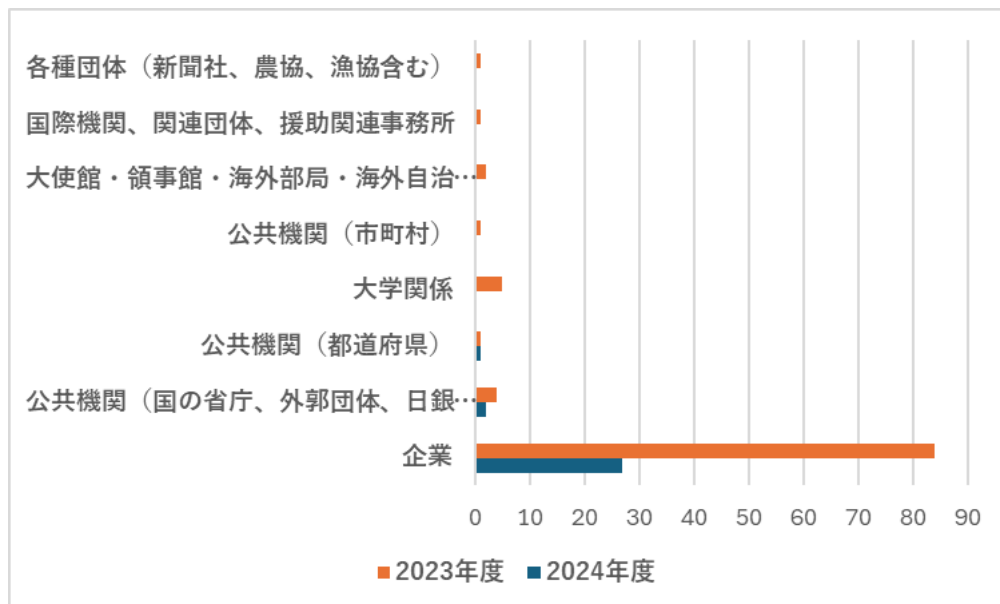
（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

図表 36 大学、企業などとの連携先（情報システム学科）（※複数回答、単位：件）



（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024 年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

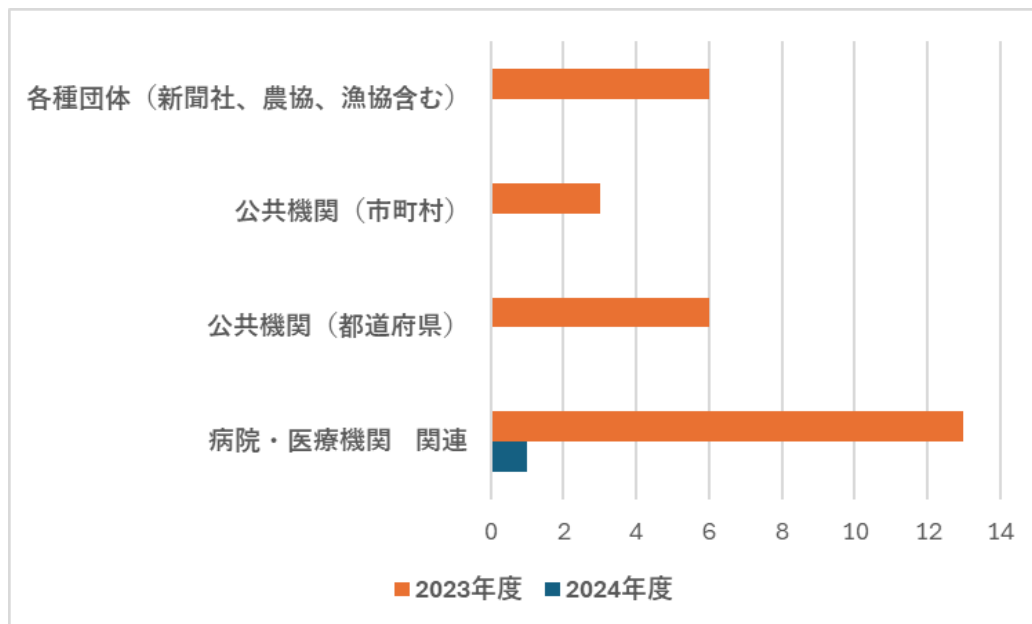
図表 37 大学、企業などとの連携先（情報セキュリティ学科）（※複数回答、単位：件）



※ [注] 2023 年度は、2024 年度のカテゴリーに基づいて、若干データを修正している。

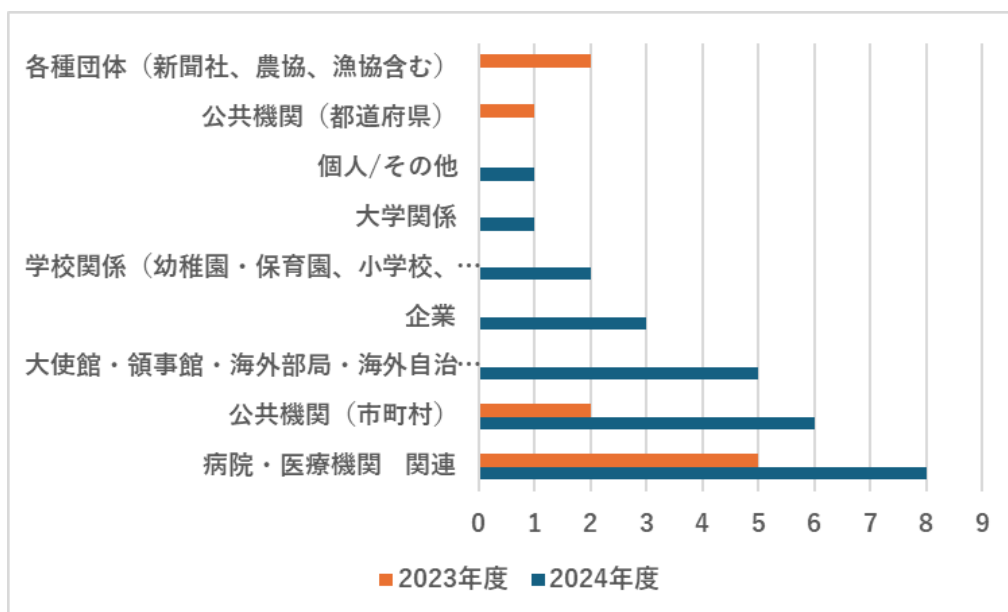
（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024 年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

図表 38 大学、企業などとの連携先（看護学科）（※複数回答、単位：件）



（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

図表 39 大学、企業などとの連携先（栄養健康学科）（※複数回答、単位：件）



※ [注] 2023年度は、2024年度のカテゴリーに基づいて、若干データを修正している。

（出所）長崎県立大学教育開発センター「2024年度 他大学や産業界との連携等調査」

結果をもとに筆者作成。

(4) まとめ

今回の他大学や産業界等との連携調査から以下のことが明らかになった。

第1に、申告数に関しては2023年度が343件なのに対し、2024年度は541件と1.57倍の増加となった。また、申告総数のうち、佐世保校が448件、シーボルト校が53件と佐世保校が82.81%と約5分の4を占めた。

第2に、教員から申告された件数と連携の場の件数を比較してみた所、図表33に示したように、佐世保校では申告件数252件に対して、連携の場から見た件数が488件と開きがあったのに対して、シーボルト校は件数合計が47件、連携の場から見た件数合計が53件であった。なお、教員から申告された件数と連携の場の件数が佐世保校において異なっている要因としては、学科毎の連携の場の件数の分析結果から、佐世保校が、産学連携の取り組みに対して学年横断であったり、複数のゼミが合同実施するケースが多く見られたのに対し、シーボルト校ではそのようなケースが少なかったことが挙げられる。

図表40 各学部、キャンパス毎の、件数及び連携の場から見た件数の比較

キャンパス・学部		学科名	件数	件数合計	連携の場から見た件数	連携の場から見た件数合計
佐世保校	経営学部	経営学科	49	252	72	488
		国際経営学科	141		293	
	地域創造学部	公共政策学科	28		62	
		実践経済学科	34		61	
シーボルト校	国際社会学部	国際社会学科	1	47	1	53
	情報システム学部	情報システム学科	14		17	
		情報セキュリティ学科	14		14	
	看護栄養学部	看護学科	1		1	
		栄養健康学科	17		20	
合計			299	299	541	541

(出所)長崎県立大学教育開発センター「2024年度 他大学や産業界との連携等調査」結果をもとに筆者作成。

第3に、連携の場に関する分析結果から、佐世保校では、専門演習や基礎演習、卒業論文といったゼミの中で、大学や企業、さまざまな団体との連携を行っている割合が全体の約半数を占めていることや、フィールドワーク、実践系講義等において産学連携が行われていることが主な傾向として挙げられるであろう。それに対し、シーボルト校で

は、担当講義（35.87%）を筆頭に、卒業論文・卒業研究や専門演習、実践系講義、他ゼミ参加、あるいは学科合同形態の連携、大学院講義・特別研究等様々な場面において、連携の取り組みを行っていることが明らかになった。

第4に、連携先の分析結果から、また、連携先に関しては、キャンパス別に見た場合、佐世保校、シーボルト校とも、企業との連携が一番多かった。佐世保校では国際経営学科や実践経済学科、シーボルト校では情報セキュリティ学科における連携先の多さが反映した結果となっている。

また、連携先の分析結果でも述べたように、国際経営学科や栄養健康学科など、学科専門性や性格、カリキュラムが連携先の傾向に顕著に反映している学科もあった。

学科毎の特徴として整理することが困難な部分に関しては、特定の教員が大学、企業、まちづくり団体などとの連携先の窓口となっており、教員のネットワークや専門分野、研究テーマ・トピックが反映された側面もあるといえよう。

最後に、本調査及び分析は、2023年度の試行に引き続き2回目の調査であり、昨年度、長崎県立大学において初めて実施した調査を受けて、調査主体のカテゴリーなどを見直した中でデータ集計及び解析を行ったことから、一定の傾向を抽出できたことは進展とみることができよう。その一方で、他大学や産業界との連携等調査の進め方や産学連携に携わった教員への本調査への理解と回答への協力へのお願い、調査の解析方法、そしてでてきた結果の活用の仕方に関しては、引き続き今後の課題といえるだろう。とりわけ産学連携に関しては、文部科学省において、産学連携等の実施状況について広く把握し、今後の施策の企画・立案に反映させることを目的として、全国の大学等を対象に産学連携等の実施状況を毎年度調査している。「大学等における産学連携等実施状況について 令和5年度実績調査結果概要」（2025（令和7）年2月14日公表）の中では、調査項目としては、共同研究、受託研究、治験、知的財産等に係る実績となっており、研究資金等受入額や民間企業からの研究資金等受入額、民間企業との共同研究、知的財産などの調査結果がまとめられている。

また、総務省では、「産学官連携による地域活性化に関する実態調査」（2020（令和2）年9月）にみられるように、地場産業の創出・育成の手法の一つであり、地域活性化の手法としても重要性を増している「産学官連携」の取組の実態調査を行っている。これらからもわかるように、産学連携の取り組みや実態調査は様々な形で行われているが、「産学連携」「産学官連携」の用語自体が幅広い意味を持つことから、今後、これら

の定義や範囲のさらなる精査も行いながら、全国動向や他の大学事例と比較可能な調査形態も検討していく必要がある。今回の調査結果や、調査の過程で明らかになった課題、回答した教員の意見などをもとに、さらに関係者間で精査・議論して、よりよい調査を実施するとともに、各教員の個性や専門分野、各学科の特徴を最大限生かした形での幅広い連携と大学の地域・国際社会への貢献の姿を引き続き模索していきたい。

参考 URL

愛知学院大学健康科学部 HP 「学生座談会」

https://health.agu.ac.jp/topics_discussion/

(2025年3月13日最終閲覧)

総務省 HP 「産学官連携による地域活性化に関する実態調査」 <結果に基づく通知>

(2020(令和2)年9月11日)

https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/hyouka_020911000141426.html

(2025年3月13日最終閲覧)

広島市立大学 HP 「学生座談会」

<https://www.hiroshima-cu.ac.jp/aboutus/category0009/c00009097/>

(2025年3月13日最終閲覧)

明治大学情報コミュニケーション学部 HP 「教員と学生による座談会」

<https://www.meiji.ac.jp/infocom/outline/6t5h7p00003adnzd.html>

(2024年3月13日最終閲覧)

前田竜孝・芳賀普隆(2024)「座談会・他大学や産業界との連携等調査」橋本優花里・柳田多聞・大澤裕次・大田謙一郎・大久保文博・前田竜孝・芳賀普隆・吉光正絵・藤沢望・齋藤正也・田中進・立石憲彦『2023年度長崎県立大学教育開発センター活動報告書』24-51, 長崎県立大学教育開発センター。

文部科学省「大学等における産学連携等実施状況について 令和5年度実績

調査結果概要」(2025(令和7)年2月14日(公表))文部科学省 科学技術・学術
政策局

産業連携・地域振興課

https://www.mext.go.jp/content/20250214-mxt_sanchi02-000040306_1-01-1.pdf (2025年3月13日最終閲覧)

付記

座談会にご参加くださいました学生の皆様、他大学や産業界との連携等調査にご回答
くださいました教員の皆様に感謝申し上げます。本学の授業改善と、地域・企業との連
携において貴重なご意見を収集することができました。最後になりましたが、佐世保校
学生支援課教務グループの上田雛子さま、藤井志乃さまには両プロジェクトの企画から
運営、アンケートの集計にいたるまで格別なるご協力を賜りました。皆様のおかげで良
い企画となりました。ありがとうございました。記して感謝申し上げる次第でございま
す。

なお、本章に関する執筆分担は以下の通りです。

1. (1)～(3)、2. (1)～(2)、付記

：地域創造学部 公共政策学科 講師 前田竜孝

1. (4)、2. (3)～(4)

：地域創造学部 実践経済学科 准教授 芳賀普隆

シーボルト校の活動を振り返って

教育開発センター委員 副センター長 柳田 多聞

国際社会学部 国際社会学科 准教授

今年度、シーボルト校のセンター委員は栄養健康学部でのみ交代があった。各メンバーの所掌分野は、昨年からの継続メンバーには引き続き同じ分野を、栄養健康学部の委員には前年度の同じ学科が担当していた分野を担当していただいた。

シーボルト校の所掌業務は、昨年度に引き続き「学習成果可視化の仕組みづくり」と「全学FD研修会」であった。シーボルト校では、「教育部会」と「IR部会」には分かれず、課題ごとに担当者を割り振って取り組んだ。

「学習成果の可視化の仕組みづくり」に関して

本年度の「学習成果可視化の仕組みづくり」の大きな柱は、ディプロマポリシー（以下、DP）達成評価に関するものと、アンケートに関するものであった。DP達成評価に関するものとして、「カリキュラムマップを用いたDP達成状況評価の仕組みづくりの検討」および「ALCS学修行動調査による全学DP達成度の評価」があった。アンケート分析に関するものとしては、「昨年度卒業時アンケート並びに今年度入学時アンケートの分析」と、「ALCS学修行動調査の分析並びに本学独自項目の検討」があった。

DP達成評価に関しては、昨年度に情報システム学科の専門科目のカリキュラムマップを用いて、DP達成の評価方法を検討していただいた藤沢先生が、全学教育科目のカリキュラムマップとALCS学修行動調査の「成長」項目を用いたKEN-SUN力の検証に取り組まれた。その結果、一つの可視化の形が示されるとともに、今後の検討課題も明らかになった。

ALCS学修行動調査に関しては、昨年に引き続き、東京家政学院大学特任教授の半田智久先生を佐世保校にお招きし、「調査準備とメール挙動テストのレクチャー」をしていただき、Zoomでも配信した（5月24日）。それに基づき、昨年同様に、半田先生にご教授いただいたステルスサーベイ方式での対象者への個別依頼メール送信を実施した。回収率は昨年（43.17%）よりも向上した（46.9%）が、その伸びはわずかにとどまったと言わざるを得ない。しかし、調査結果の分析については、斎藤先生により新たな試みがなされ、非常に複雑である「学

習成果の可視化」という課題への新たな可能性が提示された。

昨年度につづいての「卒業時アンケートの分析」（藤沢先生担当）に加えて、今年度は新規メンバーの高比良先生と斎藤先生による「入学時アンケートの分析」も実施した。それぞれのアンケート調査の結果から、学生の意識や要望を窺うことができ、今後の本学の教育改善やよりきめ細かな対応の指針が得られた。

「全学 FD 研修会」に関して

今年度の全学 FD は、昨年度に引き続いて2回の開催とし、第1回では一定期間を設けてのオンデマンド型の「自己研鑽 FD」を、第2回では講師を招いての講義に、キャンパスごとに集まったのグループワークと ZOOM で両キャンパスをつないだ形での「対面型 FD」を開催した。自己研鑽 FD の目的が授業の内容や方法の改善にあることは言うまでもないが、対面型 FD では離れたキャンパスを越えた教員間の相互交流の機会とすることも、FD の大きな目的の一つとして重要視している。これは、県内に2つの離れたキャンパスをもつ本学ならではの活動として、特筆すべきものだと考えている。第1回 FD の準備を新メンバーの駿河先生が担当し、第2回 FD の準備を昨年に引き続き吉光先生が担当した。

第1回のオンデマンド自己研鑽 FD では、昨年よりも実施期間を7月から3月までの9か月間に延長し、より多くの学びの機会として利用していただける体制とした。駿河先生には、昨年よりも100件以上も多くの教材を選定・追加していただくことにご尽力いただいた。

第2回では、昨年度の「講義法」を補う形での「ゼミ・研究室教育」をテーマとした。吉光先生に講師選定にご尽力をいただいて、京都橘大学 経営学部 経営学科 准教授の西野毅朗先生をお招きして、講義ならびにグループワークを実施した。

その結果、両方の回ともに、多数の参加者を得て（第1回：83%、第2回：92%）、実施後のアンケートからも非常に有意義な学びの機会となったことがうかがえた。

2024(令和 6)年度 ALCS 学修行動比較調査結果報告

教育開発センター委員 齋藤 正也

情報システム学部 情報セキュリティ学科 准教授

1. 調査の概要

ALCS 学修行動比較調査は、学生がみずからの学修行動をどう捉えているかを把握し、その結果を大学間で共有することで課題発見に役立てることを目的に教学比較 IR コモンズ (代表・東 ^{あずま}京 ^{きょう}一, <https://cmpir.jp/site/index.php>) の主導のもと各大学で行っているもので、現時点で本学を含む 13 大学が参加している。質問項目は 6 または 7 段階の評定尺度(-3,-2,-1,(0),1,2,3; 7 段階の場合 0 を含む)で回答する「経験」、「成長」、「満足」、「希望」、および「履修(本学独自)」に関する項目と、時間数(連続値)で回答する授業以外の時間の使い方に関する項目から構成される。質問項目は付録に掲載する。

2024 年度の調査は、2024 (令和 6) 年 6 月 24 日～7 月 10 日に実施され、全学学部生(1～4 年)3,006 名に対して実施した。有効回答数は 1,479 名であった(有効回答率 46.9%)。2023 年に導入した、対象者宛の依頼メールを送信するステルスサーベイ方式を踏襲し、本手法により回答者への依頼をした。2022 年度の 32.9%、2023 年度の 43.17%として回収率は向上傾向にある。

教育開発センターでは、アンケート調査の結果から課題抽出等を行う手法として特に可視化による方法を検討している。本報告では ALCS のデータについて行った試行結果である。したがって、分析としては網羅的であるよりも発見であることを予め断っておく。

2. 調査結果の全体的な可視化

2.1. 二次元配列としての全データの可視化とその考察

約 80 の質問項目からなる調査結果を一覧するのは容易ではない。そこで、評定尺度を取る質問項目について全データを可視化することを試みた(図表 1)。評定尺度に限れば、全データは回答者 ID と質問番号を添え字とする、-3～+3 の値を取る二次元配列とみなすことができる。

図表 1 (a)はこのような二次元配列をそのままカラースケールとして表示したものである。明らかに 4 つの質問項目群ごとに色の分布が異なっている。青から赤へ赤いほど得点が高くなる表示を取っており、ほとんどの質問項目で赤いほど学生の好ましい結果であると解釈できる。ただし、例えば「Q17. 履修したい授業を登録できなかったこと」の頻度のように、低い得点(青い)ほど、好ましい結果である項目があるので注意が必要である(以下、このような項目を逆転項目と呼ぶ)。実際、青い横線が確認され、このような逆転項目に対応するものが多い。このほか、Q34-53 の「成長」の項目では、色見が全体的に白くなっている。多くの回答者が中立的な 0 点周辺の得点を付けたこ

とを意味する。これらは外国語の運用能力やリーダーシップに関する項目であり、自己評価が難しかったのではないと思われる。

質問項目による得点分布の違いを確認しやすくするために、項目ごとに平均得点を求め、その値で並び替えたものを図表 1 (c) に示す。図の下側に多くの回答者が低得点を付けた項目(青い帯)、上側に高得点を付けた項目(赤い帯)が集まる。先に述べた逆転項目を除くと、図の下部に集まった項目のうち、真に好ましくない意味で低値をとる項目として

- Q25. 教職員やアドバイザーに学修に関連したことを尋ねたり相談したこと
- Q26. 大学内外で勉強会、研究会、講演会に参加したこと
- Q86. 短期の留学や海外語学研修に参加する
- Q87. 1年間程度、あるいはそれ以上の長期留学をする

が真に抽出された。なお、Q86 については、経営学部と国際社会学部で例外的に高い得点を付ける学生が多く、学科の特性に応じて興味関心が高い、あるいは機会が多いと考えられる。また、他学科に較べて、看護学科で高値を与える回答者が多かった項目として、

- Q8. 授業内での学生間のディスカッション

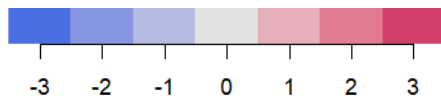
が抽出された。

最後に得点傾向により回答者と設問の両方について並べ替えた表示を図表 1 (d) に示す。この表示法のねらいは、多くの項目で高い得点を与える回答者でさえ低い得点を受けるとして、なにか解決すべき課題を探すことにある。幸いにして、今回の解析では逆転項目による見かけ上のもの(Q18 と Q23 が該当する)だけであった。

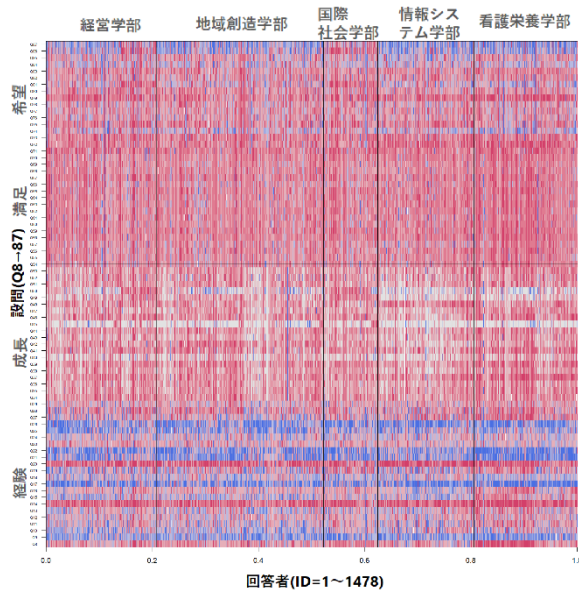
2.2. 「Q17. 履修したい授業を登録できなかったこと」の得点分布

質問項目「Q17 履修したい授業を登録できなかったこと」は、今後の授業開設上の課題を探るうえで重要である。上述の可視化では、低評価としては抽出されていない(実際、Q17 は図表 1 (c),(d)の最下段に現れ、最も頻度が低い。これは好ましいことである)。しかし、授業を登録できないことはそう高い頻度に発生しないので、全体的に得点が低いことを確認するのでは不十分である。そこで、本項目につき学部ごとの得点分布を調べることにした(図表 2)。学部間で分布形状に大きな違いはなく、低頻度(負の得点)に偏った分布になっている。しかし、1~2割程度の回答者が「たまにあった」以上の高頻度を与えていることには注意が必要である。

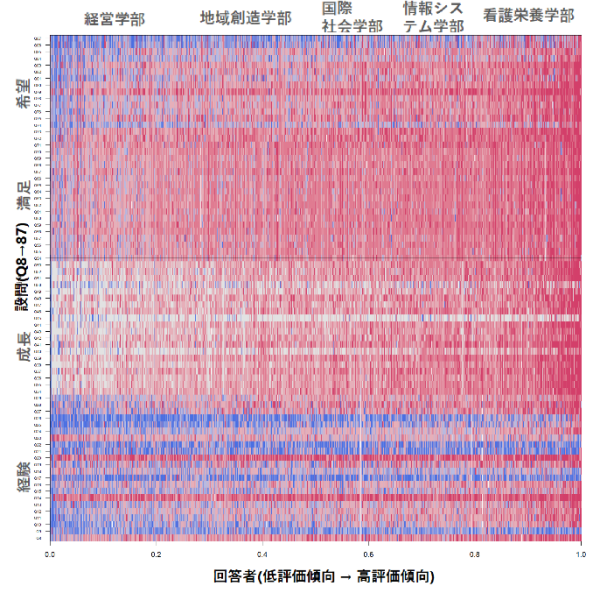
図表 1 評定尺度の回答項目について得点分布の可視化



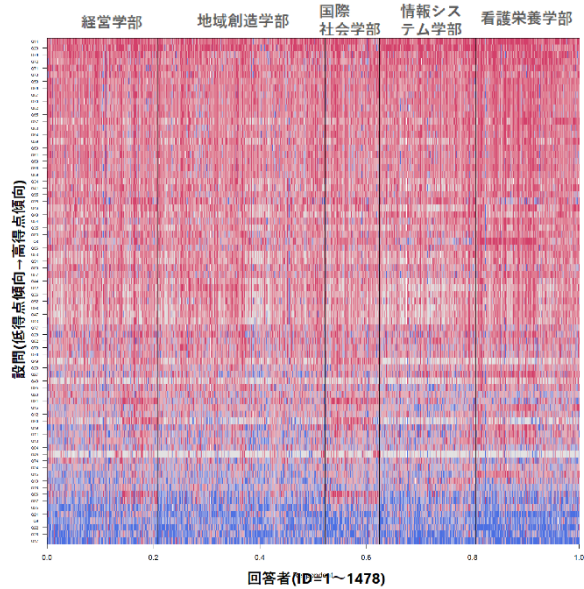
(a) 並べ替えなし



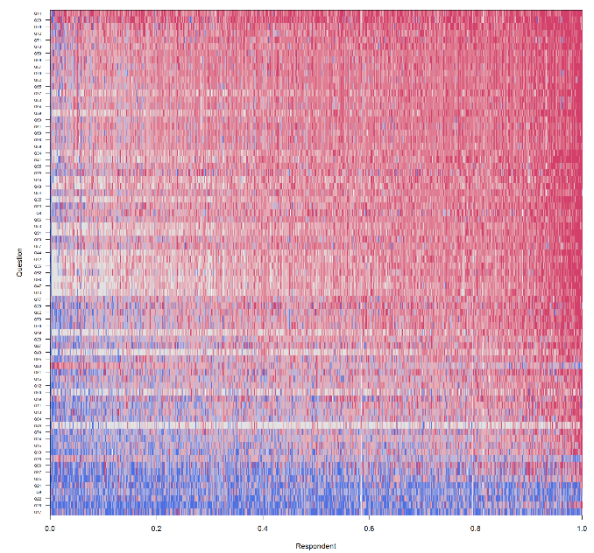
(b) 回答者について並び替え



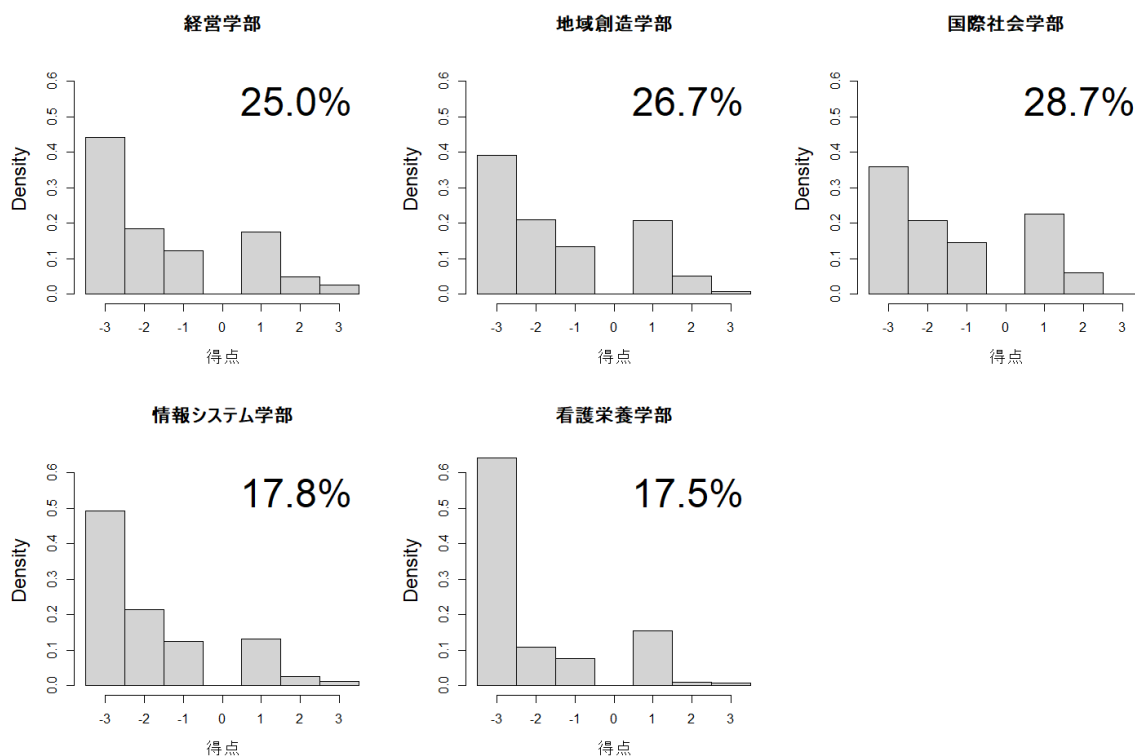
(c) 設問項目について並び替え



(d) 回答者/設問項目について並び替え



図表 2 「Q.17 履修したい授業を登録できなかったこと」についての学部ごとの得点分布



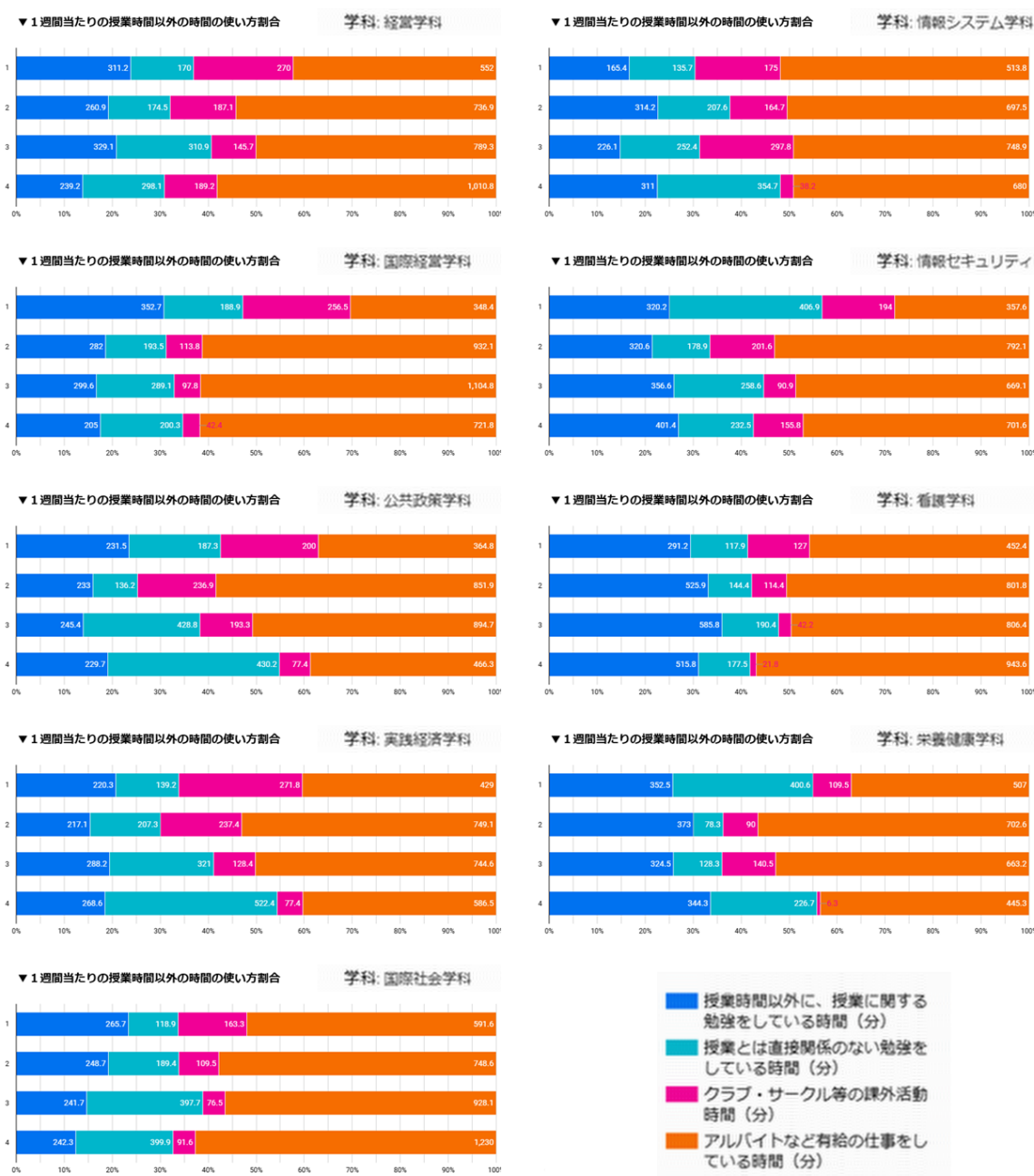
注：各パネルに得点が1~3点（登録できなかったことが「たまにあった」以上）の割合を表示している。

3. 項目ごとの特徴

3.1. 課外時間の活用

授業時間以外の時間の約半分をアルバイト等の有給の仕事をしている時間が占める。残りの半分は、学年によって特徴がある。図表 3 に 1 週間当たりの授業時間以外の時間の使い方に占める、授業に関する勉強時間(濃い青)、それ以外の勉強時間(青)、サークル活動(赤)、アルバイト等(オレンジ)の割合を示す。まず、学年を追うごとにサークル活動は割合が減少し、反対に授業に関連しない勉強時間が増加する時間が増加する。就職や卒業研究のための活動が増えることを考えると当然の傾向と云えよう。公共政策、実践経済、栄養健康各学科では 4 年次の授業に関連しない勉強時間の割合が大きくなっている。公務員試験や国家試験対策に充てられているものと推察される。

図表 3 授業時間以外の時間の使い方 (各パネルで、上から下へ1~4年生)



3.2. 評定尺度をとる項目(経験・成長・満足・希望)からの課題抽出

評定尺度をとる多数の質問項目については、平均得点を算出しグラフ化することで、課題抽出に役立てることを検討した。得点の分析には前節でとりあげた Q17 のような

注意が必要であるが、論証ではなくビジュアル・インスペクションによる課題発見を目標とする場合には、このような大胆な操作も許されると考えられる。多くの項目では正の平均得点であり、基本的には本学が提供する学修機会が肯定的に受容されていると思われる。そこで、平均得点が負であった質問項目を以下、区分ごとに列挙する。

経験

- Q25. 教職員やアドバイザーに学修に関連したことを尋ねたり相談したこと (図表 6)
- Q26. 大学内外で勉強会、研究会、講演会に参加したこと (図表 6)
- Q27. 履修したい授業を登録できなかったこと (図表 7)

成長

本項目ではすべての項目で正または-0.1 以上であった。なお、多くの項目で看護学科、栄養学科の回答者は他学科よりも高い得点を与えている傾向がみられる。

満足

ほぼすべての項目で1 以上であった(図表 10～図表 13)。

希望

- Q86. 短期の留学や海外語学研修に参加する (図表 16)
- Q87. 1 年間程度、あるいはそれ以上の長期留学をする (図表 16)

4. まとめ

ALCS 学修行動比較調査の結果をいくつかの方法で可視化し、学生の需要状況の課題抽出等に生かせないかを探った。多くの項目で平均得点が正であった点では、おおむね肯定的に受容されていると解される。他方、学外での学習経験や語学研修などの経験が少ないことが浮かび上がってきた。また、割合としては少ない(20%以下)ではあるが、履修したい授業を取れなかった回答者が確認された。そのような得点を与える背景を別途調べる必要があるが、一つの解釈として課題レポート作成や講義内容の習熟に追われ、それを越える学習経験を得る時間的余裕がないことが考えられる。

付録

A1. アンケート項目

● 経験に関する質問 (6段階: -3(まったくなかったか) ~ +3(かなりよくあった))

8. 授業内での学生間のディスカッション
- 9 大学での学修に関する不公平・不公正感
- 10 授業中に質問をして、よかったと思えた経験
- 11 よく学ぶ学生に刺激されて学修が促されたこと
- 12 大学からの学修に関する情報提供や案内が役立っている実感
- 13 自発的に文献や資料を調べること
- 14 小テストの実施やレポートなどの課題提出
- 15 提出物に対する教員からの添削やコメント
- 16 課題発表の機会
- 17 履修したい授業を登録できなかったこと
- 18 大半の内容が理解できなかった授業
- 19 図書館の活用
- 20 インターネットや学内 LAN を使った授業資料・課題の受けとりや提出
- 21 提出期限までに授業の課題を完成できなかったこと
- 22 授業に遅刻したこと
- 23 授業内容がつまらなく感じたこと
- 24 授業内容に刺激されて自主的にあらたな勉強や探究をしたこと
- 25 教職員やアドバイザーに学修に関連したことを尋ねたり相談したこと
- 26 大学内外で勉強会、研究会、講演会に参加したこと
- 27 授業時間外に友だちと授業に関する学修をしたこと
- 28 学内に設けられている自由に学べる場の活用
- 29 思いどおりに学業ができている実感

● 成長に関する質問 (7段階: -3(とても減った) ~ +3(とても増えた))

- 34 教養
- 35 ものごとを分析する力
- 36 問題を論理的に考える力
- 37 特定の専門分野に関する理解力
- 38 肯定的な意味で批判的に考える力
- 39 自分と異なる意見や考え方を柔軟に理解する
- 40 リーダーシップ
- 41 人間関係を築いたり調整する力
- 42 地域社会が抱える問題への関心や理解力

- 43 明快かつ簡潔に話す力
- 44 表現すべき内容の文章を書く力
- 45 英語以外の外国語の運用力
- 46 プレゼンテーションを準備し発表する力
- 47 学術的な文献の読解力
- 48 情報技術（ICT）の運用力
- 49 国際的な諸問題に対する関心や理解力
- 50 英語の運用力
- 51 ものごとの本質をみて判断しようとする力
- 52 自分を律して行動する力
- 53 得た知識やスキルを活かして問題を解決する力

● 満足に関する質問 (6段階: -3(かなり不満) ~ +3(十分に満足))

- 54 大半の授業の質
- 55 授業の多様性
- 56 教育内容と将来の進路との関連性
- 57 カリキュラムの表現やシラバス記述のわかりやすさ
- 58 大半の授業に関して、その履修人数
- 59 図書館の蔵書内容、サービス、使いやすさ
- 60 総合的にみた大学での学び
- 61 奨学金など経済援助の制度と内容
- 62 授業や学習を支援する電子ネットワークシステム
- 63 実験・実習室や能動的な学修を進めるための設備や機器
- 64 一般的な教室の設備や使用感
- 65 学内の雰囲気や居心地、環境
- 66 学費に比した教育内容
- 67 学内に設けられている自主的に学べる場の雰囲気や使いやすさ
- 68 キャリアを考えるために役立つ授業や情報、機会の提供
- 69 学んだ成果に対する評価のされ方
- 70 教員の応対
- 71 事務スタッフの応対

● 希望に関する質問 (6段階: -3(まったく望んでいない)~+3(強く望んでいる))

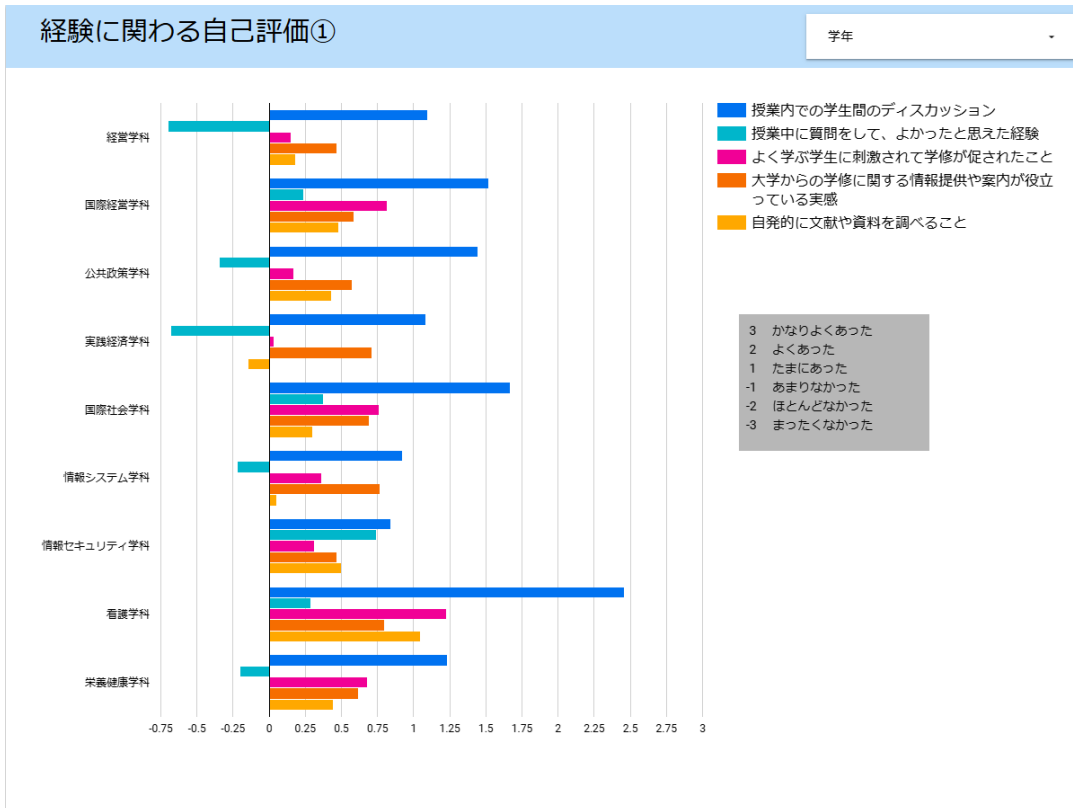
- 72 専門分野の内容を十分に学ぶ
- 73 幅広い知識、教養を身につけ視野を広げる
- 74 起業やその意識形成にかかわる学びをする
- 75 企業、機関など大学外で体験実習、インターンなどをおこなう
- 76 チームなどで取り組むプロジェクト遂行型の学びをする
- 77 授業以外で学問的な関心事について学びを深める

- 78 討論やプレゼンの訓練になり課題解決をしていくような授業を受ける
- 79 資格を取得するための勉強をする
- 80 文章の作成能力が高まるような授業を受ける
- 81 外国語の運用能力を高めることを目的にした授業を受ける
- 82 卒業後の進路のために、教職員やキャリア関連の部署を活用する
- 83 よりよい学修計画を立てる
- 84 本学以外の教育機関・施設で学ぶ
- 85 なんらかのボランティア活動に従事する
- 86 短期の留学や海外語学研修に参加する
- 87 1年間程度、あるいはそれ以上の長期留学をする

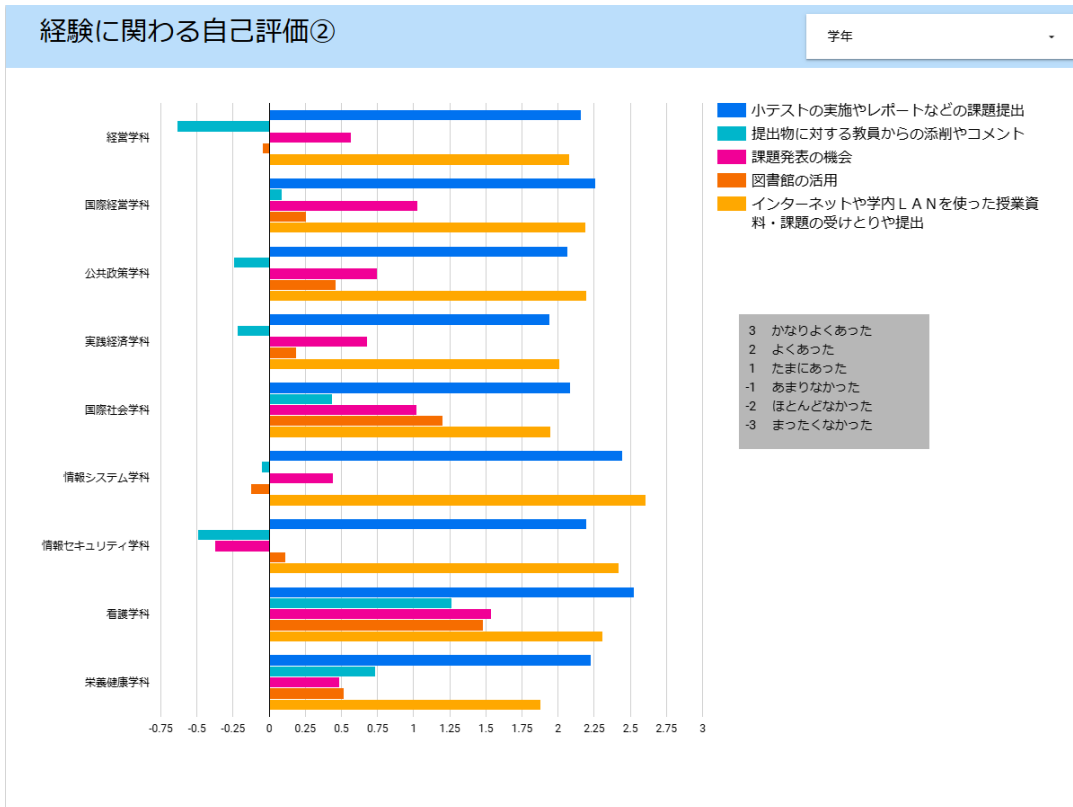
A2. 平均得点のグラフ

評定尺度を取る設問につき、図表 4 から図表 16 に学科ごとの平均得点を図表 17 に「満足」に関する項目についての全学の平均得点をグラフとして示す。得点が 0 を中心に正負どちら側を取るかで、当該項目が良好かどうかを大まかに把握できる。

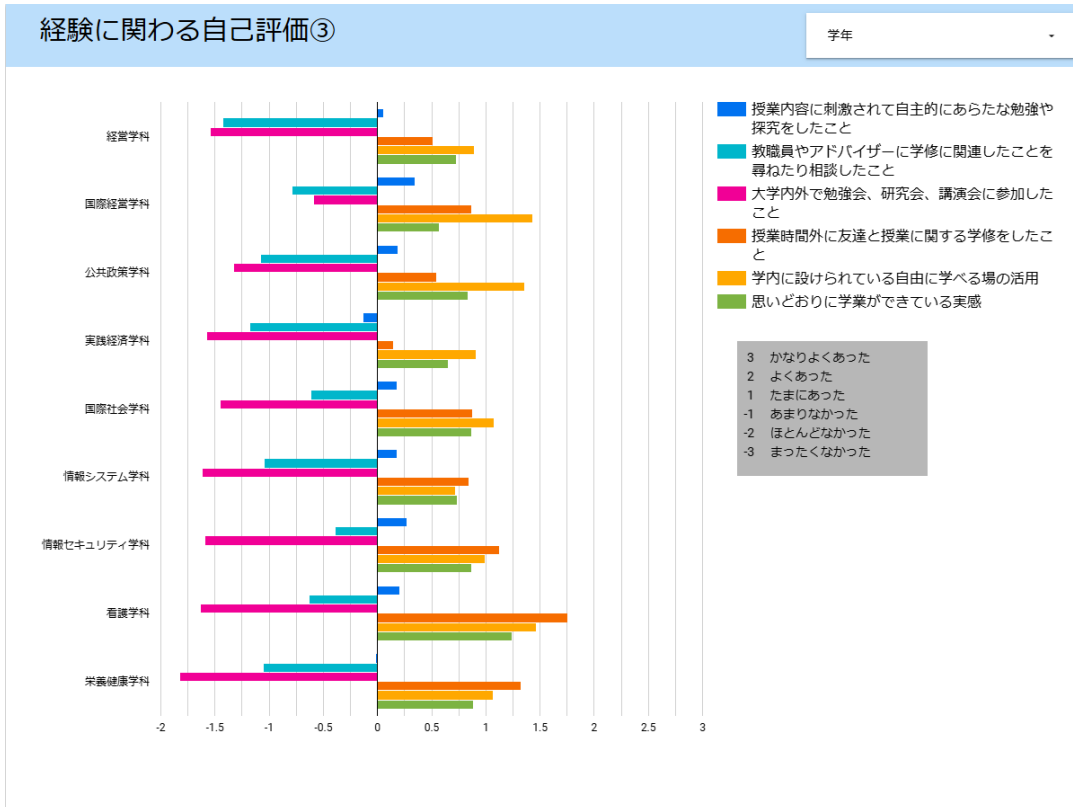
図表 4 経験に関わる自己評価① (Q8,10~13, 学科ごとの平均得点)



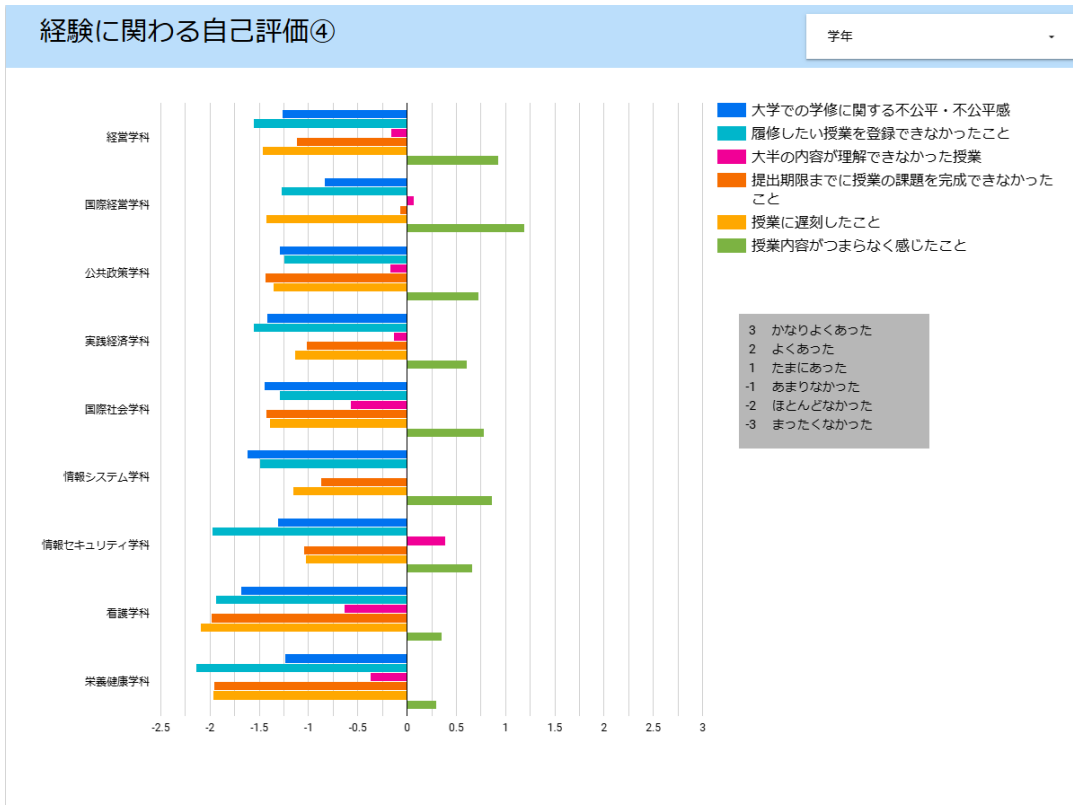
図表 5 経験に関わる自己評価② (Q14~20, 学科ごとの平均得点)



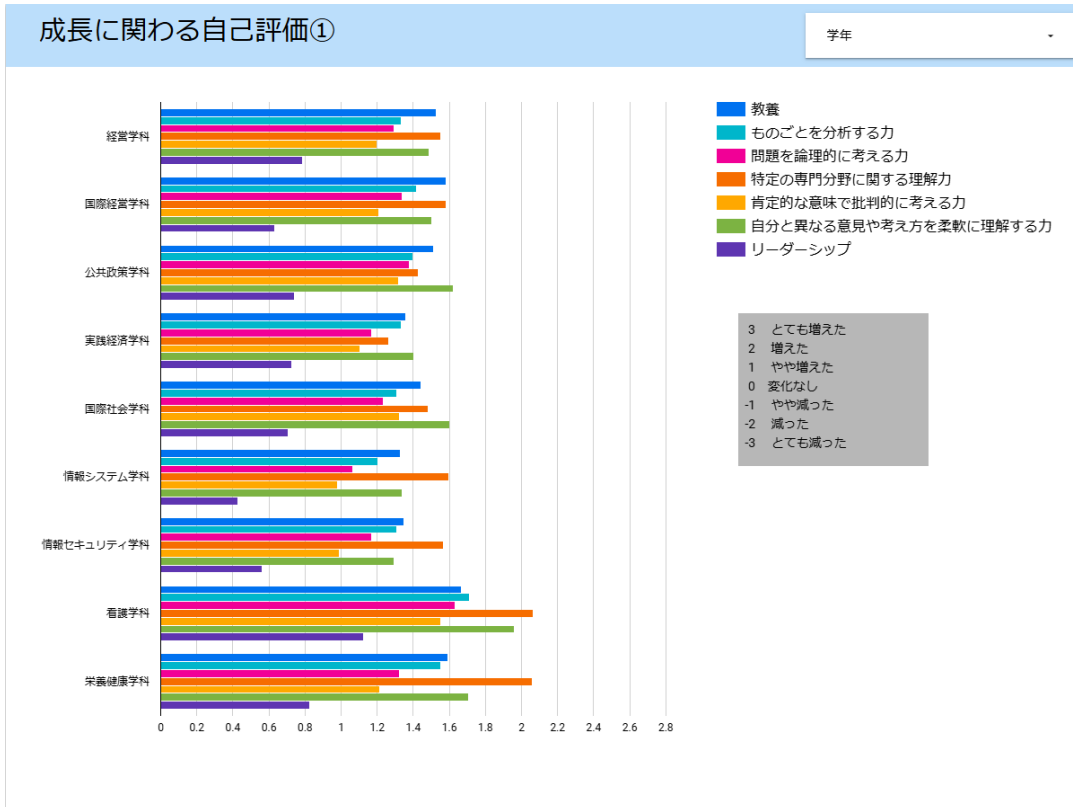
図表 6 経験に関わる自己評価③ (Q24~29, 学科ごとの平均得点)



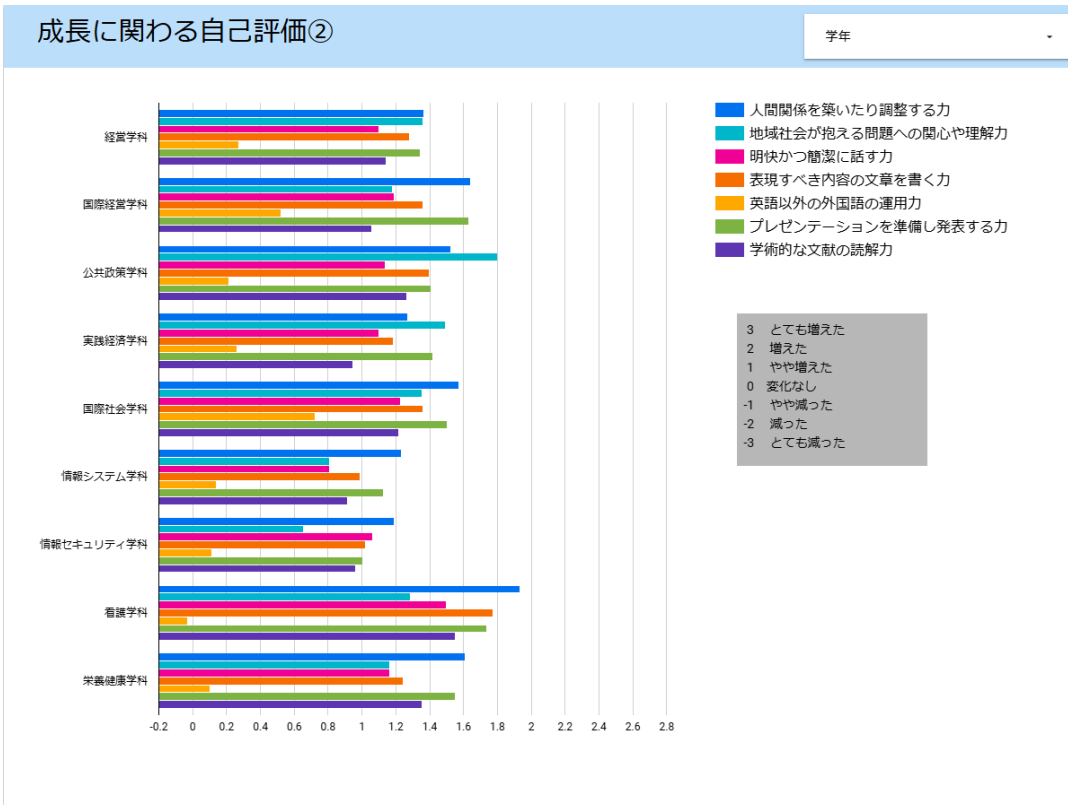
図表 7 経験に関わる自己評価④ (Q 9,17,18,21~23, 学科ごとの平均得点)



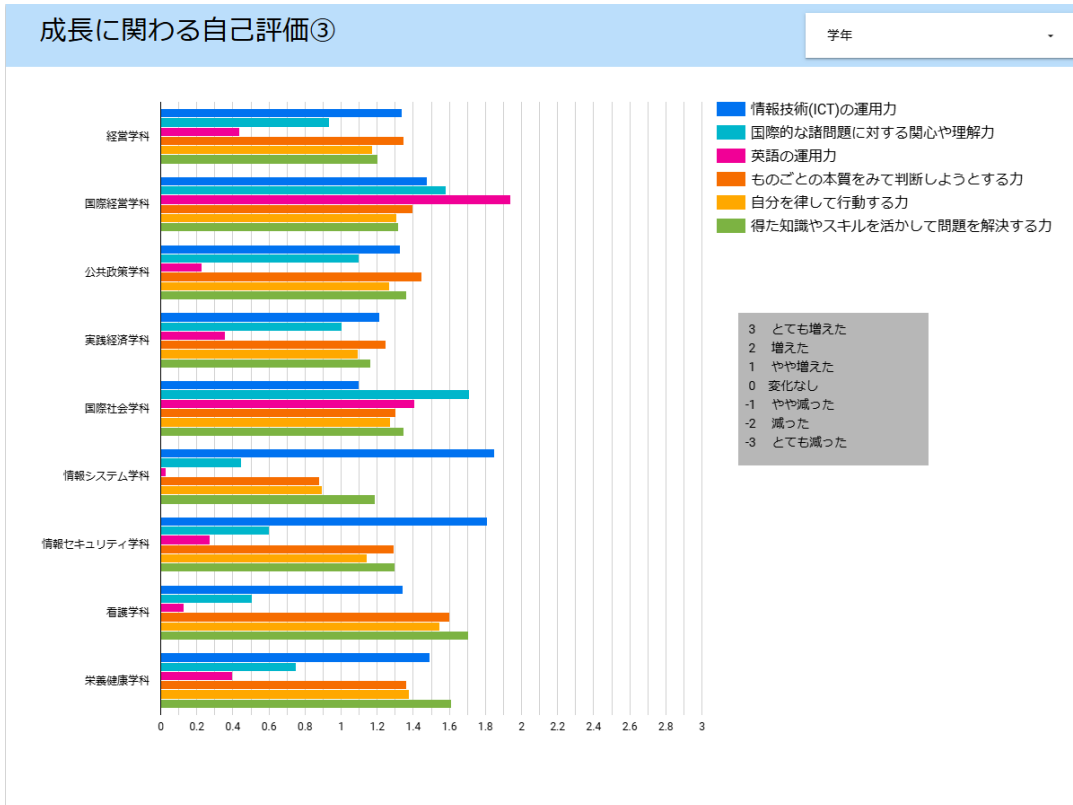
図表 8 成長に関わる自己評価① (Q35~40, 学科ごとの平均得点)



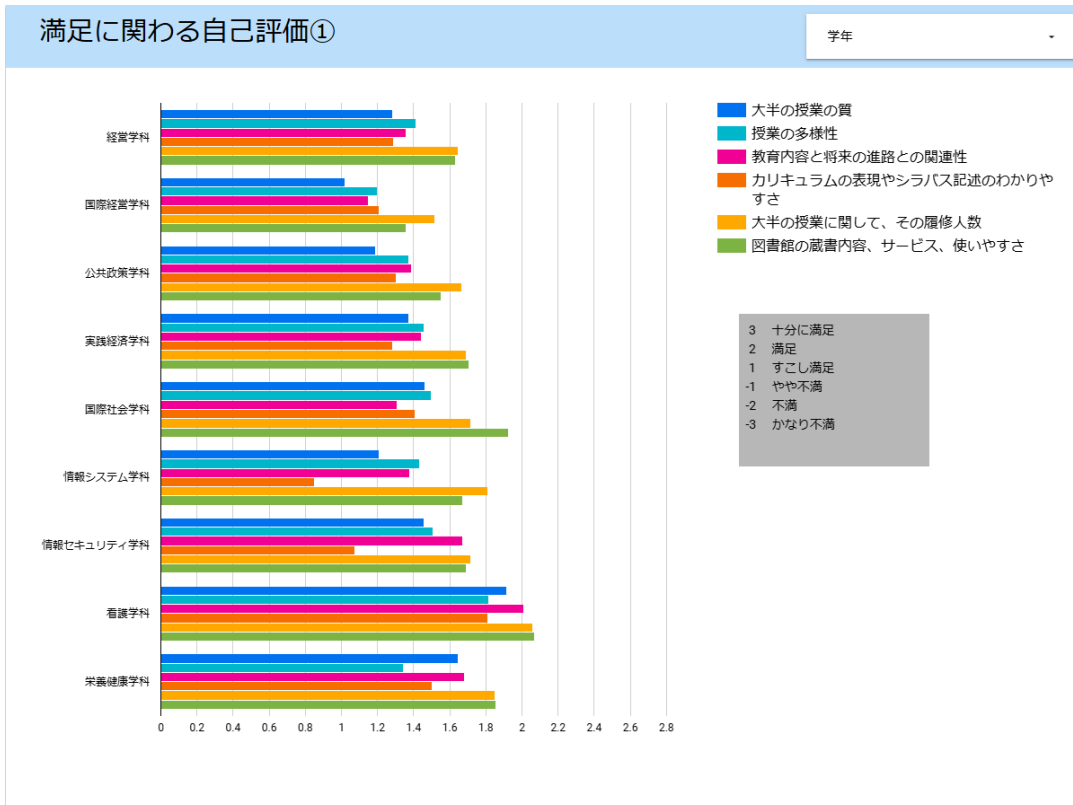
図表 9 成長に関わる自己評価② (Q41~47, 学科ごとの平均得点)



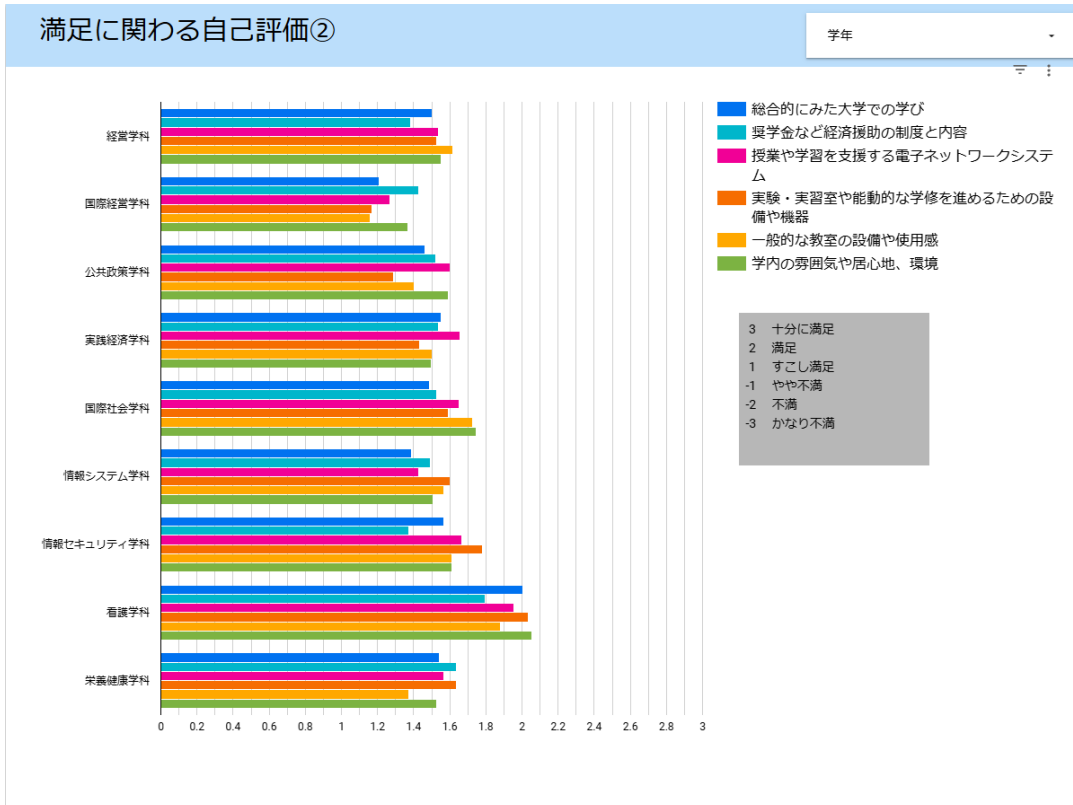
図表 10 成長に関わる自己評価③ (Q48~53, 学科ごとの平均得点)



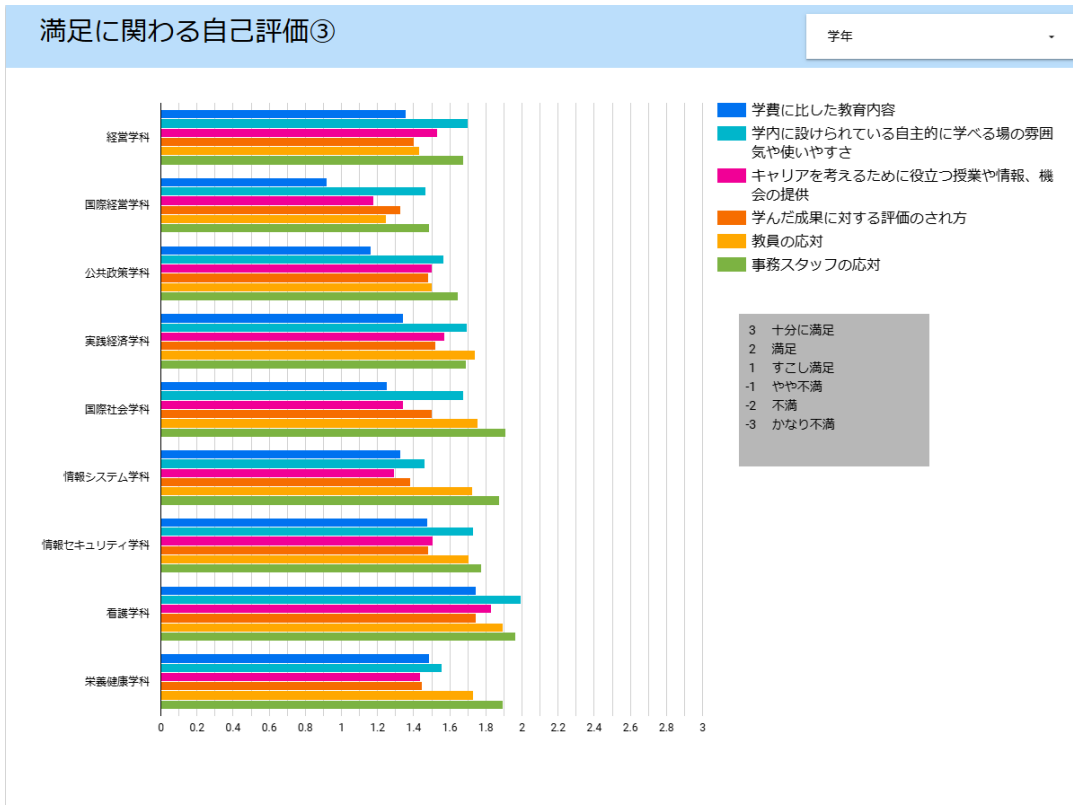
図表 11 満足に関わる自己評価① (Q54~59, 学科ごとの平均得点)



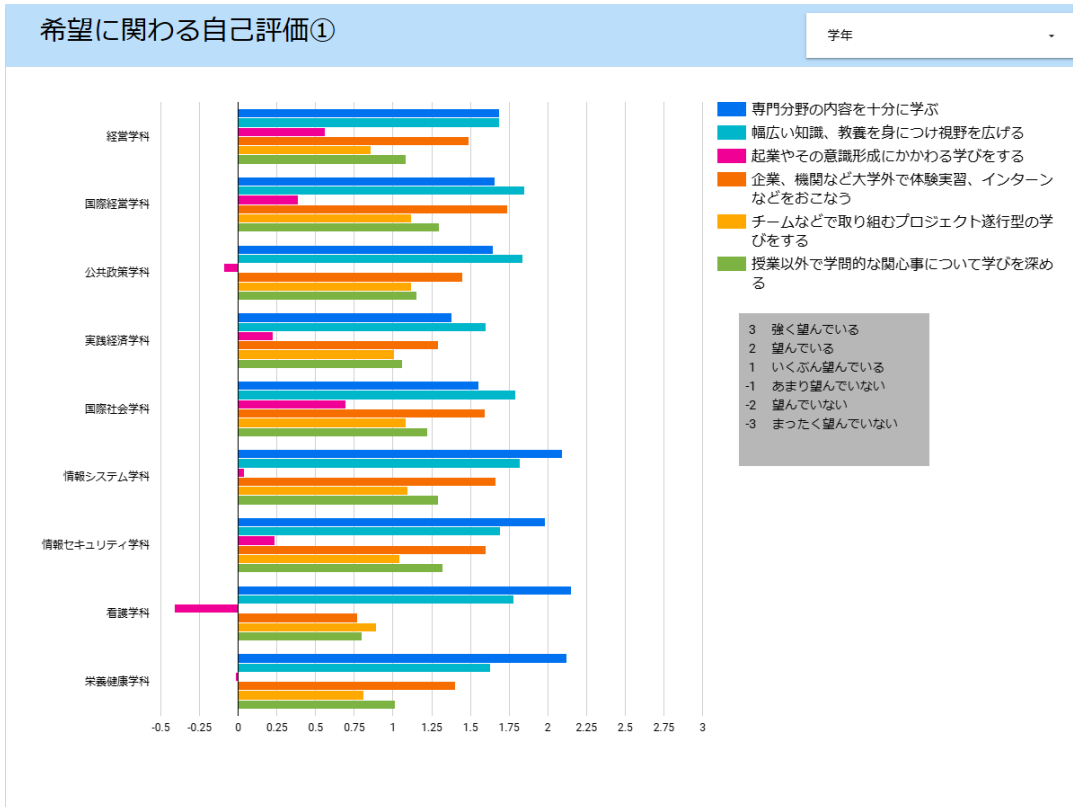
図表 12 満足に関わる自己評価② (Q60~65, 学科ごとの平均得点)



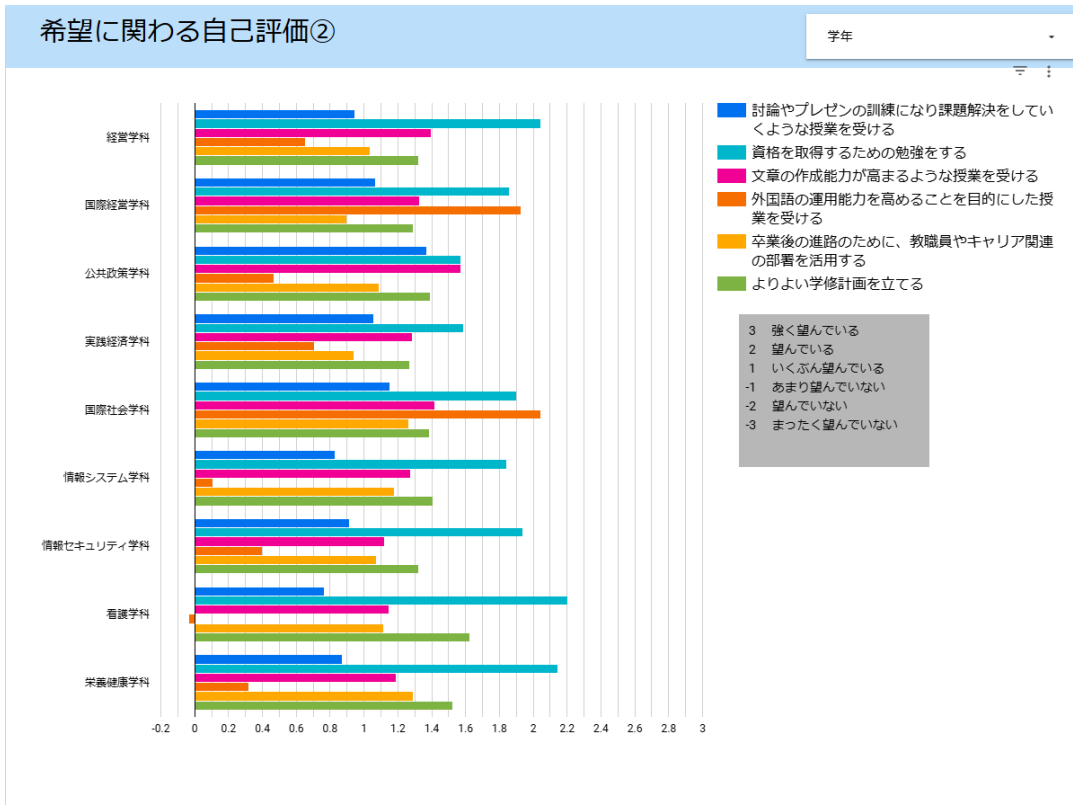
図表 13 満足に関わる自己評価③(Q66~71, 学科ごとの平均得点)



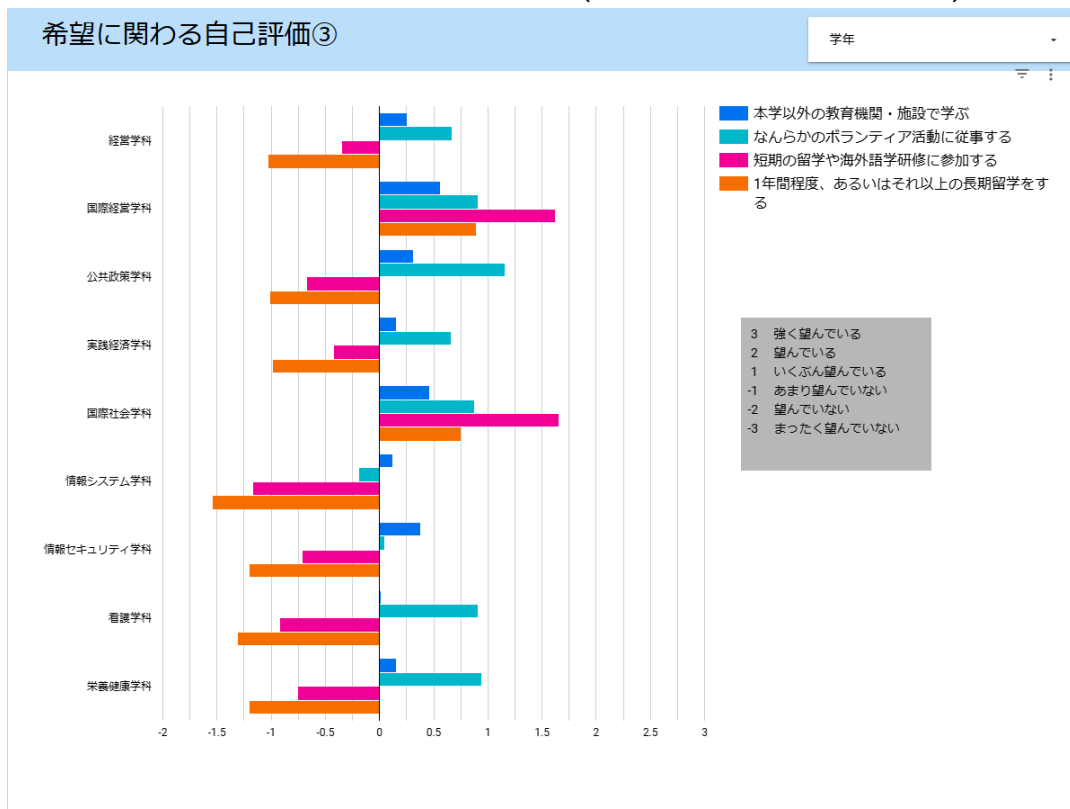
図表 14 希望に関わる自己評価①(Q72~77, 学科ごとの平均得点)



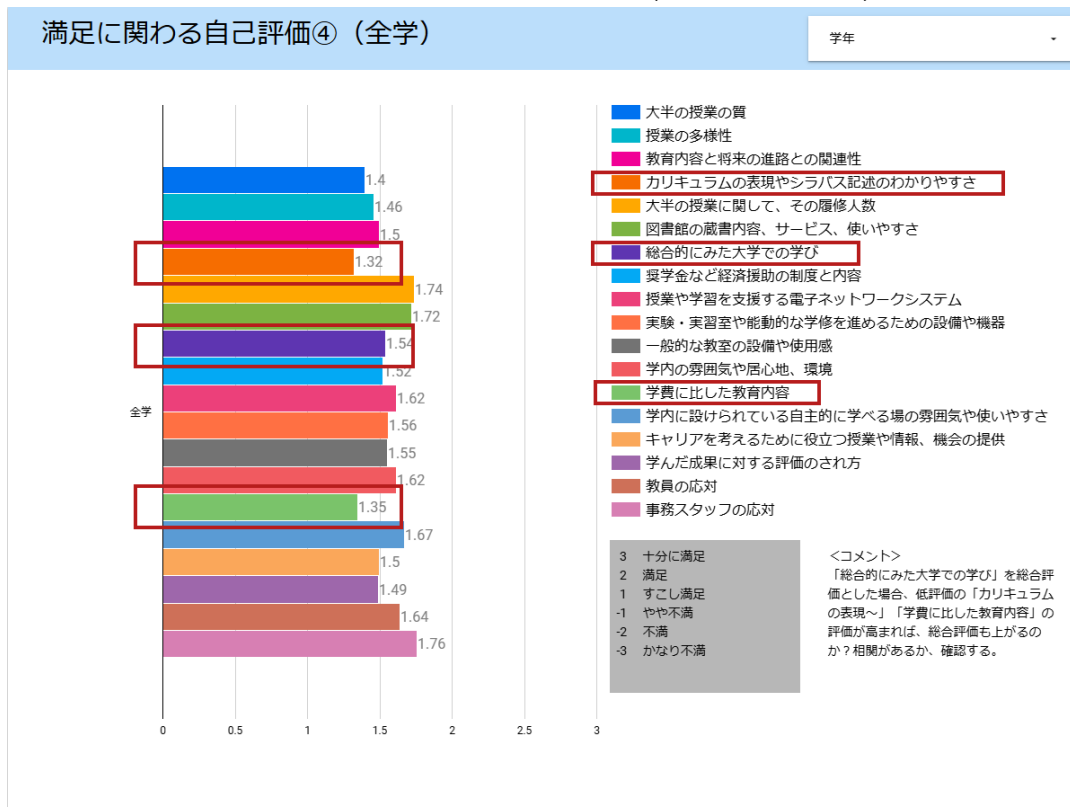
図表 15 希望に関わる自己評価②(Q78~83, 学科ごとの平均得点)



図表 16 希望に関わる自己評価③(Q84~87, 学科ごとの平均)



図表 17 満足に関わる自己評価②(Q78~83, 全学)



学修成果可視化の仕組みづくり

－KEN-SUN 力の達成状況評価－

教育開発センター委員 藤沢 望
情報システム学部 情報システム学科 講師

1. DP 達成状況評価について
2. 全学教育科目の単位取得による KEN-SUN 力達成状況評価
 - 2.1. カリキュラムマップと DS・DR の算出方法
 - 2.2. KEN-SUN 力達成状況評価のシミュレーション
3. ALCS 学修行動比較調査の「成長」項目による KEN-SUN 力達成状況評価
 - 3.1. カリキュラムマップと DS・DR の算出方法
 - 3.2. KEN-SUN 力達成状況評価のシミュレーション
4. まとめと課題

1. DP 達成状況評価について

本業務の目的は、ディプロマポリシー（卒業認定・学位授与の方針、以下 DP）の達成度を評価する仕組みを確立し、可視化できるようにすることである。2022 年度教育開発センター活動報告によると、各ポリシーのアセスメント単位は「大学単位」「学位プログラム単位」「学生単位（授業科目単位）」の3つのレベルがあるとされており、さらに各レベルでの評価指標として想定される項目が示されている（図表 1-1）。

2023 年度教育開発センター活動報告では、学生単位での DP 達成状況評価の一つとして、情報システム学科の DP と専門科目のカリキュラムマップを用いて検討を行い、必修科目と選択科目の単位取得に伴う学科 DP 達成状況の推移をレーダーチャートで図示した（図表 1-2: 必修科目の場合）。また、ALCS 学修行動比較調査結果を活用した DP の評価（試行）として、ALCS の「成長」項目を用いて KEN-SUN 力の項目毎の成長度の可視化の試みが行われた（図表 1-3）。

2024 年度は、以下の2つの検証を行う。①全学教育科目のカリキュラムマップを用い、全学教育科目（外国語科目含む）の単位取得に伴う KEN-SUN 力達成状況の可視化を試みる。②ALCS 学修行動比較調査の「成長」項目の結果を用い、学科単位、学生単位での KEN-

SUN 力達成状況の可視化を試みる。

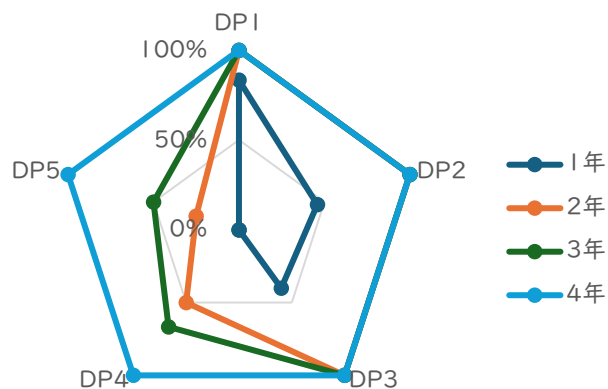
長崎県立大学ホームページ(<https://sun.ac.jp/guide/policy/>)にて公表されている大学全体の DP と KEN-SUN 力を図表 1-4 に示す。

図表 1-1 教学アセスメントの指標として想定される項目

アセスメント単位	アドミッション・ポリシー 達成状況（入学時）	カリキュラム・ポリシー 達成状況（在学時）	ディプロマ・ポリシー 達成状況（卒業時）
大学単位	<ul style="list-style-type: none"> 入試成績 プレースメントテスト 入学時調査（アンケート） 新入生調査（アンケート） 	<ul style="list-style-type: none"> 進級率、留年率、休学率 退学率 ALCS学修行動調査 	<ul style="list-style-type: none"> 卒業率 就職率（専門領域への就業率）、進学率 卒業時アンケート（卒業生向け） 卒業後アンケート（企業向け）
学位プログラム単位	<ul style="list-style-type: none"> 入試区分別修学状況 	<ul style="list-style-type: none"> GPA 進級要件達成率 ALCS学修行動調査 	<ul style="list-style-type: none"> 学位授与数 GPA 卒業要件達成率 国家試験合格率
学生単位 （授業科目単位）		<ul style="list-style-type: none"> 成績評価 修得単位数 授業評価アンケート 学生生活実態調査 	<ul style="list-style-type: none"> 成績評価 資格取得状況

図表 1-2 必修科目を開講順に取得した場合の累積DRとレーダーチャート

学年	クォーター	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5
1	1	17%	8%	0%	0%	0%
	2	50%	21%	20%	0%	0%
	3	83%	33%	20%	0%	0%
	4	83%	46%	40%	0%	0%
2	1	100%	71%	60%	0%	0%
	2	100%	88%	80%	50%	25%
	3	100%	96%	80%	50%	25%
	4	100%	100%	100%	50%	25%
3	1					
	2					
	3					
	4	100%	100%	100%	67%	50%
4	1					
	2					
	3					
	4	100%	100%	100%	100%	100%



図表 I-3 ALCS の「成長」項目による KEN-SUN 力の項目毎の成長度



図表 I-4 長崎県立大学 DP と KEN-SUN 力

長崎県立大学 DP	
長崎県立大学では、4年間の在籍によって全学教育と各学科の特性に応じて編成された専門教育を通じて所定の単位を取得します。これらを土台に各学科で培った知識・スキル・態度を活用して、本学の教育理念を踏まえて設定された次の6つの KEN-SUN 力を発揮することができる人物に学位を授与します。	
KEN-SUN 力～地域から世界へ挑む長崎県立大学生～	
長崎と Nagasaki	長崎で地域を理解するとともに世界の中の Nagasaki を知ることで、グローバルに交流しながら地域・国際社会に貢献し、平和を創る力
知識と知恵	未来を生き抜く知識を修得し、それを知恵として活用する力
尊重と主張	他者を尊重するとともに、自己を主張し、協働・共生する力
想像と創造	物事を多面的・俯瞰的にとらえる想像力と新しい知を創造する力
挑戦と継続	未知の課題に挑戦しつつ、学びを継続する力
自立と自律	自立した生活と自律的な学びをする力

2. 全学教育科目の単位取得による KEN-SUN 力達成状況評価

2.1. カリキュラムマップと DS・DR の算出方法

2021 (令和 3) 年度に作成された全学教育科目および外国語科目と KEN-SUN 力の関係を表すカリキュラムマップを用いる⁴。図表 2-1~2-3 に、全学教育科目、外国語科目 (英語・中国語・その他)、留学生科目のカリキュラムマップを示す。6 つの KEN-SUN 力に対してそれぞれ 4 つの評価項目があり、科目ごとに各項目との関連性を◎、○、△で示している。ここでは「ある科目の単位を取得すると、それに関連する評価項目の達成度が上がる。記号によって達成度の上昇量が異なる。」と想定し、◎を 2.0、○を 1.0、△を 0.5 とする。これらに各科目の単位数を掛け合わせたものを Diploma Score (DS) とする。また DS は科目ごと、評価項目ごとに求まるが、各項目に関連する科目数は異なるので (例えば「地域社会を理解する力」の関連科目は 8 科目、「基礎的知識の獲得」の関連科目は 30 科目)、DS を合算した値は一致しない。そこで、各 DS をその評価項目の合計値で割ったものを % で表し、Diploma Ratio (DR) とする。

⁴ 2023 年度教育開発センター活動報告では「全学教育科目のカリキュラムマップが作成されていない」としていたが、その後データが見つかった。ただし、一部科目については現在開講されていないものや科目名が変更になっているものがあった。

図表 2-1 全学教育科目カリキュラムマップ

	長崎と Nagasaki	知識と知恵					尊重と主張			想像と創造			挑戦と継続			自立と自律									
		地域社会を理解する力	グローバルな視点で考える力	長崎を理解する力	長崎を発信する力	基礎的知識の獲得	データを客観的に理解し、活用する力	言葉や文書を理解し活用する力	メディアやICTを活用する力	多様性を理解する力	傾聴する力	自己を表現する力	他人に働きかける力	状況を把握する力	多面的・俯瞰的に理解する力	計画する力	想像する力	課題を発見する力	問題を解決する力	提案する力	継続的に実行する力	主体的に取り組む力	自己管理をする力	規律を守る力	ストレスをコントロールする力
リサイエンス	化学					○◎							◎												
	物理学					○◎							◎		◎										
	生物科学					○			◎				○												
	科学史					◎																			
	生活とサイエンス					◎					○														
リデータ	数学					○◎																			
	統計学					○◎																			
	データサイエンス入門					○◎		○																	
	情報処理演習Ⅰ					○◎		○																	
リコミュニケー	情報処理演習Ⅱ					○◎		○																	
	コミュニケーション実践学					○◎		○	○	○	○							○				○			
	文章表現(ライティング)					○◎				○	○														
	対人関係論								◎		○	○													
	共生社会のキャリア			○		○			○			○													
リヒューマンリテラ	教養セミナー					○◎	○	○	○	○	○			○			○	○	○			○			
	日本史概説					○																			
	西洋史概説					○																			
	東洋史概説					○																			
	人文地理学					○																			
	哲学					○																			
	倫理学					○																			
	人類生態学					○				◎				○											
	心理学					○				○				○	○										○
	文学					○		○																	
	ライフスポーツ										○							○				○	○	○	○
	現代人とスポーツ	○				◎								○								○	○		
	健康と科学					◎	◎							○	○							○	○		
	運動と栄養					○◎								○				○				○	○		
食文化と調理																									
暮らしの中の救急法					◎																				
リテラ社会	日本国憲法					○																			
	民法入門					○																			
	現代社会と政治					○																			
	現代社会と経済					○																			
	現代社会の課題	○				○																			
	キャリアデザイン	○		○	○					○	○	○	○				○								
	ボランティア活動									○				○			○	○		○		○			
リテラ長崎	長崎と文化	○		○	○																				
	長崎の歴史と今	○		○	○																				
	長崎と平和	○		○	○																				
	長崎のしまに学ぶ	○		○	○				○	◎	○	○	○	◎	◎	○		○	○	○	◎	○		○	
	しまのフィールドワーク	○		○	○		○		◎	○	○	○	○	◎	◎	○		○	○	○	◎	○	○	○	○

図表 2-2 英語・中国語科目カリキュラムマップ

		長崎と Nagasaki				知識と知恵				尊重と主張			想像と創造			挑戦と継続		自立と自律										
		地域社会を理解する力	グローバルな視点で考える力	長崎を理解する力	長崎を発信する力	基礎的知識の獲得	データを客観的に理解し、活用する力	言葉や文書を理解し活用する力	メディアやICTを活用する力	多様性を理解する力	傾聴する力	自己を表現する力	他人に働きかける力	状況を把握する力	多面的・俯瞰的に理解する力	計画する力	想像する力	課題を発見する力	問題を解決する力	提案する力	継続的に実行する力	主体的に取り組む力	自己管理をする力	規律を守る力	ストレスをコントロールする力			
英語	英語 I																											
	英語 II																											
	英語 III																											
	英語 IV																											
	英語 V																											
	英語 VI																											
	英語実践演習 I																											
	英語実践演習 II																											
	英語実践演習 III																											
	英語実践演習 IV																											
	英語実践演習 V																											
	英語実践演習 VI																											
	英語実践演習 VII																											
	英語実践演習 VIII																											
	英語実践演習 IX																											
	オーラル・コミュニケーション I																											
	オーラル・コミュニケーション II																											
	オーラル・コミュニケーション III																											
	オーラル・コミュニケーション IV																											
	リーディング I																											
	リーディング II																											
	リーディング III																											
	ライティング I																											
	ライティング II																											
海外語学研修(英語)		○																	○	○			○	○				
中国語	中国語 I A(文法)																											
	中国語 I A(会話)																											
	中国語 I A(ヒアリング作文)																											
	中国語 I A(筆記・読解)																											
	中国語 I B(文法)																											
	中国語 I B(会話)												○															
	中国語 I B(ヒアリング作文)																											
	中国語 I B(筆記・読解)																											
	中国語 II A(講読)																											
	中国語 II A(会話)													○														
	中国語 II A(ヒアリング作文)																											
	中国語 II A(筆記・読解)																											
	中国語 II B(講読)																											
	中国語 II B(会話)													○														
	中国語 II B(ヒアリング作文)																											
	中国語 II B(筆記・読解)																											
	中国語 III A(時事・新聞)																											
	中国語 III A(表現)																											
	海外語学研修(中国)		○																		○	○			○	○		

図表 2-3 外国語その他・留学生科目カリキュラムマップ

		長崎と Nagasaki			知識と知恵			尊重と主張			想像と創造			挑戦と継続			自立と自律								
		地域社会を理解する力	グローバルな視点で考える力	長崎を理解する力	長崎を発信する力	基礎的知識の獲得	データを客観的に理解し、活用する力	言葉や文書を理解し活用する力	メディアやICTを活用する力	多様性を理解する力	傾聴する力	自己を表現する力	他人に働きかける力	状況を把握する力	多面的・俯瞰的に理解する力	計画する力	想像する力	課題を発見する力	問題を解決する力	提案する力	継続的に実行する力	主体的に取り組む力	自己管理をする力	規律を守る力	ストレスをコントロールする力
その他	韓国・朝鮮語 I A						○		○																
	韓国・朝鮮語 I B						○		○																
	フランス語 I A						○		○																
	フランス語 I B						○		○																
	スペイン語 I A						○		○																
	スペイン語 I B						○		○																
	ドイツ語 I A						○		○																
	ドイツ語 I B						○		○																
留学生科目	日本語 I A						○		○																
	日本語 I B						○		○																
	日本語 II A						○		○																
	日本語 II B						○		○																
	日本語 III A						○		○																
	日本語 III B						○		○																
	日本語 IV A						○		○																
	日本語 IV B						○		○																
	日本語 VA						○		○																
	日本語 VB						○		○																
	日本語 VIA						○		○																
	日本語 VIB						○		○																
	日本事情 I A		○				○		○					○											
	日本事情 I B		○				○		○					○											

2.2. KEN-SUN 力達成状況評価のシミュレーション

本節では、図表 2-1 および図表 2-2 に示したカリキュラムマップを用いて、KEN-SUN 力達成状況評価のシミュレーションを行う。

2.2.1. シミュレーションに用いるカリキュラムマップ

今回のシミュレーションでは、図表 2-1 の全学教育科目のカリキュラムマップおよび図表 2-2 のうち英語科目のカリキュラムマップを用いる。外国語科目については必修科目や最低習得単位数が学科によって異なり、国際経営学科は英語 20 単位、経営学科・公共政策学科・実践経済学科は英語又は中国語 8 単位、国際社会学科は英語又は中国語 20 単位、情報システム学科・情報セキュリティ学科・看護学科・栄養健康学科は英語 8 単位が必修となっている。必修以外の外国語科目は選択科目として履修可能であるが、今回は英語以外の外国語科目を履修しないケースを想定する。また留学生のケースは想定しない。

2.2.2. KEN-SUN 力達成状況評価の方針

全学教育科目においては、リテラシー毎に最低習得単位数が学科ごとに決められており、それぞれのリテラシーには必修科目、選択必修科目、選択科目が配置されている。またそれらは学科ごとに異なる。一部のリテラシー区分を除いて科目選択の幅が広いため、KEN-SUN 力の達成状況も学生ごとに大きく異なってくるものと考えられる。したがって今回は、必修や選択の種別は考慮せず、単位取得した科目に応じて各評価項目の DS を積み上げていくことで、KEN-SUN 力の達成状況を示すことにする。

一方で、2.1 節で述べたように KEN-SUN 力の各評価項目に関連する科目数は異なっているため、DS だけで KEN-SUN 力の達成状況を表すと、全ての全学教育科目の単位を修得したとしても、DS の合計値には大きな差が出来てしまう。そこで今回は、評価項目ごとの DR も計算し、DS での結果との比較を行う。

2.2.3. KEN-SUN 力達成状況評価のシミュレーション

今回は経営学科のケースについて KEN-SUN 力達成状況評価のシミュレーションを行い、その結果を示す。

分析①: Diploma Score (DS) の算出: 経営学科

全学教育科目および英語科目のカリキュラムマップで示された◎: 2.0、○: 1.0、△: 0.5 に各科目の単位数を掛け合わせて DS を求めた。経営学科の各科目の単位数と DS の結果を図表 2-4 および図表 2-5 に示す。

図表 2-4 全学教育科目の単位数と Diploma Score: 経営学科

		経営学科				長崎と Nagasaki		知識と知恵				尊重と主張			想像と創造			挑戦と継続			自立と自律														
		単位数			必修	選択必修	選択	地域社会を理解する力	グローバルな視点で考える力	長崎を理解する力	長崎を発信する力	基礎的知識の獲得	データを客観的に理解し、活用する力	言葉や文書を理解し活用する力	メディアや ICT を活用する力	多様性を理解する力	傾聴する力	自己を表現する力	他人に働きかける力	状況を把握する力	多面的・俯瞰的に理解する力	計画する力	想像する力	課題を発見する力	問題を解決する力	提案する力	継続的に実行する力	主体的に取り組む力	自己管理をする力	規律を守る力	ストレスをコントロールする力				
		必修	選択必修	選択																															
リサイエンス	化学		2								2	4								4															
	物理科学		2								2	4								4		4													
	生物科学		2									2				4					2														
	科学史		2									4				2																			
	生活とサイエンス		2									4						2																	
リデータ	数学		2								2	2																							
	統計学		2								2	2																							
	データサイエンス入門		2								2	2		2																					
	情報処理演習 I		2								2	2		2																					
リコミュニケーション	情報処理演習 II					2					2	2		2																					
	コミュニケーション実践学		2								2	2		2		2	2	2							2		2								
	文章表現 (ライティング)		2								2	4					2	2																	
	対人関係論		2											4				2	2																
	共生社会のキャリア		2						2		2			2		2				2															
教養セミナー		2								2	2	2	2	2	2	2	2	2			2		2	2	2	2		2							
ヒューマンリテラシー	日本史概説		2								2																								
	西洋史概説		2								2																								
	東洋史概説		2								2																								
	人文地理学		2								2																								
	哲学		2								2																								
	倫理学		2								2																								
	人類生態学		2								2				4						2														
	心理学		2								2				2						2	2												2	
	文学		2								2		2																						
	ライフスポーツ		1																1						1				1			1	1		
	現代人とスポーツ		2									4									2								2						
健康と科学		2									4	2								2	2							2							
運動と栄養		2									2	4								2	2		2				2								
食文化と調理		2																																	
暮らしの中の救急法		2									4																								
リテラシー 社会	日本国憲法		2								2																								
	民法入門		2								2																								
	現代社会と政治		2								2																								
	現代社会と経済		2								2																								
	現代社会の課題		2				2				2																								
	キャリアデザイン		2				2	2	2					2		2	2	2	2	2	2			2											
ボランティア活動		2												2		2					2		2	2	2	2	2	2							
リテラシー 長崎	長崎と文化			2	2						2	2																							
	長崎の歴史と今			2	2						2	2																							
	長崎と平和			2	2						2	2																							
	長崎のしみに学ぶ		2				2	2	2					2	4	2	2	2	2	4	4	2		2	2	2	4	2	2	2	2	2	2		
	しまのフィールドワーク		2				2	2	2					2	4	2	2	2	2	2	2	4		2	2	2	4	2	2	2	2	2	2		

図表 2-5 英語科目の単位数と Diploma Score:経営学科

	経営学科			長崎と Nagasaki	知識と知恵	尊重と主張	想像と創造	挑戦と継続	自立と自律											
	単位数																			
	必修	選択 必修	選択																	
英語 I																				
英語 II																				
英語 III																				
英語 IV																				
英語 V																				
英語 VI																				
英語実践演習 I	-	-	-																	
英語実践演習 II	-	-	-																	
英語実践演習 III	-	-	-																	
英語実践演習 IV	-	-	-																	
英語実践演習 V	-	-	-																	
英語実践演習 VI	-	-	-																	
英語実践演習 VII																				
英語実践演習 VIII																				
英語実践演習 IX																				
オーラル・コミュニケーション I																				
オーラル・コミュニケーション II																				
オーラル・コミュニケーション III																				
オーラル・コミュニケーション IV																				
リーディング I																				
リーディング II																				
リーディング III																				
ライティング I																				
ライティング II																				
海外語学研修(英語)				2									2	2					2	2

図表 2-4・2-5 を元に、単位習得した科目の DS を合算していくことで、KEN-SUN 力の達成状況を示すことが出来る。ここでは、以下の 4 つのケースについて DS の合計値を算出し、その結果を棒グラフで示す。

- ① 必修科目のみを習得
- ② 各リテラシーの最低習得単位数を満たす科目を習得
- ③ 選択科目を含む卒業に必要な単位数を習得(経営学科では 36 単位)
- ④ 全学教育および英語の開講科目(英語実践演習 I ~VI を除く)を全て習得

②および③については選択必修および選択科目から任意の科目を習得することになるが、今回は、サイエンスリテラシー・コミュニケーションリテラシー・ヒューマンリテラシー・社会リテラシーの各区分の中から、②では上から1科目ずつ(計 4 科目)、③では上から2科目ずつと英語から 4 科目(計 12 科目)を習得するものとする。各ケースでの習得科目を図表 2-6 に示す。

図表 2-6 シミュレーションにおける各ケースでの習得科目

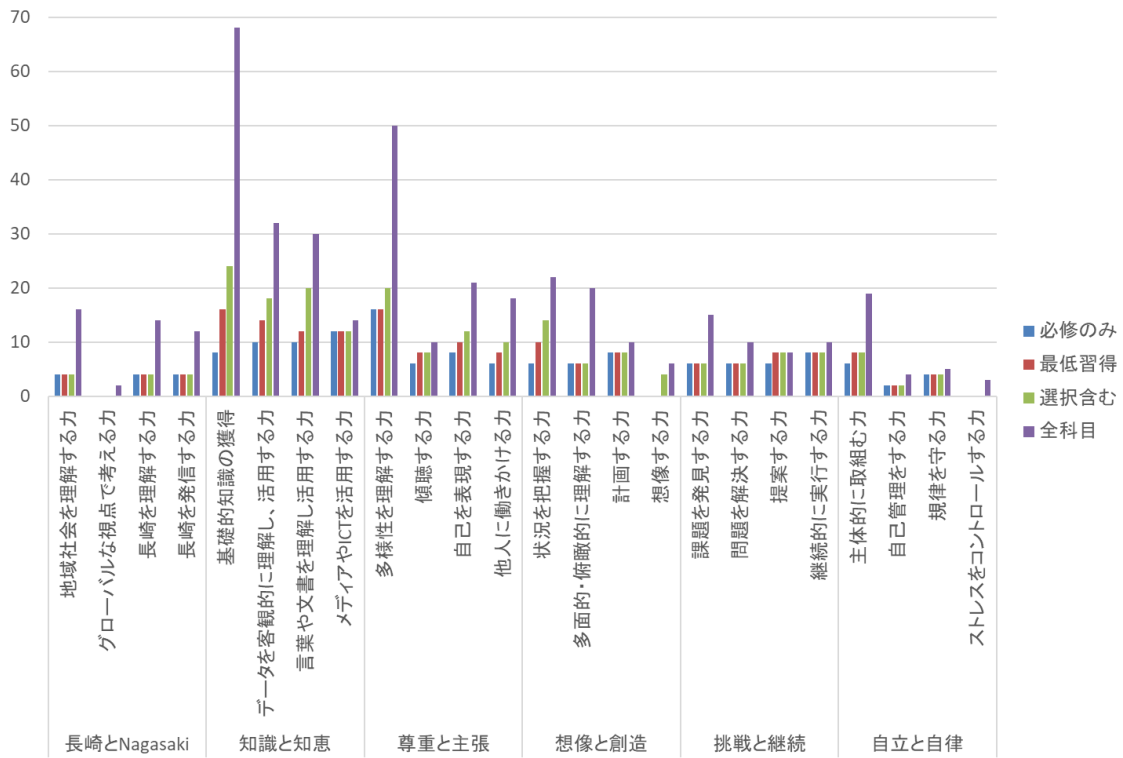
	ケース①	ケース②	ケース③	ケース④
習得科目	統計学 データサイエンス入門 情報処理演習 I 教養セミナー 長崎のしまに学ぶ しまのフィールドワーク 英語 I 英語 II 英語 III 英語 IV オーラル・コミュニケーション I オーラル・コミュニケーション II リーディング I リーディング II	化学 統計学 データサイエンス入門 情報処理演習 I コミュニケーション実践学 教養セミナー 日本史概説 日本国憲法 長崎のしまに学ぶ しまのフィールドワーク 英語 I 英語 II 英語 III 英語 IV オーラル・コミュニケーション I オーラル・コミュニケーション II リーディング I リーディング II	化学 物理学 統計学 データサイエンス入門 情報処理演習 I コミュニケーション実践学 文章表現(ライティング) 教養セミナー 日本史概説 西洋史概説 日本国憲法 民法入門 長崎のしまに学ぶ しまのフィールドワーク 英語 I 英語 II 英語 III 英語 IV 英語 V 英語 VI オーラル・コミュニケーション I オーラル・コミュニケーション II リーディング I リーディング II ライティング I ライティング II	全ての開講科目

上記の手順で求めた経済学科での DS の結果について、図表 2-7 では KEN-SUN 力の各評価項目の DS、図表 2-8 では KEN-SUN 力 6 項目の DS の合計を棒グラフとして示す。各項目の 4 つの棒グラフは図表 2-6 の各ケースに対応している。

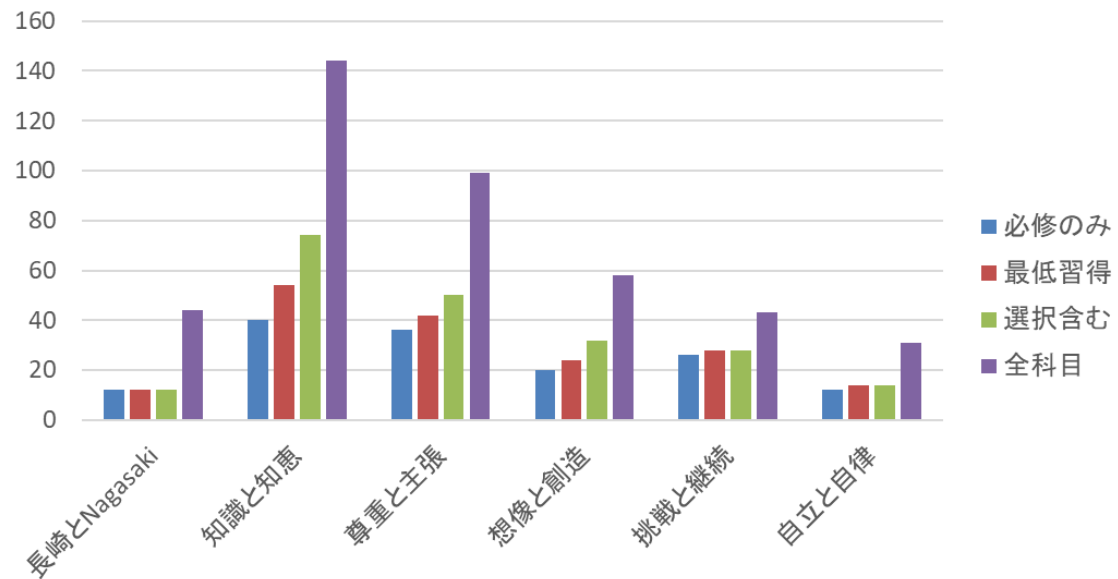
図表 2-7 の全科目の結果(ケース④)を見ると、DS の最大値は「基礎的知識の獲得」でスコア 68、最小値は「グローバルな視点で考える力」でスコア 2 となっており、評価項目間で大きな開きがあることがわかる。図表 2-8 での全科目の結果では、DS の合計の最大値は「知識と知恵」でスコア 144、最小値は「自立と自律」でスコア 31 となっている。

カリキュラムマップは、各科目と DP (ここでは KEN-SUN 力の各評価項目)との関連を示すものであり、全ての評価項目を満遍なく満たすように決定されている訳ではないため、この結果自体に問題はない。しかし、大学全体での DP が KEN-SUN 力というもので定義され、それを卒業時には身につけていることを目標とするのなら、図表 2-7 や図表 2-8 で DS が伸びていない項目を補完するような科目配置が必要となるのかもしれない。

図表 2-7 KEN-SUN 力の各評価項目の DS:経営学科



図表 2-8 KEN-SUN 力 6 項目の DS の合計:経営学科



分析②: Diploma Ratio (DR) の算出: 経営学科

分析①で求めた経営学科の DS をもとに、各 DS をその評価項目の DS の合計値で割った Diploma Ratio(DR)を求めた。図表 2-9 は経営学科の全学教育科目の DR、図表 2-10 は英語科目の DR を示したものである。さらにこれらの結果について分析①と同じように、図表 2-6 に示す 4 つのケースで評価項目ごとの DR の合計値を算出した。図表 2-11 では KEN-SUN 力の各評価項目の DR、図表 2-12 では KEN-SUN 力 6 項目の DR の合計を棒グラフとして示す。

図表 2-11 および 2-12 では、経営学科で履修できる全学教育科目および英語科目の全ての単位を取得したときに各評価項目の達成度が 100%となるが、通常そのような履修はしない。多くの学生は、卒業に必要な単位数(経営学科では 36 単位)をちょうど満たすように全学教育科目および英語科目を習得することがほとんどである(ケース③に相当する)。図表 2-11 および 2-12 でケース③の結果を見ると、評価項目ごとに達成度が大きく異なっていることがわかる。例えば図表 2-11 では、「提案する力」がケース③で 100%を達成しているが、対象となる科目は「コミュニケーション実践学」「教養セミナー」「長崎のしまに学ぶ」「しまのフィールドワーク」の 4 科目である(図表 2-6 および図表 2-9 参照)。一方で、「基礎的知識の獲得」はケース③で 35.3%の達成度となるが、この場合に対象となる科目は 12 科目であり、100%の達成度を実現しようとする、30 科目の単位習得が必要となる。このように、「少ない科目の単位習得で達成度が 100%になる項目もあれば、数多くの科目の単位を習得しても達成度が 100%にならない項目がある。」という問題があり、KEN-SUN 力の達成状況評価において DR を用いるのは適さないといえるだろう。

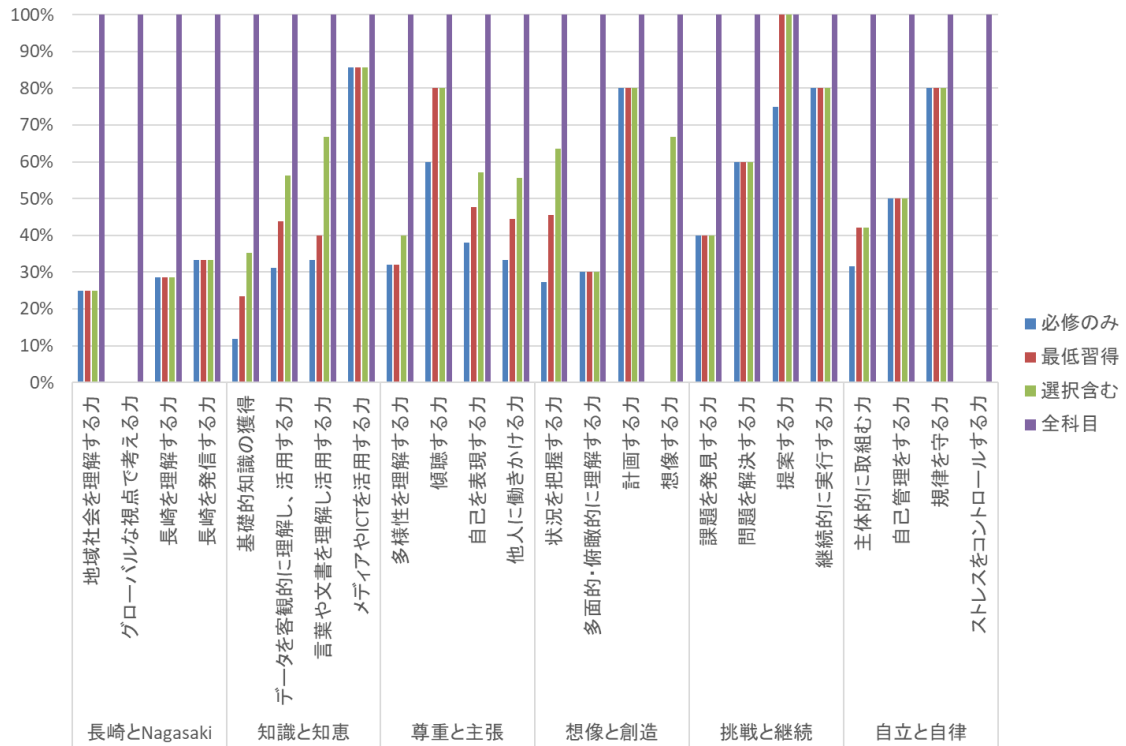
図表 2-9 全学教育科目の Diploma Ratio:経営学科

	長崎とNagasaki				知識と知恵				尊重と主張				想像と創造				挑戦と継続				自立と自律			
	地域社会を理解する力	グローバルな視点で考える力	長崎を理解する力	長崎を発信する力	基礎的知識の獲得	データを客観的に理解し、活用する力	言葉や文書を理解し活用する力	メディアやICTを活用する力	多様性を理解する力	傾聴する力	自己を表現する力	他人に働きかける力	状況を把握する力	多面的・俯瞰的に理解する力	計画する力	想像する力	課題を発見する力	問題を解決する力	提案する力	継続的に実行する力	主体的に取組む力	自己管理をする力	規律を守る力	ストレスをコントロールする力
サイエンス	化学				2.9%	12.5%							18.2%											
	物理科学				2.9%	12.5%							18.2%		66.7%									
	生物科学				2.9%				8.0%					10.0%										
	科学史				5.9%				4.0%															
	生活とサイエンス				5.9%						9.5%													
リテラシー	数学				2.9%	6.3%																		
	統計学				2.9%	6.3%																		
	データサイエンス入門				2.9%	6.3%		14.3%																
	情報処理演習Ⅰ				2.9%	6.3%		14.3%																
リテラシー	情報処理演習Ⅱ				2.9%	6.3%		14.3%																
	コミュニケーション実践学				2.9%		6.7%			20.0%	9.5%	11.1%						25.0%			10.5%			
	文章表現(ライティング)				2.9%		13.3%				9.5%	11.1%												
	対人関係論				2.9%				8.0%		11.1%	9.1%												
リテラシー	共生社会のキャリア		14.3%		2.9%				4.0%		11.1%	9.1%												
	教養セミナー				2.9%	6.3%	6.7%	14.3%	4.0%	20.0%	9.5%	11.1%		20.0%		13.3%	20.0%	25.0%		10.5%				
	日本史概説				2.9%																			
	西洋史概説				2.9%																			
ヒューマンリテラシー	西洋史概説				2.9%																			
	人文地理学				2.9%																			
	哲学				2.9%																			
	倫理学				2.9%																			
	人類学				2.9%																			
	人類学				2.9%				8.0%				10.0%											
	心理学				2.9%				4.0%				10.0%		33.3%									66.7%
	文学				2.9%		6.7%																	
	ライクスポーツ										4.8%													
	現代人とスポーツ	12.5%				12.5%																5.3%		20.0%
ヒューマンリテラシー	健康と科学				5.9%	6.3%							9.1%	10.0%									10.5%	
	運動と栄養				2.9%	12.5%							10.0%											10.5%
	食文化と調理																							
	暮らしの中の救急法				5.9%																			
リテラシー	日本国憲法				2.9%																			
	民法入門				2.9%																			
	現代社会と政治				2.9%																			
	現代社会と経済				2.9%																			
リテラシー	現代社会の課題	12.5%			2.9%																			
	キャリアデザイン	12.5%	14.3%	16.7%																				
	ボランティア活動								4.0%	9.5%	11.1%	9.1%	10.0%		20.0%		13.3%	20.0%		20.0%	10.5%			
	ボランティア活動								4.0%	9.5%	11.1%	9.1%	10.0%		20.0%		13.3%	20.0%		20.0%	10.5%			
リテラシー	長崎と文化	12.5%	14.3%	16.7%																				
	長崎の歴史と今	12.5%	14.3%	16.7%																				
	長崎と平和	12.5%	14.3%	16.7%																				
	長崎のしるしに学ぶ	12.5%	14.3%	16.7%					14.3%	8.0%	20.0%	9.5%	11.1%	18.2%	20.0%	20.0%	13.3%	20.0%	25.0%	40.0%	10.5%		40.0%	
	しまのフィールドワーク	12.5%	14.3%	16.7%		6.3%		28.6%	4.0%	20.0%	9.5%	11.1%	9.1%	10.0%	40.0%		13.3%	20.0%	25.0%	40.0%	10.5%	50.0%	40.0%	

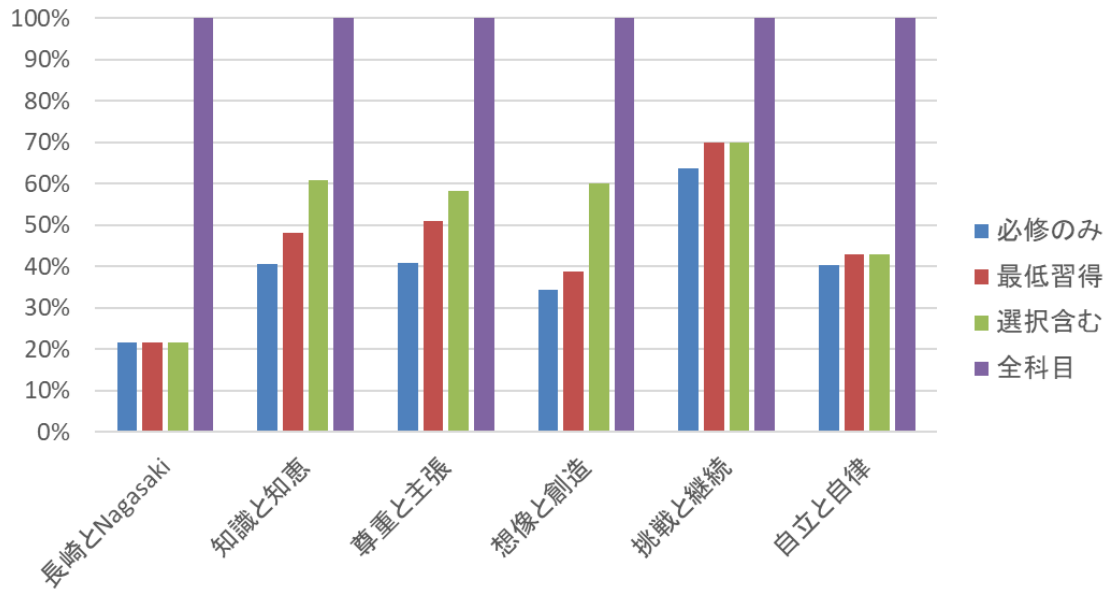
図表 2-10 英語科目の Diploma Ratio: 経営学科

	長崎とNagasaki				知識と知恵				尊重と主張			想像と創造			挑戦と継続			自立と自律						
	地域社会を理解する力	グローバルな視点で考える力	長崎を理解する力	長崎を発信する力	基礎的知識の獲得	データを客観的に理解し、活用する力	言葉や文書を理解し活用する力	メディアやICTを活用する力	多様性を理解する力	傾聴する力	自己を表現する力	他人に働きかける力	状況を把握する力	多面的・俯瞰的に理解する力	想像する力	計画する力	課題を発見する力	問題を解決する力	提案する力	継続的に実行する力	主体的に取り組む力	自己管理をする力	規律を守る力	ストレスをコントロールする力
英語 I						3%		2%																
英語 II						3%		2%																
英語 III						3%		2%																
英語 IV						3%		2%																
英語 V						3%		2%																
英語 VI						3%		2%																
英語実践演習 I																								
英語実践演習 II																								
英語実践演習 III																								
英語実践演習 IV																								
英語実践演習 V																								
英語実践演習 VI																								
英語実践演習 VII						3%		2%																
英語実践演習 VIII						3%		2%																
英語実践演習 IX						3%		2%																
オーラル・コミュニケーション I						3%		2%		5%														
オーラル・コミュニケーション II						3%		2%		5%														
オーラル・コミュニケーション III						3%		2%		5%														
オーラル・コミュニケーション IV						3%		2%		5%														
リーディング I						3%		2%																
リーディング II						3%		2%																
リーディング III						3%		2%																
ライティング I						3%		2%																
ライティング II						3%		2%																
海外語学研修(英語)	100%					7%		4%	20%	10%	11%					13%	20%			11%	50%			

図表 2-11 KEN-SUN 力の各評価項目の DR:経営学科



図表 2-12 KEN-SUN 力 6 項目の DR の合計:経営学科



3. ALCS 学修行動比較調査の「成長」項目による KEN-SUN 力達成状況評価

3.1. ALCS「成長」項目と KEN-SUN 力達成状況の算出方法

2023 年度教育開発センター活動報告では、ALCS の「成長」項目と KEN-SUN 力の関係について図表 3-1 が示されており、今回もこれを使って ALCS の回答から KEN-SUN 力の達成状況を算出していく。図表 3-1 では、ALCS の各質問項目と KEN-SUN 力の関係を●で示している。●の色は KEN-SUN 力の文章中のどの部分と関わるかを示しているが、これは今回の評価には用いない。また ALCS の「成長」項目では、各質問項目に対し以下の7段階で回答が得られている。

3:とても増えた、2:増えた、1:やや増えた、

0:変化なし、

-1:やや減った、-2:減った、-3:とても減った

ここでは「各質問項目の評価によって KEN-SUN 力の達成度が決定される。」と想定し、各質問項目の回答の値を対応する KEN-SUN 力に加算していき、全「成長」項目での結果を平均したものを「ALCS『成長項目』による KEN-SUN 力の達成状況」とする。

図表 3-1 ALCS「成長」項目と KEN-SUN 力の関係

ALCS	KEN-SUN力					
	長崎とNagasaki	知識と知恵	尊重と主張	想像と創造	挑戦と継続	自立と自律
	長崎で地域を理解するとともに世界の中のNagasakiを知ることで、グローバルに交流しながら地域・国際社会に貢献し、平和を創る力	未来を生き抜く知識を修得し、それを知恵として活用する力	他者を尊重するとともに、自己を主張し、協働・共生する力	物事を多面的・俯瞰的にとらえる想像力と新しい知を創造する力	未知の課題に挑戦しつづ、学びを継続する力	自立した生活と自律的な学びをする力
教養		●				
ものごとを分析する力				●	●	
問題を論理的に考える力		●		●	●	
特定の専門分野に関する理解力		●				
肯定的な意味で批判的に考える力				●		
自分と異なる意見や考え方を柔軟に理解する力	●		●			
リーダーシップ	●					●
人間関係を築いたり調整する力			●			
地域社会が抱える問題への関心や理解力	●			●	●	
明快かつ簡潔に話す力			●			
表現すべき内容の文章を書く力		●	●			
英語以外の外国語の運用力	●					
プレゼンテーションを準備し発表する力		●	●			
学術的な文献の読解力		●			●	
情報技術(ICT)の運用力		●				
国際的な諸問題に対する関心や理解力	●			●		
英語の運用力	●					
ものごとの本質をみて判断しようとする力		●		●		
自分を律して行動する力			●			●
得た知識やスキルを活かして問題を解決する力	●	●				

3.2. KEN-SUN 力達成状況のシミュレーション

2024 年度 ALCS 学修行動比較調査の「成長」項目の結果を用いて、KEN-SUN 力達成状況のシミュレーションを行う。

分析①: 学科別、学年別の KEN-SUN 力達成状況

まずは全回答データ(有効回答数 1,476)の「成長」項目の結果を学科別、学年別に分け、3.1.で示した方法で KEN-SUN 力ごとの達成度を求めた。図表 3-2 に佐世保校・シーボルト校の 9 学科および全回答データの結果を棒グラフで示す。各図の縦軸は、対応する「成長」項目の評価の平均となるため-3~+3 の値を取りうるが、負の結果は無かったため、グラフでは 0~+3 の範囲を示している。

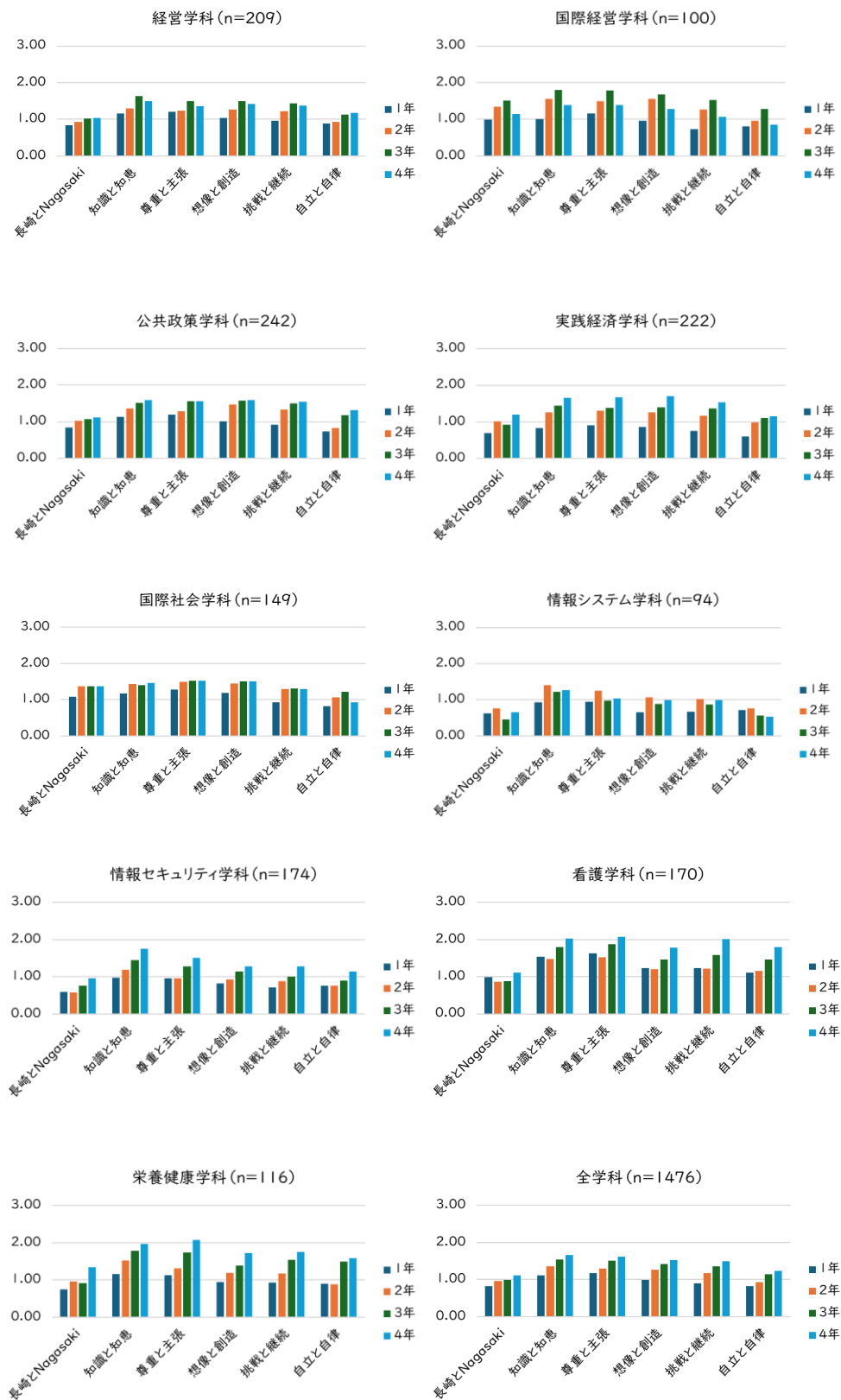
図表 3-2 の結果を見ると、学科や項目、学年によって KEN-SUN の値は異なっており、最大が 2.00 を超えている部分もあれば、4 年次でも 1.00 を下回っている部分も見られる。また全学科の結果では、学年が進むにつれて KEN-SUN 力が伸びているが、学科ごとの結果では、高い学年で KEN-SUN 力の値が下がっている部分も見られる。ただしこの結果については、「2024 年の在学学生 1~4 年生の回答を分析したものであり、同一の学生・学年の成長を示すものではないこと」「コロナ禍による影響(遠隔授業の増加など)を大きく受けた学年とそうでない学年があること」などを考慮すべきであろう。

分析②: 個人別の KEN-SUN 力達成状況

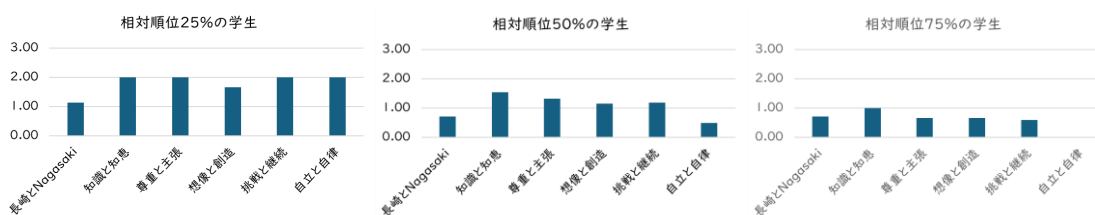
次に、「成長」項目の個人の回答結果を用いて、個人ごとの KEN-SUN 力の達成度を求める。ここでは全回答データを「成長」項目の評価の平均値が高い順に並べ、相対順位が 25%、50%、75%の位置となる 3 名の学生の結果を用いて、KEN-SUN 力の達成度を求めた。図表 3-3 に個人別の KEN-SUN 力達成状況を示す。ここに示す 3 名は全て 4 年生であったが、学科は異なっている。なお、全ての「成長」項目で+3 と回答した場合は、全ての KEN-SUN 力で 3.00、全項目で-3 と回答した場合は、全ての KEN-SUN 力で-3.00 となる。

図表 3-3 の結果を見ると、相対順位が高い学生ほど各 KEN-SUN 力の達成状況も高くなっていることがわかる。分析対象とした学生では負の評価は無かったが、負の評価が多い学生では KEN-SUN 力がマイナスになる場合もありうる。なお、今回の分析では 2024 年の回答のみを用いたが、同一学生の複数年の回答データを使うことで、個人の KEN-SUN 力の成長過程を見ることが可能となる。

図表 3-2 ALCS「成長」項目による KEN-SUN 力達成状況



図表 3-3 個人別の KEN-SUN 力達成状況



4. まとめと課題

学生単位での DP 達成状況評価の試みとして、①カリキュラムマップを用いた全学教育科目（外国語科目含む）の単位取得に伴う「KEN-SUN 力」達成状況の可視化、②ALCS 学修行動比較調査の「成長」項目の結果を用いた学科単位、学生単位での KEN-SUN 力達成状況の可視化を行った。

2節では、経営学科を対象に図表 9 に示した 4 つのケースについて Diploma Score(DS) および Diploma Ratio(DR)の算出を行い、その結果を棒グラフで示した。図表 10 および図表 11 に示した DS の結果では、各評価項目のスコアに偏りはあるものの、単位習得に応じて学生自身の KEN-SUN 力がどのように積み上がっていくかを観察することができた。一方で DRの結果では、評価項目間で達成度と科目数の関係が一定ではないため、KEN-SUN 力の達成状況評価に用いるのは適さないと考えられる。

3.1 節では、ALCS の「成長」項目と KEN-SUN 力の関係を示した図表 3-1 を使い、ALCS の回答から KEN-SUN 力の達成状況を算出した。図表 3-2 では、学科別、学年別の KEN-SUN 力達成状況を示しており、全学科の結果では学年が進むにつれて KEN-SUN 力が伸びている様子が見られたが、学科ごとに見ると傾向は異なる。ただし図表 3-2 が異なる入学年度の学生の結果であることや、コロナ禍の影響度が異なることは考慮すべきである。

3.2 節では、ALCS の「成長」項目の個人の回答結果を用いて、個人ごとの KEN-SUN 力の達成度を求めた。「成長」項目の評価が異なる 3 名の結果（図表 3-3）を見ると、相対順位が高い学生ほど各 KEN-SUN 力の達成状況も高くなっていた。ただしこれは単年度のものであり、個人の KEN-SUN 力の成長過程を見るには、同一学生の複数年の回答データを分析する必要がある。

ここまで検討してきた「DP 達成状況評価」における課題の一つとして、「授業の実施形態と評価項目の関係およびカリキュラムマップの定期的な見直し」について述べておく。2 節の分析では、2021（令和 3）年度に作成された全学教育科目および外国語科目のカリキュラム・

マップ(図表 4~6)を用いたが、科目とカリキュラムマップの評価項目の関係は授業の実施形態に大きく依存するものと思われる。例えば図表 4 で、「基礎的知識の獲得」に◎や○の印がついている科目は、講義形式のものが多いだろう。一方で、「問題を解決する力」に印がついているのは、「教養セミナー」「ボランティア活動」「長崎のしまに学ぶ」「しまのフィールドワーク」「海外語学研修」といったアクティブラーニングを取り入れた科目ばかりである。しかし、講義形式の科目であってもアクティブラーニングを導入することは可能であり、その場合はカリキュラムマップも変更されるべきである。このように同じ科目であっても、その実施形態によってカリキュラムマップの評価項目との関係は変化するため、カリキュラムマップの定期的な見直しが必要となる。しかしそれは KEN-SUN 力達成状況の評価基準が変わることにもなるため、頻繁な変更が果たして正しいことなのかは議論の必要があると考えられる。いずれにせよ、学生のまなびの成果としての可視化は有益なものだと思われるので、今後も検討を進めていくことが重要である。

また今回は、全学教育科目の単位取得状況と ALCS の「成長」項目という2つのデータから KEN-SUN 力の達成状況を可視化する試みを行ってきた。これら2つのデータについて、前者は「単位取得による客観的な評価」、後者は「学生自身が回答した主観的な評価」ということが出来る。本来なら両者の結果が出来るだけ一致している状況が望ましいが、今回はその検証は行っていない。今後は、客観評価と自己評価の関係についても検証を進めていく必要があるだろう。

2024 年度入学時調査の結果報告

教育開発センター委員 高比良 祥子

看護栄養学部 看護学科 教授

教育開発センター委員 齋藤 正也

情報システム学部 情報セキュリティ学科 准教授

1. 目的

2024 年度入学生における高校時代の経験、本学のディプロマポリシーや KEN-SUN 力への理解度、大学教育に求める内容等を明らかにし、本学の初年次教育の改善及び学生支援の充実に向けた示唆を得る。

2. 方法

(1)対象者

2024 年度入学生 761 人

(2)調査日時

2024 年 4 月 1 日～4 月 10 日

(3)調査方法

Web 調査

(4)調査内容

- ①高校時代の経験を教えてください（4 択×18 問）
- ②あなたは本学のディプロマ・ポリシー（卒業までに身に付けて欲しい能力）である KEN-SUN 力～地域から世界へ挑む長崎県立大学生～を知っていますか（2 択）
- ③以下の項目は KEN-SUN 力にかかわる内容です。今の時点であなたはどの程度身に付いていると思いますか（5 択×6 問）
- ④あなたは大学で以下の内容をどの程度指導してほしいと感じていますか（5 択×11 問）
- ⑤その他に大学で指導してほしい内容があれば教えてください（自由記述）
- ⑥あなたが 4 年間の大学生活で身に付けたい知識、スキル、態度（積極性、礼儀など）について優先順位が高いものから 3 つまで教えてください（自由記述）

⑦あなたが本学に期待することを教えてください（自由記述）

⑧あなたの4年間の大学生活の抱負を教えてください（自由記述）

(5) 分析方法

選択回答式質問に関しては、記述統計を行った。自由回答式質問に関しては、1つの意味内容ごとに1記述単位として類似する内容をまとめてカテゴリズを行った。

(6) 倫理的配慮

対象者には、調査の目的と意義、自由意思による参加、個人情報保護、結果は今後の教育改善や学生支援の充実、および研究に使用し、それ以外の目的で使用することはないこと、結果は統計処理したうえで大学ホームページ等に公開することを説明した。Web調査への回答送付をもって同意とした。

3. 結果

(1) 対象者の概要

調査対象者761人に対し、回答者407人（回答率53%）であった。回答者の学科別内訳を図表1に示す。

図表1 学科別回答者数

学科	回答者数	入学者数	回答率
①経営	63	142	44%
②国経	31	59	53%
③公共	52	122	43%
④実践	54	136	40%
⑤国社	54	70	77%
⑥情シ	20	40	50%
⑦情セ	46	84	55%
⑧看護	58	65	89%
⑨栄養	29	43	67%
総計	407	761	53%

(2) 高校時代の経験の全体結果

『高校時代の経験を教えてください』18項目の設問に関して、1：まったくしなかった、2：あまりしなかった、3：ときどきした、4：ひんぱんにした、の4件法で回答を求めた。結果を図表2に示す。「人と協力しながら物事を進めた：3.47」「自分の失

敗から学んだ：3.45」「社会や文化の多様性を理解し、尊重した 3.27」は得点が高く、多くの新入生が経験していた。一方で、「グループ活動中にアイスブレイクを行った：2.30」「授業中、質問をした：2.35」「チームビルディングによるグループ活動を行った：2.48」「自分の意見を論理的に主張した：2.57」は得点が低い項目であった。グループ活動でのリーダーシップの発揮、自分の意見の論理的主張、授業中に質問をした経験は、少ない傾向にあった。

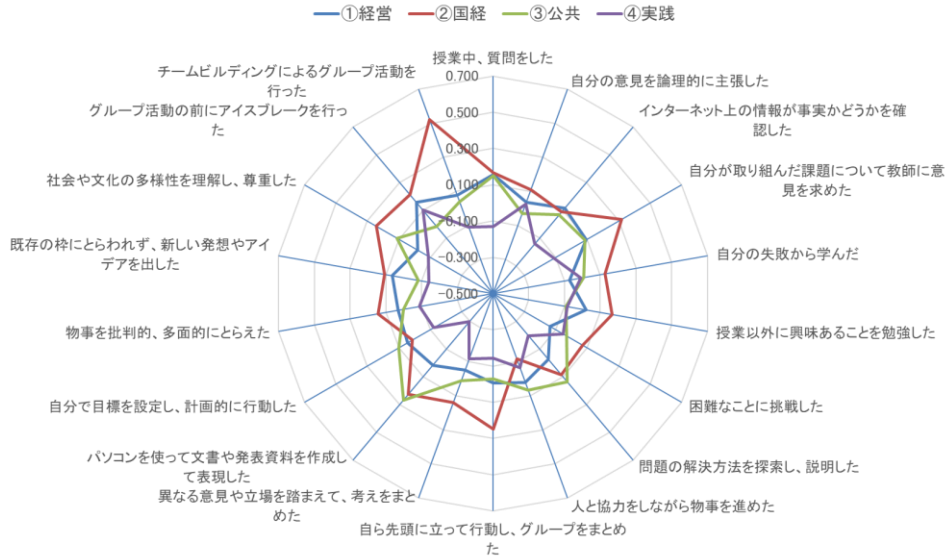
図表 2 高校時代の経験

順位	項目	平均
1	人と協力をしながら物事を進めた	3.47
2	自分の失敗から学んだ	3.45
3	社会や文化の多様性を理解し、尊重した	3.27
4	インターネット上の情報が事実かどうかを確認した	3.11
5	困難なことに挑戦した	3.09
6	パソコンを使って文書や発表資料を作成して表現した	3.00
7	異なる意見や立場を踏まえて、考えをまとめた	2.99
8	自分で目標を設定し、計画的に行動した	2.96
9	物事を批判的、多面的にとらえた	2.92
10	授業以外に興味あることを勉強した	2.90
11	問題の解決方法を探索し、説明した	2.88
12	自分が取り組んだ課題について教師に意見を求めた	2.78
13	既存の枠にとらわれず、新しい発想やアイデアを出した	2.70
14	自ら先頭に立って行動し、グループをまとめた	2.62
15	自分の意見を論理的に主張した	2.57
16	チームビルディングによるグループ活動を行った	2.48
17	授業中、質問をした	2.35
18	グループ活動の前にアイスブレイクを行った	2.30

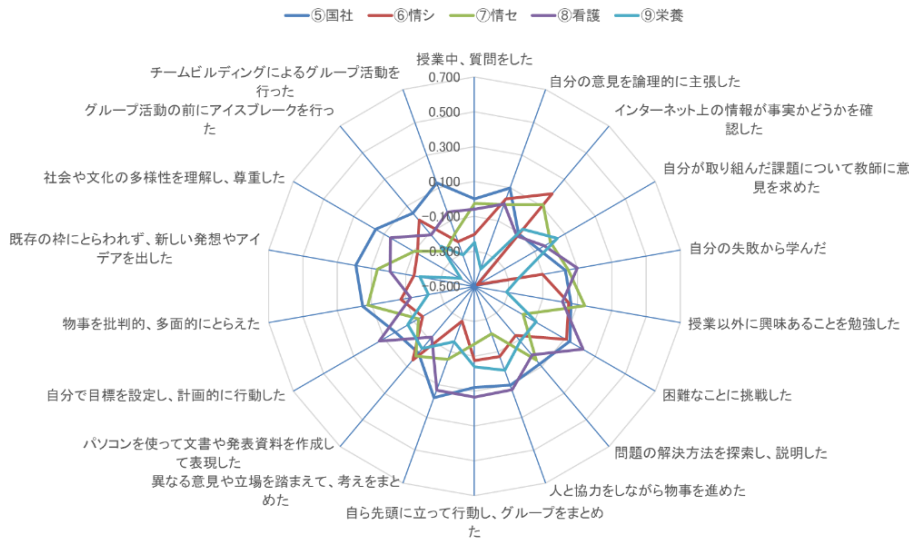
(3) 高校時代の経験の項目別（各学科平均－全学平均）のレーダー図による比較

高校時代の経験について、質問項目別に（各学科平均－全学平均）の値を求め、レーダー図を作成した。図表 3 は佐世保校の学科、図表 4 はシーボルト校の学科の得点を示す。国際経営学科の学生は得点が高い傾向にあった。

図表 3 高校時代の経験の項目別（各学科平均－全学平均）のレーダー図
（佐世保校）



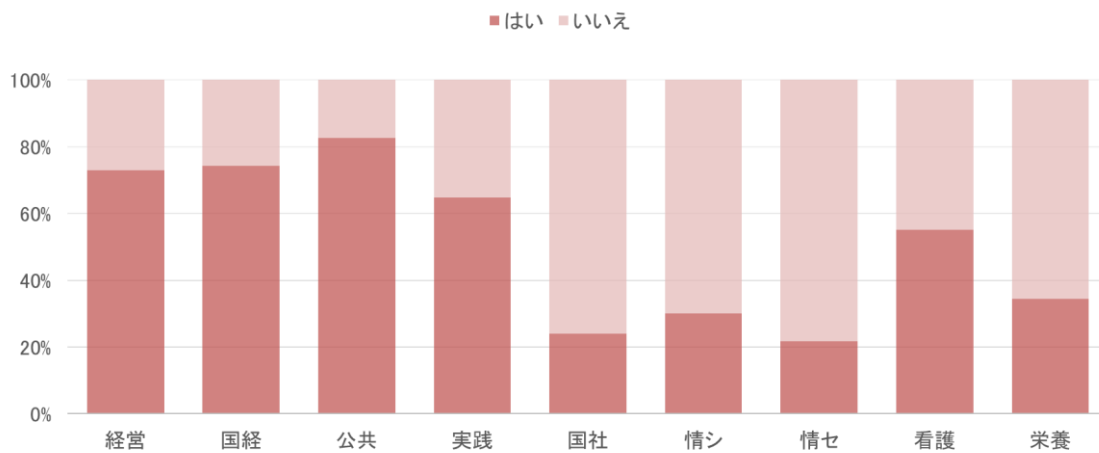
図表 4 高校時代の経験の項目別（各学科平均－全学平均）のレーダー図
（シーボルト校）



(4) 本学ディプロマポリシーの KEN-SUN 力の学科別認知度

『本学のディプロマポリシーの KEN-SUN 力を知っていますか』に関して、「はい」「いいえ」の 2 件法で回答を求めた。結果を図表 5 に示す。経営学部と地域創造学部の学生は KEN-SUN 力の認知度が高い傾向にあった。

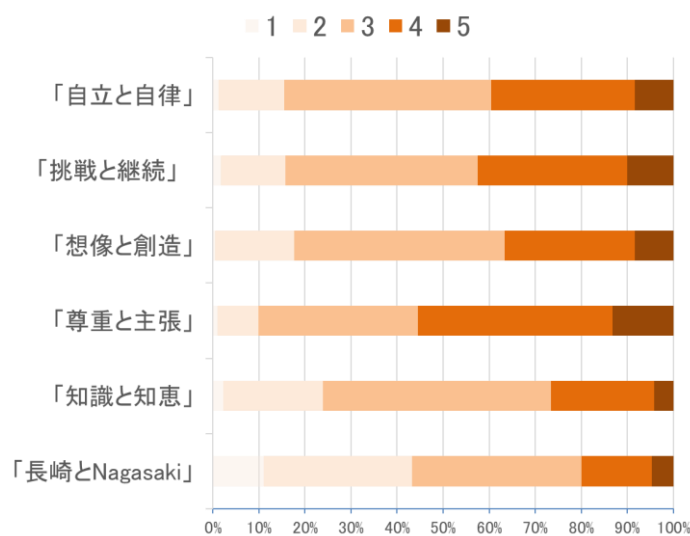
図表5 本学のディプロマポリシーのKEN-SUN力の学科別認知度



(5) 現時点で身につけている項目別KEN-SUN力

『現時点で身につけている項目別KEN-SUN力』について、1：全く身につけていない、2：あまり身につけていない、3：ある程度身につけている、4：身につけている、5：とても身につけている、の5件法で回答を求めた。結果を図表6に示す。「尊重と主張」「挑戦と継続」「自立と自律」は、4割以上の学生が、現時点で身につけていると回答した。一方、「長崎とNagasaki」は、4割以上の学生が、現時点で身につけていないと回答した。

図表6 現時点で身につけている項目別KEN-SUN力



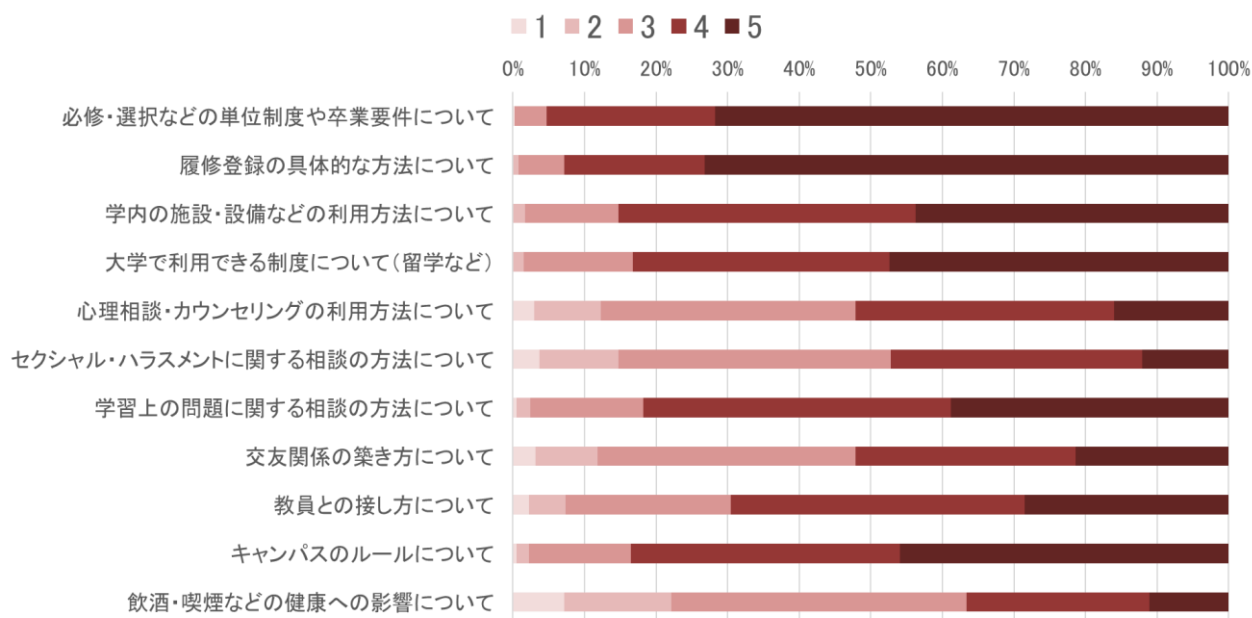
(6)大学で指導してほしい内容

『大学で指導してほしい内容』について、1：全くしてほしくない、2：あまりしてほしくない、3：どちらともいえない、4：ややしてほしい、5：とてましてほしい、の5件法で回答を求めた。結果を図表7および図表8に示す。履修関連では、「必修・選択などの単位制度や卒業要件：4.67」、「履修登録の具体的な方法：4.65」が高い傾向にあった。学修環境では、「大学で利用できる制度：4.29」、「学内の施設・設備の利用方法：4.27」、「キャンパスのルール：4.27」、「学習上の問題に対する相談の方法：4.18」が、大学で指導して欲しい内容として得点が高い傾向にあった。

図表7 大学で指導してほしい内容

No	項目	平均
1	必修・選択などの単位制度や卒業要件について	4.67
2	履修登録の具体的な方法について	4.65
3	学内の施設・設備などの利用方法について	4.27
4	大学で利用できる制度について(留学など)	4.29
5	心理相談・カウンセリングの利用方法について	3.53
6	セクシャル・ハラスメントに関する相談の方法について	3.41
7	学習上の問題に関する相談の方法について	4.18
8	交友関係の築き方について	3.59
9	教員との接し方について	3.89
10	キャンパスのルールについて	4.27
11	飲酒・喫煙などの健康への影響について	3.18

図表 8 大学で指導してほしい内容（得点別割合）

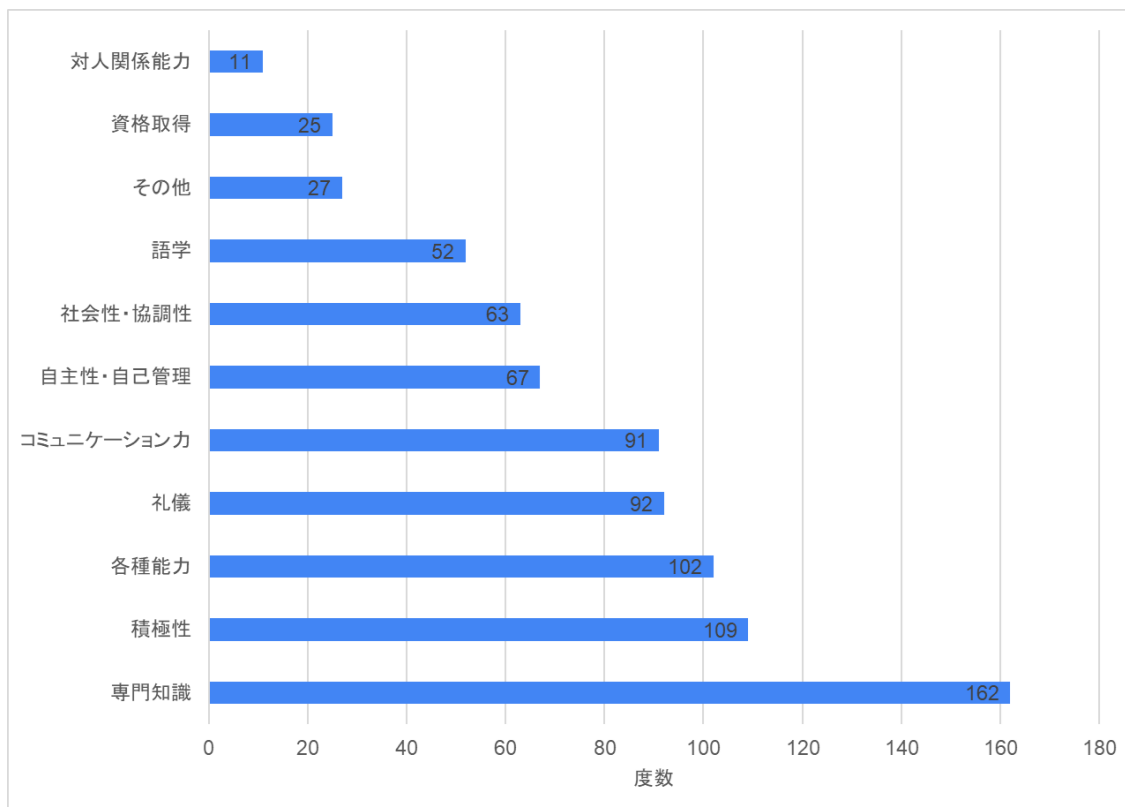


(7)4年間で最も身につけたい知識・態度・スキル

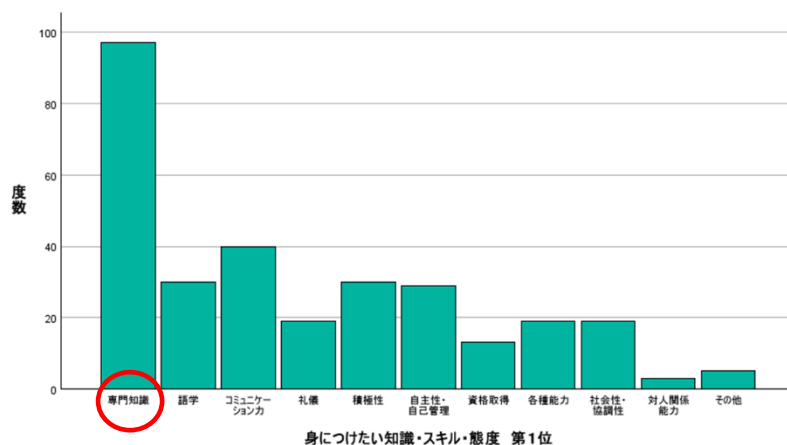
『あなたが4年間の大学生活で身につけたい知識、スキル、態度について優先順位が高いものから3つまで教えてください』について、自由記述で回答を求めた。自由記述を、1つの意味内容ごとに1記述単位として、類似する内容をまとめてカテゴライズした(計801記述単位)。図表9に全体の結果、図表10~12に順位別の結果を示す。記述の多い順に、①専門知識、②積極性、③各種能力、④礼儀、⑤コミュニケーション力、⑥自主性・自己管理、⑦社会性・協調性、⑧語学、⑨その他、⑩資格取得、⑪対人関係能力であった。

優先順位別では、1番目には専門知識(図表10)、2番目には積極性や各種能力(図表11)、3番目には礼儀(図表12)の回答が多かった。

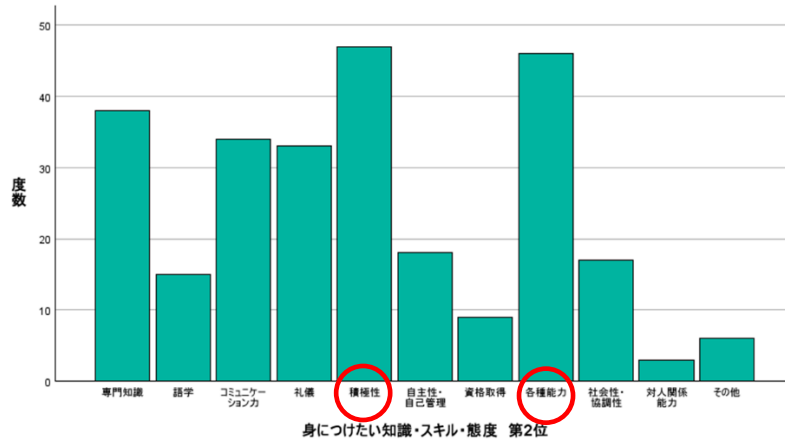
図表 9 4年間で最も身につけたい知識・態度・スキル3つ（計801記録単位）



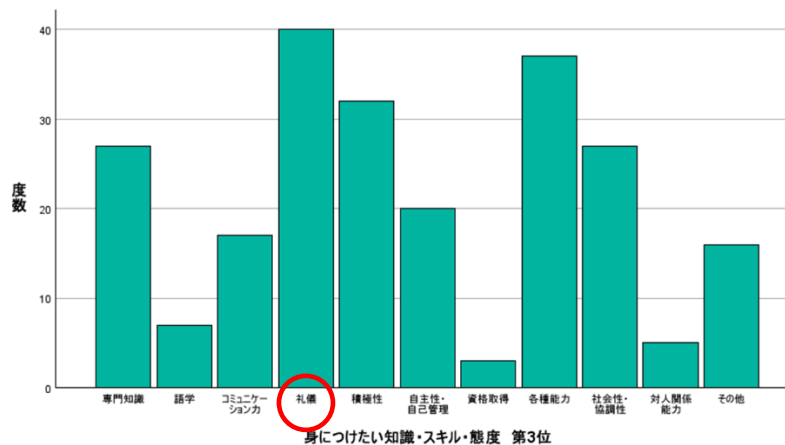
図表 10 身につけたい知識・スキル・態度 第1位（304記録単位）



図表 11 身につけたい知識・スキル・態度 第2位 (266 記録単位)



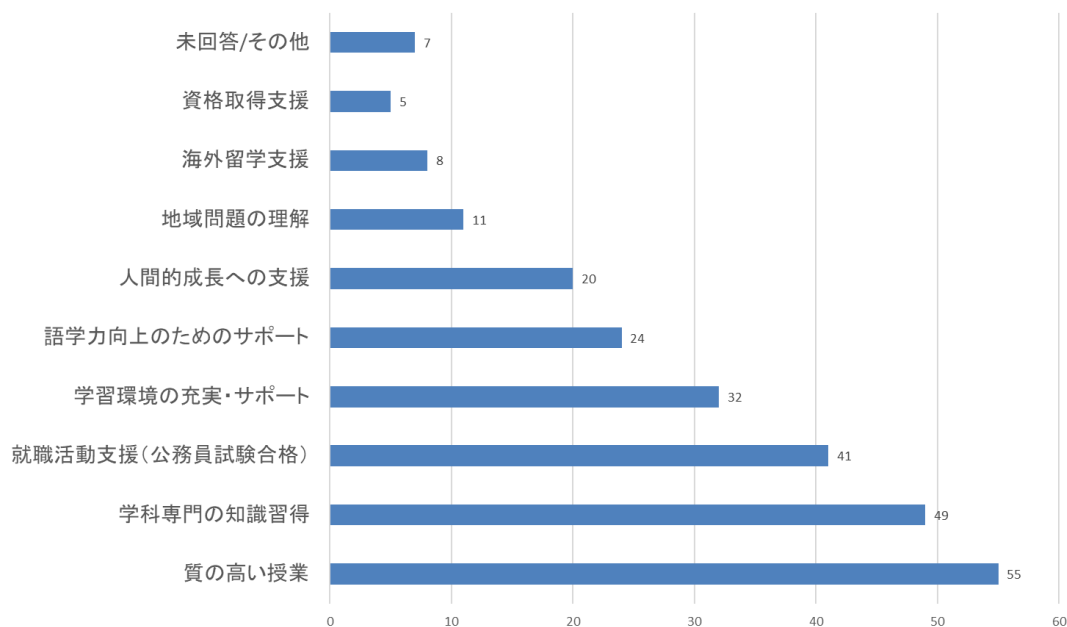
図表 12 身につけたい知識・スキル・態度 第3位 (231 記録単位)



(8) 本学に期待すること

『あなたが本学に期待することを教えてください』について、自由記述で回答を求めた。自由記述を1つの意味内容ごとに1記述単位として、類似する内容をまとめてカテゴライズした(計252記録単位)。図表13に結果を示す。回答数が多い順に、①質の高い授業、②学科専門の知識習得、③就職活動支援(公務員試験合格)、④学習環境の充実・サポート、⑤語学力向上のサポート、⑥人間的成長への支援、⑦地域問題の理解、⑧海外留学支援、⑨資格取得支援であった。学修関係、資格・就職関係への期待が多い傾向にあったが、人間的成長への支援、地域問題の理解を望む声もあった。

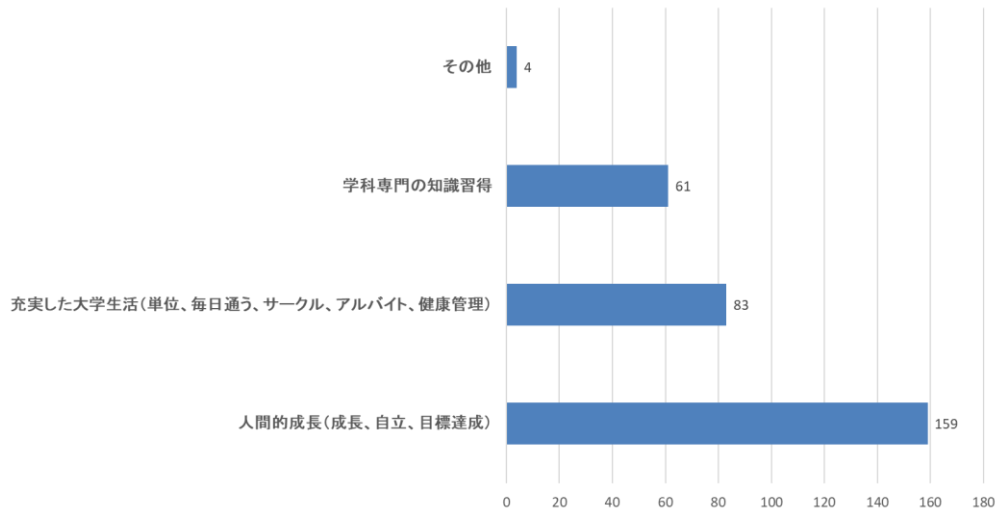
図表 13 本学に期待すること（計 252 記録単位）



(9) 大学生活の抱負

『あなたの4年間の大学生活の抱負を教えてください』について、自由記述で回答を求めた。自由記述を1つの意味内容ごとに1記述単位として、類似する内容をまとめてカテゴライズした（計 307 記録単位）。図表 14 に結果を示す。回答数が多い順に、①人間的成長（成長、自立、目標達成）、②充実した大学生活（単位、毎日通う、サークル、アルバイト、健康管理）、③学科専門の知識習得であった。

図表 14 大学生生活の抱負（計 307 記録単位）

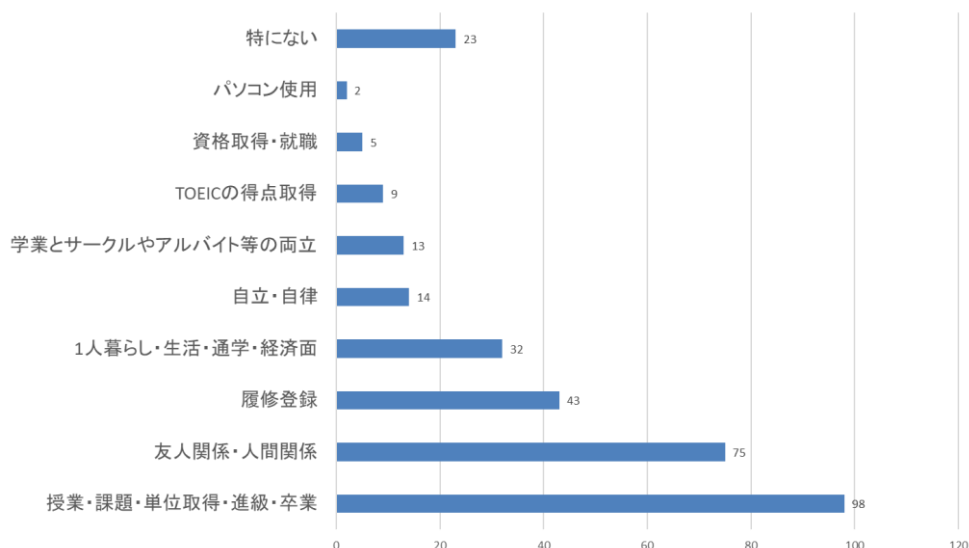


(10) これからの大学生生活で不安に思っていること

『これからの大学生生活で不安に思っていること』について、自由記述で回答を求め、類似する内容をまとめてカテゴライズした(計 314 記録単位)。図表 15 に結果を示す。

1 番目は学修関係(授業についていけるか・課題・単位修得・進級・卒業)であった。2 番目は、友人関係・人間関係(友人ができるか、教員との関わり方)であった。3 番目は履修登録であった。さらに、生活に関連した不安(1 人暮らし・生活・通学・経済面)や、学業とサークルやアルバイトとの両立があった。履修登録をうまくできるか、履修登録を失敗しないか、履修登録は高校で経験がないなど「履修登録に関する不安」が多い傾向にあった。

図表 15 これからの大学生活で不安に思っていること（計 314 記録単位）



4. まとめ

2024 年度入学時調査の結果、高校時代にチーム活動やリーダーシップの経験が少なく、対人関係の構築に不慣れな新生が多いことが推察された。教養セミナーや基礎演習などで、多様なグループワークを積極的に導入することが望まれる。

自由記述の結果から、入学時の不安への対処を優先的に考えることが必要と考える。まず、「授業についていけるか」に対しては、1年次の1Q・2Qの授業は、高校とは異なる授業形態に慣れて、「自分もやれる」という感覚がつかめるように、丁寧に進めることが望まれる。次に、「履修登録を間違えないか」に対しては、ガイダンス時に履修登録の十分な時間確保に加え、個別の質問対応ブースの設置など、履修登録の相談がしやすいシステムが必要ではないかと考える。そして、「1人暮らしが不安」については、新生ガイダンスの中に生活講座（食生活・金銭管理等）を設けてはどうかと考える。また、「礼儀・マナーを身につけたい」については、教養セミナーで『授業のマナー、教職員へのマナー』を学び実践することで、マナー修得の第一歩となると考える。

2024 年度入学生調査の結果から、学生は入学時から卒業要件や就職活動、資格取得を強く意識していることが窺われた。学内外での人間関係の構築を含め、学生が充実した大学生活を過ごすことができるように、総合的な配慮や対応が望まれる。

設問に関して、2024 年度入学時調査の結果、『身につけたい知識・スキル・態度』『本学に期待すること』『大学生活の抱負』『これからの大学生活で不安に思っていること』の自由記述の設問の回答内容は概ね明確化された。2025 年度入学時調査では、これらの設問を選択回答式にすることで、回答時間の短縮と分析精度の向上につながると考える。

2024 年度卒業時調査の回収率について

教育開発センター事務局（シーボルト校） 福野 健二

2024 年度卒業生を対象に、卒業時調査を実施した。昨年度と同様に、卒業見込み者を対象に11月から調査を開始した。調査方法は、ALCS 学修行動比較調査にて効果のあったステルスサーベイ方式とした。

また、回収率を上げるために、回答者にインセンティブとして 500 円の QUO カード pay を進呈することとした。

なお、前回調査との継続性を考慮し、設問項目の変更は行っていない。実施結果については、次年度の当該活動報告書にて報告する。

1. 調査期間

2024 年11月1日～2025 年3月10日

2. 対象者

学部4年次生 753 名

3. 回答者数(回答率)

376 名(49.9%)

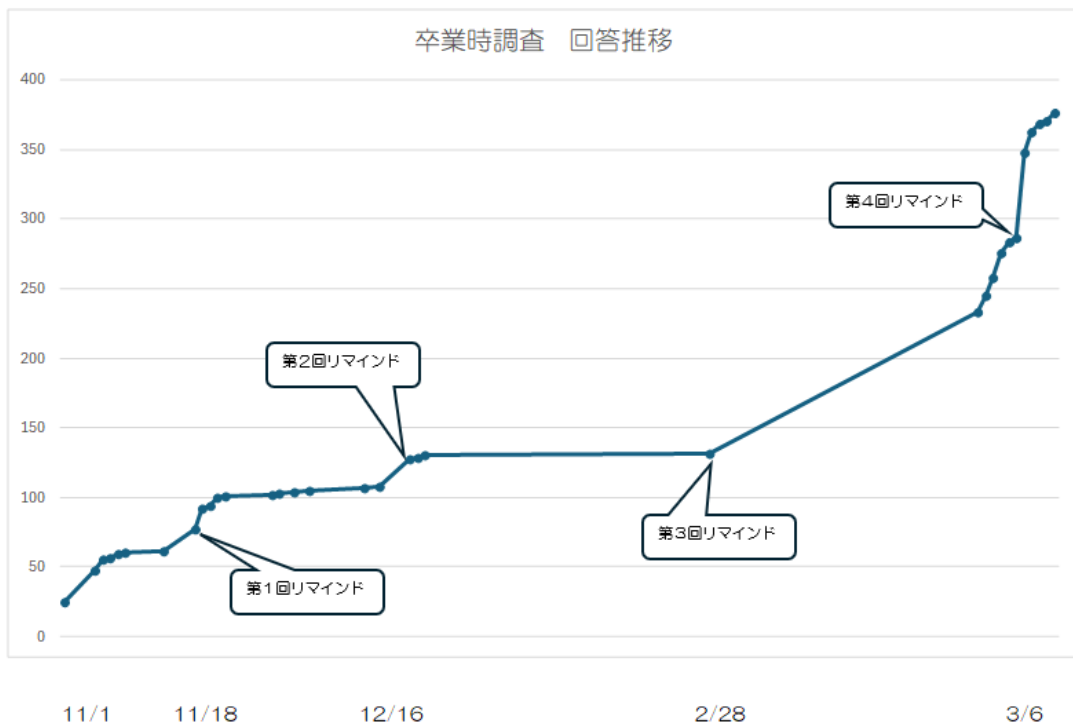
4. 学科毎の回答者数

学科	学生数 (送信者数) A	回答数 (3/10 時点) B	B/A
経営学科	153	59	38.6%
国際経営学科	47	26	55.3%
公共政策学科	125	72	57.6%
実践経済学科	137	70	51.1%
国際社会学科	60	28	46.7%

情報システム学科	41	16	39.0%
情報セキュリティ学科	84	45	53.6%
看護学科	66	38	57.6%
栄養健康学科	40	22	55.0%
計	753	376	49.9%

5. 回答率の推移

インセンティブの通知を行った第4回目のリマインド後、11 日間で 245 名（全体の 32%）の回答があった。



2024 年度 FD 研修会 (全学)

教育開発センター委員 吉光 正絵
国際社会学部 国際社会学科 教授
教育開発センター委員 駿河 和仁
看護栄養学部 栄養健康学科 准教授

1. はじめに

本学の全学 FD は、授業内容や方法の改善・向上とともに、学部学科、キャンパスを越えた教員間の人的交流を図ることも重要な目標としてきた。そのため、初年度の 2008 年以来、全学部の教員が一同に会する FD 研修会を実施することが慣例となっている。突然のコロナ禍による対面での集まりへの自粛を余儀なくされた期間は、オンラインやオンデマンドによる実施を主としてきた。この期間に実施していたオンデマンドによる「自己研鑽 FD」を、新型コロナウイルス感染症が 5 類感染症に移行した昨年度に引き続き、今年度も第 1 回 FD として実施した。今年度は、IR 関連のものも含め 112 の新規の動画を追加した。また、昨年度の反省点となっていた実施期間の短さを改善し、今年度は実施期間を 2 カ月間延長した。

第 2 回全学 FD では、昨年度同様に、キャンパスごとに対面で講義を受講し、学部学科を越えたグループワークを行うとともに、リアルタイムでキャンパス間を ZOOM によってつなぎ、両会場間で円滑にコミュニケーションをとり実施した。講師は、昨年度に引き続き、『シリーズ 大学の教授法』（玉川大学出版部、2017 年）の執筆者から選定し依頼した。昨年度は、『講義法』の執筆者をお招きし、講義に関して十分に学び成果を得た。そのため、今年度は同シリーズの『研究指導』（玉川大学出版部、2018 年）の執筆者から講師を選定した。研究指導は、日本の大学では主にゼミで進められている。ゼミは、主体的な学びやチームでのプロジェクト遂行に必要な力を養うためにも有意義な大学教育の取り組みであるが、現状では教員個々の力量や裁量に任されることが多い。昨年度の講師である根岸千悠先生のご紹介で、「ゼミ教育」の専門書である『日本のゼミナール教育 — 人文・社会科学領域等の学士課程教育における学習共同体の姿（高等教育シリーズ 182）』（玉川大学出版部、2022 年）の執筆者でもある西野毅朗先生を講師としてお招きすることができた。

講演では、ゼミ教育が日本の大学教育に取り入れられてきた経緯とともに、体系的・科学的な運営方法を学んだ。講師の西野先生からは事前アンケートで収集された本学特有の悩みや

問題についても前向きな検討策が提示され非常に実践的な学びとなった。

加えて、昨年度同様に、所属を越えた少人数でのグループワークによって専門領域やバックグラウンドを越えた教員同士で講義に関する日々の実践や工夫が共有されたことで、より良い学習効果がもたらされていた。グループワークの参加度や議論の盛り上がりにはばらつきがあったことが受講後アンケートへの満足度に大きく影響しているとも考えられる。こうした改善点については、検討を重ねつつ、今後も引き続き、オンラインと対面での教員間の相互交流の双方の良さを活用しつつ、より効果的なFDのプログラムを開発していく必要があるだろう。

第1回FD研修会「自己研鑽FD」

<実施期間>

2024年7月24日(水)～2025年3月9日(日)

<開催方式>

動画視聴または自己研鑽研修会等への参加:Google Classroomにて掲載のコンテンツより自身で興味のある内容を選択、また、他大学が開催する自己研鑽(または大学教育)に関する研修会等への参加も含む

<到達目標>

1. 様々な自己研鑽に資する動画の中から自分が興味ある動画を視聴することで、あるいは他大学等の研修会に参加することで、自身の教授法について振り返ることができる。
2. 自身の教授法について課題を把握し改善するための方法を考えることができる。

<受講率>

83.0%(132名/159名)専任・特任・非常勤および一部の本学職員を含む

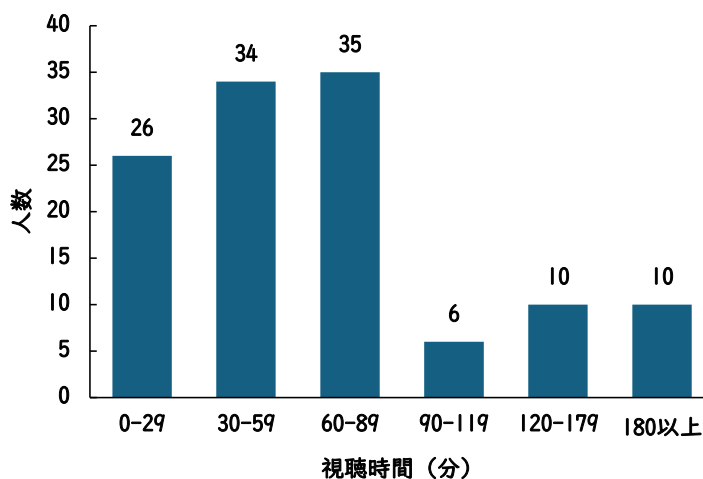
●各学科別専任教員の受講率および動画視聴時間

各学科専任教員(計 143 名)の受講率(外部研修受講者 2 件含む)は 86%(全体で 83%)で、昨年度(全体で 76%)より受講率が増加した。動画視聴時間中央値は学科により差はあるが、全体で 61 分であった。

学科	受講率 (%)	受講者数	未受講 者数	動画視聴時間(分)	
				平均値 (標準偏差)	中央値
経営	93.8	15	1	69 (60)	71
国際経営	81.8	9	2	74 (43)	74
公共政策	77.8	14	4	53 (40)	39
実践経済	93.8	15	1	78 (66)	51
情報セキュリティ	80.0	8	2	101 (85)	76
情報システム	80.0	8	2	40 (27)	36
国際社会	75.0	15	5	67 (47)	52
看護	90.1	20	2	131 (146)	73
栄養健康	95.0	19	1	65 (34)	71
全体	86.0	123	20	79 (78)	61

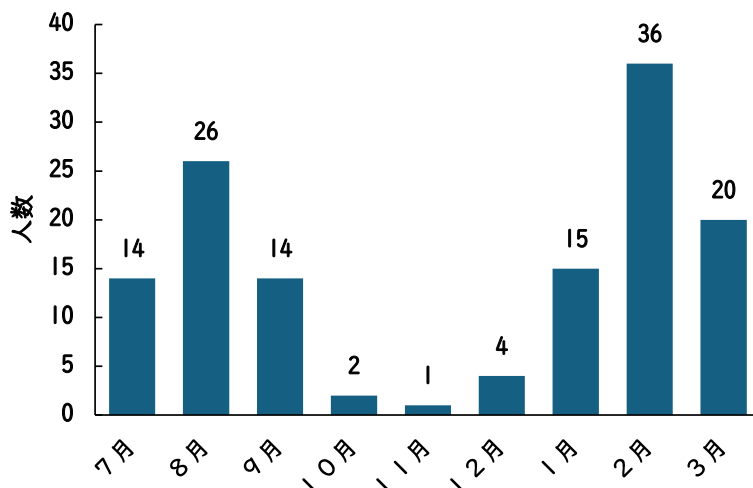
●本学専任教員の動画視聴時間の分布

本学専任教員の動画視聴時間の分布は以下のとおりであり、60 分未満が約 50%、60～90 分が約 30%、90 分以上が約 20%であった(最短 9 分、最長 605 分)。



●月別事後アンケート回答送信者数（専任・特任・非常勤および一部の本学職員を含む）

月別事後アンケートの回答送信は、本FDの第1回目の案内メール送信（7月22日）後の夏季休暇期間および第2、3回のリマインドメール送信（1月27日、2月28日）後に二分していた。



●動画配信サイト、動画所蔵数、視聴回数

本年度は1つの機関（【7】）が配信する動画も加わり、既存の機関のものも含めると計234（うち新規追加112）の動画となった。

動画配信機関	動画所蔵数	新規追加動画数	視聴回数
【1】東北大学高度教養教育・学生支援機構	16	0	80
【2】愛媛大学教育企画室	50	5	70
【3】愛媛大学教育企画室*IR関連	10	10	19
【4】公立大学教職員研修システム (アカウント登録必要)	44	5	8
【5】教育機関DXシンポジウムアーカイブス	21	11	37
【6】大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部	24	12	71
【7】東京大学フューチャーファカルティー プログラム	69	69	54
計	234	112	

●動画視聴ランキング（タイトルの色分けは上に示す動画配信機関のものと対応）

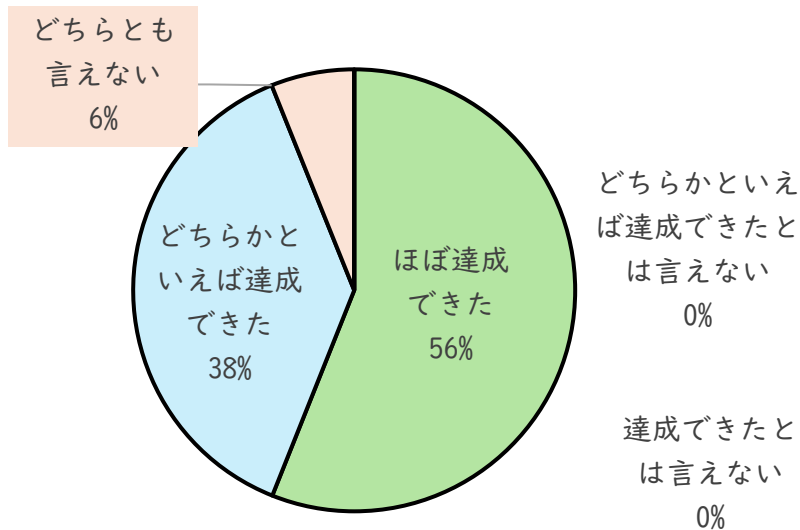
今年度の動画視聴回数上位 2 位までは昨年度においても上位であった東北大学が公開しているものが占めており、3 から 5 位は新規に追加された動画であった。

順位	視聴回数	時間 (分)	タイトル	2023 年度 順位
1	12	51	授業デザインとシラバス作成	1
		84	学生理解と学生発達	7
2	10	39	コーチング技能を活用した院生指導	4
		77	大学生のクリティカルシンキングの育成	8
		51	Engaging Students in Learning in English-medium Classes	10
3	9	12	講義法 4 『記憶に残りやすく教えるには？』	新規追加
4	8	8	講義法 2 『学生が寝ない授業にするには？』	新規追加
	8	10	講義法 3 『わかりやすい授業にするには？』	新規追加
5	7	14	大学生の生成系 AI 活用実態と今後の展望	新規追加

●到達目標に対する自己評価

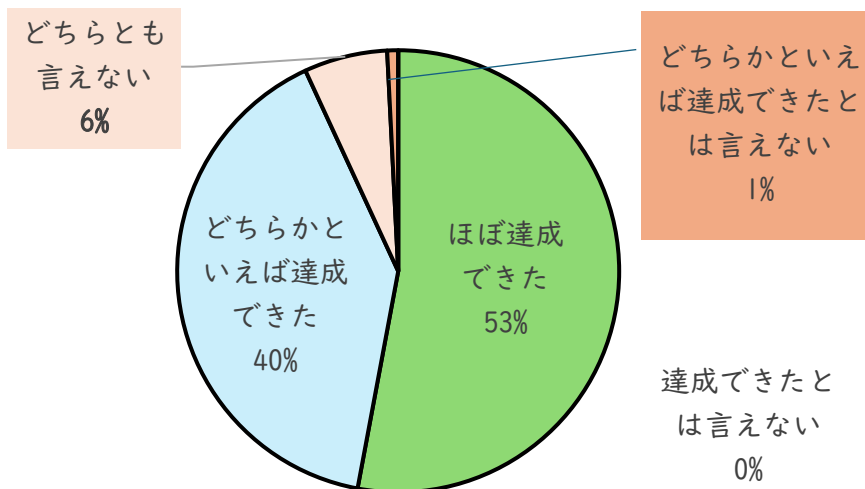
【到達目標1】

様々な自己研鑽に資する動画の中から自分が興味ある動画を視聴することで、あるいは他大学等の研修会に参加することで、自身の教授法について振り返ることができる。



【到達目標2】

自身の教授法についての課題を把握し改善のための方法を考えることができる。



●受講者の感想（自由回答）

今回のFD研修会に参加したご感想やご意見、ご質問などをご自由にご記入ください。
複数テーマからの選択は、受講者をより積極的にFDに参加させる効果が望める。
オンラインでの講座受講方法は価値が高く、今後も継続して頂きたい。
教育機関DXシンポジウムのアーカイブの内容が大変興味深かったです。1コマが20分以内とコンパクトで隙間時間で視聴出来るのも受講しやすいと思いました。
ある程度、自らで自由にテーマを選ぶことができるこのようなFDは有益だと考える。
視聴期間が長くなったため、視聴しやすくなりました。できれば通年開講にして頂ければと思います。
昨年度も動画視聴でしたが、学びになる動画が揃えられているので大変勉強になります。今回提示されている動画で未視聴のものは、時間のある時に見てみようと思います。
研修がいつでも視聴できる動画でできることは、大変助かりました。ありがとうございました。
空き時間に参加しやすかった。
また、ぜひ機会がありましたら動画視聴をしたいと思っております。
教育コンテンツ動画は、自身の興味あるものを選んで時間の余裕のある時に視聴し学ぶことが出来るため、とても良いと思う。次年度も続けて欲しい。
動画視聴のチャンネルが少し多すぎる気もしますが、多くの先生方の要望に対応できると思いますし、自分の知りたい部分についてより深く知ることができるのでこの方法は今後も続けて欲しいと思います。
自身の裁量で視聴出来、内容についても教育の多角性を得ることにつながり、意義深かった。
自分の興味のあるトピックを選んで視聴できるため、非常に有意義なFDとなった。
ボリュームがありなかなか大変ですが、時間のある時に、今回チェックした以外の「自己研鑽FD」対象の動画もチェックしてみたいと思います。
生成AIに関する取り組みの紹介動画はどんどん新しいものが出てきているので、研修動画も随時追加してもらえると助かります。
動画の選択肢とオンラインでできたことはよかったです。
動画リストに新たなコンテンツも載せていたので、気になる項目がたくさんありました。
知りたかったが機会がなく、動画で視聴できてよかった
学外の専門家の講義を動画配信として視聴することで、普段は考えていなかった部分を知る機会になった。

このような機会がないと、自分で動画を見て学習する時間を確保しようとしなくて助かります。また最新の動画を提示していただけるので、検索する手間も削減することができるのでそれも助かります。
様々な情報がたくさんあるので、このような情報が整理されていると興味のあるものを自分で選べるのでとても良いと思います。
全学FDとして自分自身の都合の良いタイミングで受講できるスタイルに大変有難く感じております。
動画視聴一覧を確認するだけでも、大学に勤めるうえで必要な能力や知識等が確認できた。
I'm glad to be given a choice of topics to choose from.
動画をみたものについては、自分の講義の振り返りになった。
振り返り、学びの機会になりました。ありがとうございました。
自身のこれまでを振り返り、今後の改善に向けた気付きを得るきっかけになった。
自身の教授活動を客観的に内省する良い機会とさせていただいております。ありがとうございました。
「大学生の生成系AI活用実態と今後の展望」を受講し、生成系AIの現状と課題について考えることができた。
人文社会学分野での活用に関して、意識した。
常に研究で気を付けることを学べた。
AIの進化について知ることが出来、良かった。
有意義であった。
よくまとまった報告だった。
非常に有意義でした
良かった。
このたびのFD研修会も自己点検を行ううえで大変有意義でありました。誠にありがとうございました。
大変勉強になりました。どうもありがとうございました。
第2回も楽しみにしております。
FD研修会の企画・準備いただきありがとうございました。
大変よい勉強になりました。引き続きよろしくお願いいたします。
自分に不足と感じるスキル等を補うための参考となるものであった。
他大学の教育方法に関するセミナーは興味深く自己の振り返りと取り入れるヒントになると思います。
今回は、英語で実施した講義が1つありまして、よかったのですが、もっと多くあれば、ネイティブの先生方(私も)は嬉しいと思います。

内容は、良いと思いますが、導入・アンケートまでの進め方が難しいので、時間がかかって大変苦労しました。
講義の項目が多く、選ぶのが大変でした。
学科毎の特徴に合ったような教材、カリキュラムがあればよりよいなと思いました。
とくになし
None.
特にありません
とくにありません。

本FD（自己研鑽）の2つ到達目標（自身の教授法の振り返りおよび課題把握と改善方法）に対しては、いずれも50%以上が「ほぼ達成できた」と回答しており、さらに、「どちらかといえば達成できた」の回答も含めると90%以上であった。また、上記の感想、意見等の自由回答からは、自身の都合に合わせていつでも自由に選択・視聴でき、多種多様な教育効果の高い動画を視聴することで自身の教授法の振り返りや改善にも効果があると感じているものが多く、今後も学内FD研修の一つとして継続してほしいとの感想・意見も多くみられた。

第2回 FD 研修会

<実施期間>

2024年9月19日(木) 10:00~12:00

<会場>

佐世保校会場:405教室(地域交流棟2階)

シーボルト会場:S104教室(セキュリティ棟1階)

<講師>

京都橘大学 経営学部経営学科 准教授 西野 毅朗 氏

<到達目標>

- 1.ゼミ・研究室教育に関わる基本的な知識や全国的な状況を知る。
- 2.ゼミ・研究室教育をより良くするためのヒントを得る。

<受講者数>

98.0%(144名/147名)

▼シーボルト校会場

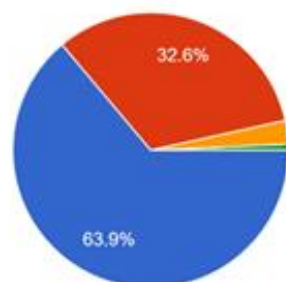


▼佐世保校会場



【到達目標1】ゼミ・研究室教育に関わる基本的な知識や全国的な状況を知る。

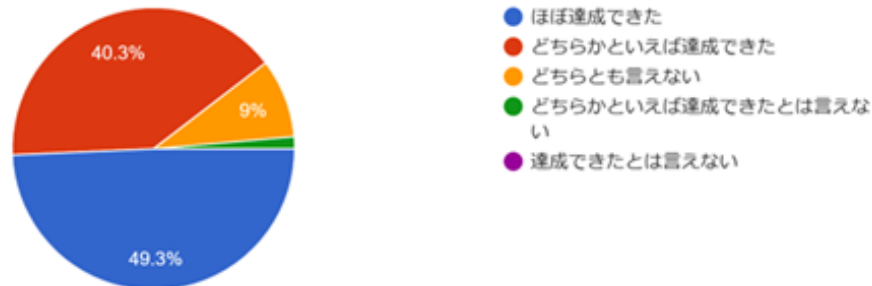
144件の回答



- ほぼ達成できた
- どちらかといえば達成できた
- どちらとも言えない
- どちらかといえば達成できたとは言えない
- 達成できたとは言えない

【到達目標2】ゼミ・研究室教育をより良くするためのヒントを得る。

144件の回答



● 受講者の感想

今回のFD研修会について、ご自身にどのような学びがあったと考えますか。

最近のゼミ・研究室教育における現在地を、国際比較や教育開発研究の見地から全体像として把握することができたこと。また、こまめにグループディスカッションを行うことで、課題の可視化ができたこと。特に、ゼミ学生に「教育目標」やこういう学びによってこういう成長ができることをきちんと伝えることの重要性を感じた。さらに、講師資料のp.13にあった、「卒業研究等とDPの紐づけ」「目標と成長実感の関係」において、教員が掲げる目標に対して、学生の成長実感は低い、というのが印象的であった。

対応策としては、ゼミ説明やゼミのイントロダクションの時に、いわゆる「所信表明」をきちんと行うことで、教員のメッセージを学生に言語化して伝えることを意識していきたい。また、ゼミにおける毎回の目標をゼミの冒頭に伝えるとともに、また学生に毎回書いてもらっているコミュニケーションシートを改善し、到達度を何段階か設定してどの程度達成できたか、その理由も書いてもらうなど、教養セミナーの振り返りシートに近いような学生自らの振り返りの機会を提供することも今後試みてみたい。

「教員が掲げる目標に対して、学生の成長実感は低い」ということ、自身の研究室ではどうなのだろうか？と改めて考えるきっかけを得られたこと（振り返る機会となっていること）がまずは重要だったと思っています。幸い、当研究室は大学院へ

<p>進学する学生もあり、学生にはより高みを目指してもらいたいので、意欲を高める工夫（ARCSモデル、その概念、具体例）を知ることができ収穫の多いFDでした。個々の学生の状況を見ながら、ARCSの対応をしていけたらと考えています。</p>
<p>「教員による指導」と「学生の学習意欲」には相関関係があるため、「学生の学習意欲」を伸ばすためには、「教員による指導」が必要であることを知り、今後のゼミでももっと「教員による指導」を高めるように心掛けたい。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・他学部他学科のゼミ・研究室運営、卒論研究に対する姿勢の違い ・分野におけるゼミの特徴、傾向について ・各先生方のゼミ研究室運営の特色やご苦労について ・学生間のモチベーションや能力の差が年々開きつつあること、学生が本を全く読まなくなったという一定の共有化された意見・認識がグループ対話の中でよく出てきたのが印象的だった
<p>①他学科の先生を含め、他の先生がどのようにゼミを運営しているかを会話をとおして知る機会が得られた。</p> <p>②ゼミのめあてや効用について、歴史的経緯、国による相違などに踏み込んだ話を聞くことができた。</p>
<p>ACRSの満足感（Satisfaction）という項目に関する部分はあまり意識せずに行っていたが、「中間は叱り、最後は褒める」などについて自分なりに工夫して実践してみようと思う</p>
<p>ARCSモデルは、授業設計でも活用しているのでゼミも同じなのだと思います。</p>
<p>I learned about the ARCS method of instruction.</p>
<p>It is difficult for me to provide more positive responses to Qs 3 and 4 above because I have never had a seminar class at this university. However, the FD session seems to have offered some useful advice for teachers in order to develop student motivation and interest. In view of the points made about collaboration, perhaps some of the wider skills and experiences of native English teachers here (i.e. skills that are not necessarily related to language learning) could be utilized from time to time.</p>
<p>It was interesting to hear about other people's seminar classes.</p>

あらためてゼミの在り方を参考にし、柔軟に考えることの必要性
グループワークで同学科の先生、他学科の先生のゼミ教育方法や意見をうかがうことができ、自身のゼミ教育方法において改善できる点、参考にできる点などを認識することができ、今後のゼミ教育に取り入れてみたいと感じた。
ゼミ・研究室教育に関わる基本的な知識や全国的な状況を知ることができました。またゼミ・研究室教育での先生方のご苦勞の一端を知ることができました。
ゼミ・研究室教育の意義や目標、大切にしていきたいことをもちつつ、多様な学生のニーズにあわせて変化してくことが大切だと考えた。ゼミの配置の決定方法から他の学科と異なっており、ゼミの配置をどのように決めるか、提示するかもも研究論文を作成していくうえで重要と考えた。
ゼミについての全国的な情勢が分かり参考になった。また、選抜方法や卒業論文の非必修化など組織的な改善についても、基礎情報が分かり参考になった。
ゼミについては経験に基づいて進めてきたが、改めて本質的なことを思考する必要があることを理解できる機会となった
ゼミには、様々なやり方や歴史があることを知り、大変勉強になりました。ゼミのほかに、夏季休業中を含めて、毎週、就活や大企業向けのインターンシップの指導や日経TESTの勉強会をしているが、半分程度しか効果が現れていないと悩んでおりました。統計的にも、両者の格差を示していただいたので、粘り強く続けていきたいと思えます。また、他の先生方にも、様々な悩みや工夫があり、共有できてよかったと感じました。
ゼミに関する話は大変参考になります。今後のゼミで活用したいと思います。
ゼミに遅れる学生、来ない学生をどう来させるかについて頭を悩ませておりました。今回の研修会では、外の空気に触れる機会、すなわちゼミ以外の関係者に発表する場をあまり忙しすぎない頻度で設けることで適度な緊張感が生まれ、ゼミの出席率や研究進捗のスピードアップが図れるのではないかと思いました。本日のテキストには教育学の知見に加えて本学の先生方への事前アンケートもまとめてくださっていたので、時折見返して学生の指導に活用したいと思います。ありがとうございました。

ゼミのシラバスを具体的にしっかりと作っておくことで、学生にゼミで身につけてもらうことが伝わることを学んだため、来年度から実行することにする。また、学生の意欲を高める ARCS モデルについての説明がとても参考になったため、ゼミ運営に活かしたい。
ゼミの運営について、くわしく知ることができた。
ゼミの授業を行うことに関して、いくつか良い点が挙げられていました。それらの多くは、教えることに関する基本的な点であるように思えますが、再確認することも役に立ちます。ゼミをよりダイナミックにするために、外部のつながりを活用するというアイデアが気に入りました。将来ゼミを担当することがあれば、この講義で得たアイデアを心に留めておこうと思います。
ゼミの初回に、DP とゼミの教育目標との関連性を説明する必要があることを知りました。
ゼミの進め方が参考になりました。
ゼミの進め方や先生方がもつ課題を共有できた。
ゼミの設計は学生の参与が重要。
ゼミの目標が3年次生は研究計画書の作成、4年次生は卒論作成です。学科や他学科の教員とのセッションで、ゼミでのディスカッションの活性化や単位以外に学生に負担がなく学年間交流の機会の持ち方についてヒントを得られました。
ゼミの目標について改めて確認したことがなかった為、新鮮な気づきでした。ゼミ教育という内容に関する研修を初めて受講した為、研究の知見などとても勉強になりました。現時点で実践出来ていることもありましたが、出来ていないこともあった為、今後実際に取り入れてみたいと思いました。
ゼミの歴史のところは、知らないことが多く興味深かったです。
ゼミは担当していないが、問題点や対処を学ぶことができた
ゼミは担当していませんが、教養セミナーにも共通する内容があって、同じ学科の先生方と一緒に様々意見交換・情報交換ができ、自身の振り返りにつなげることができたのでよかったです。同じ学科でもこのトピックで話をする機会が今までなかったので、とても有意義な時間でした。

ゼミを運営するのがはじめての経験であるため、ディスカッションや発表の工夫としてどのようなものがあるかを知ることができたことが最もよかった。
ゼミを持たない者として、持つことが出来たらという仮定での学びはあった。
ゼミを担当したことも、受講した経験もないため、大変勉強になりました。(カナダの大学ではゼミがなかった)
ゼミを担当していませんが、授業を担当するにあたり役に立つと思われるヒントを得ることができました。
ゼミ運営における意見交換のしやすさの雰囲気づくり等の工夫について、他学科の先生からアドバイスをいただいたので是非取り入れたいと思いました。
ゼミ運営については、今も試行錯誤しているのが現状だが、生徒の自主性をどう引き出すかについてグループワークにおける他の先生の実践を聞き、自らのゼミで取り入れることができるものがあることを発見したのが一番の収穫であった。更に、今までともすれば等閑視しがちであったゼミの目的という点についても、この機会に振り返ることができたように感じている。
ゼミ運営の悩みが相談ができていなかったが多くの先生とフラットな状態でディスカッションができて良かった。前向きに取り組みたいと感じた。
ゼミ運営は、自身の指導教員のゼミ運営をベースにして進めているので、他学の状況や他の先生のコメントを拝見して、参考になりました。 また、講師の先生からは「ゼミ教育に関する研究知見」が示され、解説して下さっていました。これまで、経験則的に取り組んでいたゼミでの学習活動が、科学的にどのように説明できるのかということを示されたので、今後、ゼミ活動における学習目標を学生に説明する時の参考にさせていただきたいと思いました。
ゼミ運営は教員1人の裁量に任せるだけでなく、他教員との共有やカリキュラム全体への見直しに繋げる取り組みが重要であると感じました。
ゼミ活動の活かし方などにつき、多くの情報を得ることができた。
ゼミ活動の定義と、学生の知識・スキル・態度の3つを醸成について、体系的な学びを得られたことが有意義であった。特に、手探りで検討してきた点についてある種の採点ができたことが良かった。

ゼミ教育についての基本事項や教育内容、工夫の余地などについてあらためて体系的に学ぶことができた。
ゼミ教育について有意義なお話を聞いた。また、意見交換でもほかの先生がどのようにゼミ教育を行っているかを聞き、参考にしようと思った。
ゼミ教育に関して、これまで自らの経験などを通して、模索しながら行ってきたが、その内容が大きく間違っていなかったと言うことがわかった反面、足りない部分もあることがわかったのが、一番の学びだと思います。 また、コロナ以後、コンパなどの教室以外での活動が制限、停滞していることも再認識できた。
ゼミ教育に関する研究知見の中の「学生の共同体意識が高いほど成長実感が高まる」ということに勇気をもらいました。
ゼミ教育に関する種々多様な工夫を学ぶことができた。
ゼミ教育のトレンドが理解できた。
ゼミ教育の基本に立って、学生たちと接する必要があることを再確認した。 また、様々な学生がいる中で、個別に柔軟な対応が求められると感じた。 これまでの自身のゼミ教育で、良かった点は継続し、不十分な点は改めて行く必要があると感じた。
ゼミ教員が個人的に力不足だと感じている点には、実は組織的協力が必要なことがわかった。特に、学生相談室の下に「サポートリンクス」を置く必要が本学にもあると思う。
ゼミ研究室教育に関する全世界的・全国的な状況を知ることができた。それに加えて、ゼミ運営についてどのような取り組みが具体的に行われているのかが、調査に基づいて示されており、大変参考になった。
ゼミ指導を改善しようと思える気づきがありました。
ゼミ生の学習意欲が他の因子、共同体意識や汎用的技能など成長の実感につながることをすることができた。改めて、指導の充実度を高めていかねければならないと感じた。具体的には、大学院生はいないが3, 4年生の縦のつながりや、学外とのつながりを取り入れ、このなかで、ゼミ研究室の取り組みや価値について理解してもらい、関心を高めてもらえるように努めたいと考える。

ゼミ担当学生が1学年2名と少ないので、個別指導になりがちでした。ゼミ生同士で活動や研究を高められるか気になっていたのも、とても参考になりました。
それぞれの教員対応方法をきけて参考になった。
とくに、グループワークを通じて、さまざまな学部・学科の先生の取り組みや悩みを聞き、ディスカッションすることで、自分自身のゼミの問題点や、自分自身が持っていたゼミ指導での悩み（とりわけゼミ生の学習意欲等について）の解決につながるヒントを得ることができた。
どんなにオンライン授業が浸透しても、対面主体のゼミは残るということ。
フィールドワークを充実させるとともに専門教育の知識の習得の場として学外活動を推進する。
ほかのゼミの運営方法なども知ることができ、参考になった。アンケートの結果などから、指導する教員の手ごたえと学生の成長実感の間に、大きな開きがあることに驚いた。細かく確認しながら指導する必要性を感じた。
マンネリ化の打破が重要、ゼミ説明会の重要性、等について学ぶことができた
一方通行の教育スタイルの問題点を認識出来て良かったが、本人だけで改善出来るか不安ですね。
課題を出題して2名の学生で考えてもらい発表するなど、様々な工夫があり勉強になった。学生との距離感については、共通課題なのかなと思った。
外部との関係強化を実業だけでなく学術団体との関係も視野に入れること。
学科によって学生の特徴が異なるため、学科ごとに対応が違うことが分かったこと。
学生たちの相互連携が有用であることが分かった。卒論のピアレビューを実施しようと考えている。
学生とのコミュニケーションの取り方。
学生とのコミュニケーションを積極的に取り、学生の意欲を高めるように努めることが必要である。
学生の意欲を高める工夫（ARCSモデルの適用）が興味深かった。
学生の意欲を高める工夫(ARCSモデルの適用)が参考になった。他方、同氏の説明内容がすべてであるという理解が浸透するのは危険だと感じた。この手の内容は正が

<p>多く存在する。あくまで、参考になった部分だけ吸収するスタイルで、なんでもかんでも同氏の内容に合わせる必要がないという理解（学び）に至った。</p>
<p>学生の意欲を高める工夫（配付資料 21-22 頁）について、「具体例」に挙げられている要素の多くはすでに取り組んでいるものであるが、検討・導入してみたいと思われるものもいくつかあった。とりわけ印象に残っているのは、ARCS モデルの Satisfaction の「⑩外発的な強化」のところで触れられた「中間は叱り、最終は褒める」に関する話である。卒業論文の指導にあたっては、研究計画を立てる比較的早い段階から関与することで学生の研究を適切な方向に誘導することができるという点は大いに参考になった。</p>
<p>学生の意欲を高める工夫が、大変役に立った。グループ討議で、他学科の先生方のゼミ教育の工夫、悩みや解決方法など、自分のゼミ教育のヒントになる事が多くあった。</p>
<p>学生の意欲を高める工夫について、具体的に学ぶことができた。</p>
<p>学生の学修意欲を高めるための方略について、日頃行っていることはてきせつであることが 確認できました。</p>
<p>学生の探求心の喚起は重要です。</p>
<p>学生の当事者意識を引き出す実践方法を聞くことができた。</p>
<p>学生の特性や level に合わせて目標の到達点を変えることも考えていいのだと気付かせていただきました。ただ、公平性を保ちながらというところは、意識しないと ないと思いました。</p>
<p>学生への関わり方を工夫しようと思いました。いろんな方法をご提示くださったので、出来ることは取り入れていこうと思います。</p>
<p>学生間のディスカッションのやり方を含め、工夫できる点はまだあると学んだ。</p>
<p>学生個人の学習意欲を高めるための工夫だけでなく、学生の共同体意識を高めることも非常に重要であることが分かった。</p>
<p>既知のことが多かったため、学びがあったとは言い難い。</p>
<p>教員と学生との意識の差をどのように埋めていくか考えるきっかけになりました。</p>

<p>教員による指導が十分に行われると、学生の学習意欲や成長の時間などが高くなることを学んで、さらに一人ひとりに対する指導を心がけたいと思っております。またどのように学生の意欲を高める工夫について学びました。</p>
<p>教員の目標と学生の成長実感に乖離があり、”理念どまり”になっているとのことのお話が印象に残りました。時間や労力等の費やせるコストの中でなるべく効果を高めるような取り組みや手法の導入、知識の拡充をしていくしかないように感じました。あまり悲観的にならないようにしたいと思いました。</p>
<p>教員生活が長いこともあって、本日、ご講義いただいた内容については、大変申し訳ないのですが、特に新しい学びとなることはありませんでした。</p>
<p>教授する側が、専門職になるために必要な能力として卒業研究を通して教えている内容が、意外と学生には意識されていないこと。もしかして、学生はやらされている感や単位のために仕方なく研究している感があるのかもしれないと感じた。卒業論文の作成を通してこれらのどのような部分が将来的に役に立つのかをきちんと言葉で伝えていくことが必要だと感じた。</p>
<p>研究室運営において、悩みの共有やその改善策が見いだせたのでよかったです。</p>
<p>研修会の展開の仕方が参考になった。また、ゼミ教育に関する研究知見などが興味深かった。</p>
<p>御教示いただいた内容が一般的なものが多く、初めて耳にするような内容はあまりなかった。試してみたことはあるが、効果がなかったという提案が多かった。ゼミの学習指導効果があまり実感できない主な原因がどこにあるのかという部分にもやや感が強い。テクニカルな指導の工夫でそこが改善されるのだろうかという疑問に思う。</p>
<p>講師の西野先生の講演も大変参考になりましたが、グループワークで他の先生のゼミ教育の苦労や悩みを共有できたのが良かったです。ゼミ運営の参考になる話もたくさん聞けました。</p>
<p>講師の方が出してくれた Tips が参考になった。</p>
<p>国際社会科学のゼミ配属は時期や方法に問題があるところ、学生の潜在的な関心がゼミ配属に反映されておらず、結果、学生に対して十分な学びの機会が提供されていないことが改めて認識された。</p>

国内他大学・海外での状況について知れたこと。卒業研究が必須とされない流れがこれから日本にも来るかもしれないことを覚えておこうと思う。

今していることの振り返りと、今後に向けた検討ができた

今回のFD研修会では、ゼミ教育において学生同士の学び合いを促進することの重要性について、改めて深く考える機会となりました。特に、先生方とのグループワークを通じて、優れた事例を知るとともに、学生が相互に教え合うことで学習が定着する点が非常に印象的でした。学生が主体的に学び、仲間との協働を通して新たな視点を得られる環境づくりの大切さを再認識しました。

また、学生同士の学び合いを進める際には、ハラスメントのリスクにも注意が必要です。今後は、学生間の学び合いを促進しつつ、ハラスメント防止のための体制も整えたゼミ運営を目指していきます。

今回のFD研修会について、ゼミ教育の背景・歴史のおさらい、私自身のゼミ教育の目的の再確認、学科DPの視点からの評価基準の設定、卒業論文の評価基準などについて勉強になりました。

今回のゼミ教育に関するFDを受講し、大変多くの学びを得ることができました。特に、教員と学生の目線のギャップに関する議論は非常に興味深く、日常の授業運営においても常に意識すべき重要なポイントであると感じました。学生がどのように授業を受け止めているのかを理解することで、より効果的な授業設計や指導方法を模索するきっかけとなりました。

また、授業の工夫について具体的なアイデアや方法論を学ぶことができ、自身の授業にどう活かしていけるか考えを巡らせています。特に、学生の主体性を引き出すためのアプローチや、フィードバックを授業改善に活かす方法についての議論は、今後の授業実践に大いに役立つと感じました。

このFDを通じて得た知見は、ゼミ教育だけでなく、日々の教育活動全般においても適用可能であり、今後の教員生活においても継続的に学び続けるべきテーマであると実感しました。

今回のゼミ教育に関する研修では、多くの学びを得ることができました。講師の方が大学教育の専門家でしたので、研修の内容は役立つものであり、本日の内容を今

<p>後のゼミ運営に取り入れていきたいと感じました。和やかな雰囲気の中、他の先生方と意見交換し、学び合うことができました。ありがとうございました。</p>
<p>今回のゼミ教育を通じて、教員として、学生の主体的な学びを促す指導方法が効果的であること、また、ゼミでの共同体意識が学習面や就職活動において良い影響を与えることがわかりました。</p>
<p>今後ゼミを担当した際には、運営方法や学生への対応について大変参考になった。</p>
<p>今後の学生指導につながる気付きがあった。</p>
<p>最終学年であることから、DPも頭に入れながら、大学卒となる学生が「研究」が何なのか理解して臨床の場に入れるようにということを考え、ゼミで卒業論文の指導を行っております。毎週、ゼミを実施し、担当学生の就職についても介入し、看護師国家試験の模試状況や勉強状況について確認し、アドバイスならびに弱点ポイントについては補講を行い、学生の経済状況や家庭に関する相談事にも応じる、とゼミは幾分負担が大きいことと考えておりました。しかし、受け持ち学生数が他領域に比しだいぶ少数であったことを初めて知り、負担という考えは、不適切であるとわかりました。学習の意欲の面で「変化性」ということに気を配ったことがなかったため、今後検討していきたいと思います。</p>
<p>最終年度なので、学びを生かす機会が限られるのが残念です。</p>
<p>時代（教育環境－教師と学生との関係性）の変化と問題の本質について学び（気付き）があった。</p>
<p>自身を振り返るためのチェックポイントや、他の先生方の取り組みなどを教えていただきました。</p>
<p>自分の立場でコミュニケーションをしてしまわないように自分が行ったことに焦点化されてしまわないようにというのは最も重要なことであると認識している。</p>
<p>自分自身が抱えている課題は、意外にも他の先生方も共感できる面が多くあり、新たな発見ができました。今後、どのようにゼミ指導に反映・有効化できるか不透明ですが、勇気を頂けたと実感しております。</p>
<p>取り入れている内容が資料のすべき内容として例示されていたので自信をもって進めていきたいと思った。また、様々な意見が活発に出てこれからのゼミ改善の工夫のヒントになった。</p>

授業等での活用や応用、学生理解に役立てることができる。
将来ゼミをもつなら役に立った
少人数教育の充実度を向上する手立てを知ることができた点。
上記の通りです。
上手くいかない場合のヒントを得られた
正式な学会等への参加は学部生には難しいが、学会よりも気軽に外部に向けて研究発表できる機会を設けることができるよう模索したい。もちろん参加は任意で希望する学生のみであるが。
先生のご研究の成果にもございました学習共同体を軸にしたお話から、私もゼミ教育について考えていけたらと存じました。
専門ゼミナールや卒業研究での目標・方針などが再確認できた。
専門知識とゼミ生のニーズに対するバランス
浅田学長がおっしゃった、動画撮影も効果的だと思いました。
全国的な動向もそうですが、他の先生方のゼミ運営に対する意見を知ることができたというのが一番の学びであったと考えます。自分自身のゼミ運営が適切なものであるかどうかと試行錯誤しながら進めていますが、他の先生方の多様な運営方法を知ることにより様々な角度から取り組むことの重要性に気づきました。また、意見のなかには、全く同じ方法というわけにはいきませんが、少し参考にした形で進めたいと思うものもありました。こうした情報を得ることができたのが、私にとっての学びであったと考えます。
卒業研究を指導する際の学生の受け取りを意識するきっかけになった
卒業論文の重要性が、本学では十分に浸透していないと感じています。教員間でも、卒業論文を重視する先生もいれば、卒業論文を重視しない先生もいます。大学に入学し、就職先が決まり、卒業さえできれば良いという考えでは、「学生が成長するための大学」という大学本来の意味は薄れますし、「簡単に卒業できた」ということが保護者、高校、友達の間で広がれば（すでに広がっている可能性もありますが）、大学の存在意義も問われることになると思います。昨年度（令和5年度）担当した4年生の最後（第30回目）のゼミで、本学で過ごした4年間をとおした感想をゼミ生一人一人に話してもらいました。一人の学生の

<p>発言に、「本学で学んだことは何もありませんでしたが、卒業論文だけは頑張り・思い出となりました」という一言がありました。その学生は、現在、国家公務員に就職し、頑張っています。先日会った際に、就職してからも卒業論文を見ることがあると話をしていました。</p> <p>本学では、卒業論文の大切さを浸透させることが重要ではないでしょうか。</p>
<p>卒論指導に個別面談を組み合わせている先生がおられ、早速、自分も実践してみたいと思った。</p>
<p>他の先生との議論の中で、デマンド（学生の欲すること）とサプライ（教員が提供すること）に溝がある際の解決策が示され、さらにこの点は講師の先生の言及もあり有意義であった。</p>
<p>他の先生の考え方が聞けてとても勉強になった。</p>
<p>他の先生方がどのような工夫をしていたのかを知ることができました。講師の先生のお話を通して、どのような取組にどういった成果が伴うかがよく理解できました。学生の意欲を高める工夫は全て参考になる内容でしたので、今後取り入れていきたいと思います。</p>
<p>他の先生方のゼミでの取り組みを知ることができて、興味深かったです。</p>
<p>他学科の先生の実践はとてもためになり、さっそく自分のゼミにも導入してみた。</p>
<p>他学年や外部との交流といった変化を持たせることは、これまでゼミ運営ではあまり行えていなかったもので、今後積極的に取り入れてみたいと考えました。</p>
<p>他学部でのゼミの運営方法</p>
<p>他学部他学科の先生たちのゼミのやりかたや最近の学生の傾向などを共有できて参考になった。</p>
<p>他大学のゼミの状況や課題などが確認できたこと、それにより自身のゼミ活動の立ち位置が理解できたこと。</p>
<p>多様な学生を対象として、ゼミ運営、教育に迷うことがあるが、ゼミの教育目標に向けて導いていけばいいことを再確認した。またゼミ教育は少人数教育で、学生の能力を伸ばすことができるものであり、意識していきたいと考える。学生の学習意欲を高める工夫を継続し、変化性をもたせることや、学生の成功を経験する機会を与えるために、細かい達成機会や発表の機会を準備することも意識していきたい。</p>

<p>大学外での研究室の飲み会？などのレクをしない先生の方が多数で安心しました（自分が少数派だと思っていたので）。</p>
<p>大教室での学びについて</p>
<p>長年、芸術系で卒制の指導をしていましたが、本学での卒研に向けて参考になりました。</p>
<p>当日配布資料スライド13ページの教員と学生の成長実感のグラフがためになりました。教員が目標にしている事柄の達成率がかなり低いことがわかりました。</p>
<p>当方は学部ゼミ40名（基礎演習13名、専門演習14名、卒業論文13名）、大学院ゼミ20名（修士課程13名、博士後期課程7名）、合計60名のゼミ生を日常的に担当している。今回のFD研修会の内容は初心に帰り、ゼミ指導研究の専門的見地からの講話内容をお聞きして、今後のゼミ運営の組み立てを考える際の重要なヒントを頂きました。誠にありがとうございました。</p>
<p>同席した先生がどのようなゼミ運営をされているのか、その状況を伺うことが出来たので非常にためになった。あとは、自身がこれまで行ってきたゼミ運営が間違っていなかったことを改めて再確認できたことが収穫です。</p>
<p>日本のゼミ・研究室制度の特殊性と学生との距離感（ハラスメントの懸念）</p>
<p>配慮が必要な学生関係の話がとても興味深かった。実際に「配慮した」結果、それ以外の学生が不満を持つことがあり、どうしたら良かったのかと考えさせられている。ケースバイケースで正解があらうはずもなかろうと思うものの、少し安心できたところもあって救われた。</p>
<p>配慮が必要な学生支援の仕組みの整備およびコーディネーター（仕組みにおける各部署への適切な情報送致）が必要なこと。 ゼミ配属の決定方法に改善の余地がありそうなこと。</p>
<p>漠然と感じていたゼミの問題点を言語化できた。</p>
<p>普段、意見交換の機会が少ないゼミ教育について、貴重な情報交換の場になった。</p>
<p>文系と理系の違いで、ゼミの対応が異なる（これは以前からわかっていたことではあるが）ので違和感を持つ内容も一部にはあったが、取り入れる必要のある内容も多く、うまく融合させながら今後のゼミ教育に活かしていきたいと思います。</p>
<p>密着指導～放任のちょうどよい加減について改めて考えさせられました。</p>

目的・目標を意識してゼミの運営を行うことの意識を強く持つこと。

他学科の先生のゼミの工夫についてお話が聞けた。

様々な学生（学習意欲、レジネスの違いなど）がいる中で、毎年、悩みながら行っている状況です。先生達と意見交換するなかで、画一的な方法がなく皆さん同じような状況だと分かり安心しました。一方で、他の教員と意見交換することやカリキュラム上の課題として検討していく視点も必要だと理解できました。今後に生かしていきたいと思います。

様々な教授法やアプローチが紹介され、学生の多様なニーズに応えるための工夫が求められることを再認識しました。

2024 年度 FD 研修会（教養セミナー）

教育開発センター委員 吉光 正絵
国際社会学部 国際社会学科 教授

1. 2024 年度 教養セミナー研修会

2024 年度は、教養セミナー担当教員向けに、「2024 年度 教養セミナー事前研修会」（4 月 1 日開催）、「2024 年度 教養セミナー振り返り研修会」（9 月 19 日開催）を実施した。

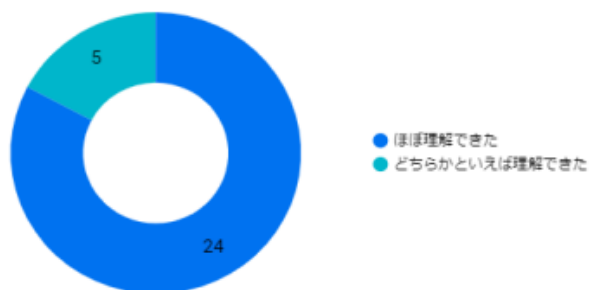
「2024 年度 教養セミナー事前研修会」

日 時：4 月 1 日(月) 14 時 30 分～16 時 00 分

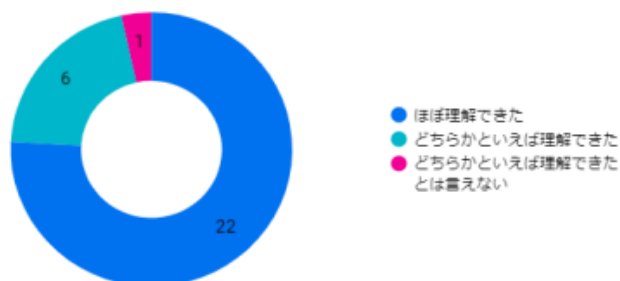
場 所：佐世保校：405 教室 / シーボルト校：M104 教室（中央棟 1 階）

回答数：29 人（参加者数：31 人）

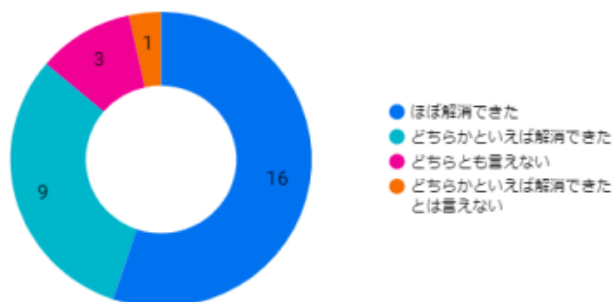
3. 本学の教養セミナーの目的について理解することが出来ましたか。



4. 教養セミナーの進め方について理解することが出来ましたか。



5. 教養セミナーを担当する上での不安や疑問は解消されましたか。



▼シーボルト校会場



▼佐世保校会場



事後アンケートから、担当教員は、「事前研修会」に参加することで、円滑に「教養セミナー」の授業を進めていくための心理的・技能的な準備を整えることに成功できたといえるだろう。

自由記述欄では、「初めて受け持つ授業なのでとても不安でしたが、説明で得た情報プラス、他の先生方とのグループワークに寄って得た情報などとても助かりました」など、グループワークも非常に有意義であった回答があった。

これらのことから、「事前研修会」の効果が十分高いことが明らかである。

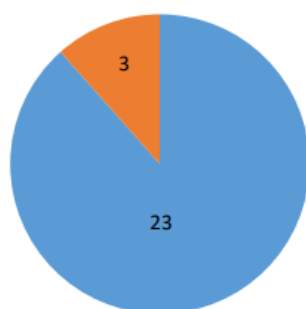
「2024年度 教養セミナー振り返り研修会」

日 時：9月19日（木）13時00分～14時30分

場 所：佐世保校：405教室 / シーボルト校：M104教室（中央棟1階）

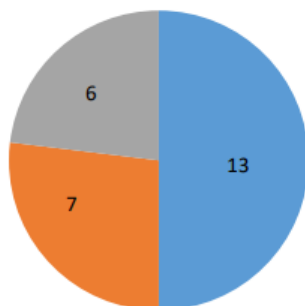
回答数：26人（参加者数：31人）

3. 本日の振り返り研修会の目的について理解することが出来ましたか。



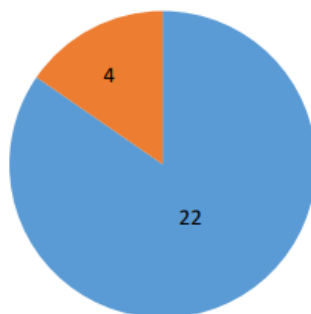
ほぼ理解できた	23
どちらかといえば理解できた	3
どちらとも言えない	0
どちらかといえば理解できなかった	0
理解できなかった	0

4. 教養セミナーを担当する上での不安や疑問は解消されましたか。



ほぼ理解できた	13
どちらかといえば理解できた	7
どちらとも言えない	6
どちらかといえば理解できなかった	0
理解できなかった	0

6. 次年度以降の振り返り会研修会の開催について、ご意見をお聞かせください。



開催してほしい	22
開催しなくてもよい	4

事後アンケートから、「振り返り研修会」に参加することで、「教養セミナー」の不安

や疑問が解消されている教員が過半数になっていたことがわかる。

ただし、「目的」については、大半が「ほぼ理解できた」と回答しているが、「不安や疑問は解消されましたか」との問いには、「どちらともいえない」との回答が6名程度あった。ただし、「次年度以降も開催してほしい」との意見が大多数であったため、次年度以降の開催も望まれていることが明らかになった。自由記述欄では、「さまざまな学科のニーズは違っているが、先生方が適宜、テキストを使いこなして頂いていると分かって、心強く感じた。」「色々学科によって進め方が違うことがわかった。」など、学科や専門領域ごとに、共通のテキストをベースに、応用して使いこなしている点について、グループワークで使いこなし方の共有が行われていた点などが確認できた点が、満足度に影響していると考えられる。これらのことから、「事前研修会」の効果が十分高いことが明らかである。

▼シーボルト校会場



▼佐世保校会場

